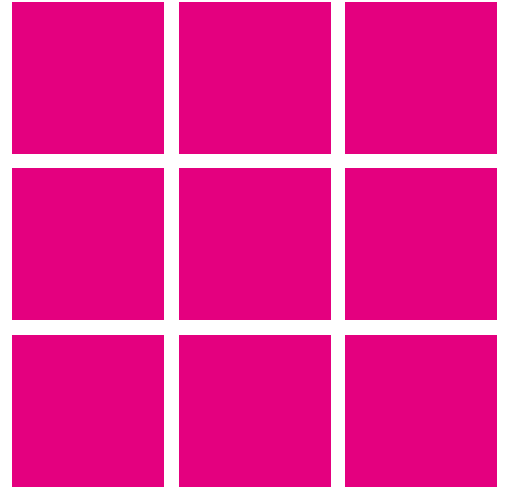




外国語学習のめやす

2012

高等学校の中国語と
韓国語教育からの提言

PDF版



公益財団法人
国際文化フォーラム
THE JAPAN FORUM
日本国際文化交流財団
일본국제문화교류재단

つながりの実現をめざした外国語教育の提言

国や地域の境界を超えて

人、モノ、情報が共時的かつ大量に行き来し
地球規模で社会的、経済的、文化的変化が起きています

国際的な相互依存関係はますます緊密化し
一国では解決できない人類共通の課題が山積しています

これらの課題を解決するためには
多様なことばや文化的背景をもつ人びとと
コミュニケーションし協働していくことが必要です

多言語多文化が共生する
21世紀のグローバル社会を創りあげていくためには
互いのことばと文化を学び
自他のつながりを深めていくことが求められています

外国語教育こそ

時代の要請であるグローバル社会を生きぬく力を育むとともに
若者たちの人間形成に貢献する使命と役割を担っています

いま日本の高等学校の中国語と韓国語教育から
新たな外国語教育を提案します

提言1 多言語・多文化のグローバル社会づくりへの参画

「外国語学習のめやす 2012」は、外国語教育を人間教育の一環と捉えています。外国語を学ぶことを通して、21世紀のグローバル社会の一員としての自覚をもち、その社会づくりに貢献できる人を育てることをめざしています。地球はひとつであることを多くの人が認識しているにもかかわらず、ことばや文化の違いが生む摩擦や緊張関係は後を絶たず、その調整をすることは容易ではありません。多様なことばや文化的背景をもつ人びとが共生し協働できる社会を創りあげるためには、多様性を尊重しながら調整し、共有できる価値を模索するという地道な作業を続けていかなければなりません。外国語教育を通して、新たな社会の担い手である若い人びとの異文化間調整力やグローバル社会を創る力を育てたいと思います。

提言2 問題解決の鍵を握る対話力の育成

「外国語学習のめやす 2012」は、ことばがつなぐ世界は無限だと捉えています。総合的なコミュニケーション能力を育成することによって、他者とながかり、多様な文化とながかり、グローバル社会とながかることをめざしています。日常的に多くの人びとが国境を超えて移動し、あるいは飛躍的進歩をとげた情報通信技術を使って、共時的かつ直接的に世界中の人と交流するという現象はこれまでは考えられなかったことです。ことばや文化の相違から生じる緊張を解くのも、共有できる価値を創造するのも、最終的には個と個の間で交わされる対話と合意形成にかかっているのではないのでしょうか。多様な背景をもつ人びとと意思疎通し、問題解決をしていくには、私たちはこれまで以上に、ことばで正確に考えや気持ちを伝えあう必要があります。グローバル社会の主要な行動主体としての個々人の間で交わされる対話こそが、21世紀の社会づくりの鍵を握っていると考えます。

提言3 複数言語を学ぶ機会の創出

外国語学習者にとって、新たなことばとの出会いは、新たな人との出会いをもたらし、自他の交わりを深め、つながりを実現させます。ことばの学びは、自らの思考を深め、世界観と視野を広げてくれます。まさに人間的成長を促し、自己を確立させる素晴らしい経験をもたらしてくれるのです。21世紀を生きる若い人びとにとって、いまや外国語を学習することは必須のことです。彼らが、さまざまなことばや文化的背景をもつ世界の人びととつきあい、多言語で交流を行なうことができるように、多様なことばを学べる教育環境を日本の学校に整備しなければなりません。若い人たちが複数の外国語を学ぶことの教育的意義は計り知れないものがあるからです。

提言者

任喜久子／植村麻紀子／釜田聡／金順玉／金孝卿／胡興智／胡玉華／千場由美子／當作靖彦／中川正臣／中野佳代子／阪堂千津子／藤井達也／森茂岳雄／山崎直樹／山下誠（五十音順）

「外国語学習のめやす 2012」作成の背景

「外国語学習のめやす 2012」（以下「めやす」という）では、隣人・隣国のことばである中国語と韓国語を「隣語」（りんご）として、英語以外の外国語のなかで重要視し、「めやす」づくりに取り組んできました。

なぜ隣語教育のめやすづくりに取り組んだのか

日本の高校では、2009年6月現在、831校が中国語を、420校が韓国語を開講しています（文部科学省調査）。履修者数で見ると、中国語が19,751人、韓国語が8,448人でわずか0.25%という極めて少ない状況であり、開講状況は常に流動的です。隣語を学ぶ日本の高校生が全体の1%にも達していないという現実を見過ごすわけにはいきません（16頁参照）。また学習形態も選択科目として高校3年間で4～6単位、担当教師は非常勤講師もしくは他教科の教諭が兼任するのがほとんどです。教師の研修や研鑽の場も限られており、教材も不足しています。

こうした現状を改善するために、公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）は、1994年度以来、中国語・韓国語教育の関係者とともに、各種の調査の実施、情報誌の発行、ウェブサイトでの情報提供、教師ネットワーク、教員研修の開催、教員免許取得講座開講への協力、高校用教科書や副教材の編集制作協力、授業アイデア・写真素材提供、高校生向け学習奨励（海外語学研修、弁論大会等の実施）などを行ってきました。その間、高校における両言語の教育は一定の進展をみせましたが、現行の高校の学習指導要領では、英語以外の外国語科目は英語に準じるとして具体的な記述がありません。中国語と韓国語に関する学習指導の指針がないだけでなく、何より学校や教育委員会の後押しがないといった制度的な位置づけの脆弱さが大きな課題となっていました。

学習指針と共通の枠組みとしての役割

2006年1月より、TJFは日本の高校における中国語と韓国語教育の質的向上と促進を図ることを目的に、課題の1つであった学習指針の作成に取り組んできました。「めやす」は、隣語を含めた外国語教育の新たな理念、教育目標、学習目標とともに、それらを達成するためのカリキュラムデザインや授業設計の方法、さらに具体的な学習活動や学習内容を提案するものです。

「めやす」が、日本の高校の中国語・韓国語の先生方に共有され、授業設計や教材開発、教師研修、あるいは高校と大学間の学習の連携を図るための共通の枠組みとなることも期待されます。高校から大学への縦の連携（アーティキュレーション）や、高校間、クラス間の横の連携が確立することにより、学習者は一貫性のある学習を継続することができるようになります。また、高校や大学の中国語・韓国語教師が共通の土俵の上に立って、教育目標をはじめ内容や方法を話しあえる状況を作ること重要であると考えています。もちろん全員が同じ目標に向かって、全く同じ内容を教えるような教育の標準化をめざしているわけではありません。

外国語教育全体を推進するために

「めやす」は、日本の高校における中国語と韓国語教育の立場からの提言ではありますが、日本の外国語教育全体を推進するための一石となれば、それに勝る喜びはありません。そのためにも、今後中国語・韓国語以外の外国語教育関係者をはじめ、言語教育、国際理解教育、ひいては教育関係者全体との連携を深めながら、グローバル人材づくりと学習者の人間的成長に貢献する、より普遍性のあるものに成長させていきたいと考えています。

学習対象言語の呼称

「めやす」で取りあげる学習対象言語については、「中国語」に関しては、漢語、華語など、「韓国語」に関しては、朝鮮語、コリア語など、さまざまな名称が教育現場で使用されています。無論それぞれの名称を尊重するものですが、「めやす」では、それらの総称として、それぞれ「中国語」と「韓国語」という名称を使っています。

「外国語学習のめやす 2012」の内容構成

教育理念

他者の発見 自己の発見 つながりの実現

教育目標

ことばと文化を学ぶことを通して、
学習者の人間的成長を促し、
21世紀に生きる力を育てる

学習目標

総合的コミュニケーション能力の獲得

キーコンセプト：3領域×3能力+3連繋

3領域：言語・文化・グローバル社会

3能力：わかる・できる・つながる

3連繋：学習者・他教科・教室外

コミュニケーション能力指標

15話題分野・4レベル別能力記述文一覧

言語領域のできる能力の
学習到達目標を指標化

授業づくり

カリキュラムデザインの考え方、
評価の方法、授業設計や効果的な
教室活動等の解説

学習目標を達成するための 学習内容・学習活動 (ウェブサイトに掲載)

学習内容

話題分野別・レベル別表現例、
話題分野別語彙例、文化事象例、
グローバル社会の課題例、
3連繋の取り扱い

学習活動

年間指導計画案
話題分野別・レベル別单元案

つながりの実現をめざした外国語教育の提言……………002

I. 「めやす」がめざすもの……………009

1. 外国語を学ぶ意義……………010

2. 隣人・隣国のことばを学ぶ意義……………013

3. 他者の発見 自己の発見 つながりの実現(教育理念)……………017

4. 人間形成とグローバル社会を生きぬく力の育成(教育目標)……………018

5. 総合的コミュニケーション能力の獲得(学習目標)……………019

コミュニケーション能力指標(can-do statements)……………033

II. 「めやす」が提案する授業づくり……………055

1. 理論から実践へ……………056

2. カリキュラムデザイン……………062

3. 「めやす」に基づいた評価……………066

4. 「めやす」を授業活動に取り入れる……………077

授業づくりの参考資料……………089

「学習のめやす」プロジェクトの歩みと今後……………108

おわりに ……………111

コラム

隣語をもっと
学ぼう

.....016

「文化」をこう見る

.....026

「韓国語」とは？
「中国語」とは？

.....024

世界が注目！
21世紀型スキル

.....030

教科書調理法

.....065

プロジェクト型学習に
チャレンジ

.....087

自分、友だち、家族／
自分と身近な人びと

.....039

時間割、クラブ活動／
学校生活

.....040

毎日の過ごし方、
家族内での決めごと／
日常生活

.....041

食べ物の好き嫌い、
食事の習慣／食

.....042

服、アクセサリ、化粧／
衣とファッション

.....043

部屋のようす、
家のしくみ／
住まい

.....044

健康にいいこと、
医者にかかる／
からだと健康

.....045

休日の過ごし方、
友だちとの約束、
マイブーム／趣味と遊び

.....046

値段交渉、
カタログショッピング／
買い物

.....047

旅の計画、ルート検索／
交通と旅行

.....048

おつきあいのルール、
メール・電話・手紙／
人とのつきあい

.....049

記念日、年中行事／
行事

.....050

わが町自慢、
世界のニュース／
地域社会と世界

.....051

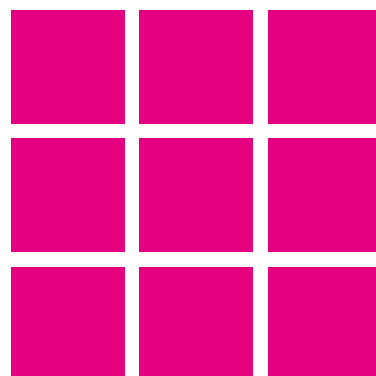
季節、自然災害、エコ／
自然環境

.....052

私のことば、
あなたのことば、
世界のことば／
ことば

.....053

Can-do
15テーマ



I. 「めやす」がめざすもの

1. 外国語を学ぶ意義

**グローバルな資質・能力を身につけ、
多様な人びととつながることができます。**

1.1 外国語を学んでこそ身につく力

外国語を学ぶ意義、とりわけまだ成長段階にある若い人びとにとってどのような意義があるかをあらためて考えてみたいと思います。

グローバル人材としての素質・能力を育む

多様なことばと文化が共生するグローバル社会を生きぬいていくためには、世界の舞台で適切に他者と対話する力や、つきあっていく力を身につけることが必須です。2011年に日本経団連が実施したアンケート調査の1項目「グローバルに活躍する日本人人材に求められる素質、知識・能力」は、その一例を示しています。第1位：既成概念にとらわれず、チャレンジ精神をもちつづける能力、第2位：外国語によるコミュニケーション能力、第3位：海外との文化・価値観の差に興味・関心をもち、柔軟に対応する能力という結果には、時代のニーズを敏感に察知して対応することが死活問題である企業の見方が表われています。

こうした外国語によるコミュニケーション能力や多様な文化に対応する能力は、外国語教育によってこそ育てられる力です。外国語教育が、教育全体においても極めて重要な役割を担っていることは明らかです。

言語力を鍛え視野を広げる

母語以外のことばを学ぶことは、それまで意識していなかったことばのしくみや成り立ち、文化の特質、人間・ことば・文化の関係

などについての理解を深めます。また母語と比較することによって、自言語や自文化に対する理解が深まるとともに、複眼的な視点が得られ、視野が広がり、新たな世界観を手にすることになります。

また、「ことば」が本来もつおもしろさ、豊かさ、楽しさだけでなく、外国語を使えるようになることで、世界に生きる多様な人びととコミュニケーションできる喜びを、新鮮な驚きをもって味わうことができます。加えて、母語を含む言語力の向上につながります。

さまざまな言語的・文化的背景をもつ人びととのやりとりは、あらためて「ことば」や「コミュニケーション」の重要性を認識させ、ひいては考える力を育てることにつながります。とくに母語でない外国語の学習や運用は、抽象的あるいは論理的思考力を伸ばすことに役立ちます。

学校教育の早い段階から多様な外国語に親しみ主体的に学ぶことによって、生涯にわたって学習する基礎を培うことにつながります。

国際対話力を向上させる

母語に加えて運用できる言語を身につければおのずとコミュニケーションの輪が広がり、国際的対話力が向上します。

多様な外国語のなかでも、さまざまな場面で英語が最優先されるのは、共通言語として使用される頻度が高く、PCやインターネットを含め、コミュニケーションツールとしての

有効性が高いからです。日本人の英語力は、日本社会のあらゆる分野における発信力、受信力、交渉力を大きく左右するともいえます。

文部科学省の外国語教育政策においても英語は最も重視されています。2011年6月に同省の「外国語能力の向上に関する検討会」が発表した「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」(2016年度達成目標)では、「外国語には英語以外にも様々な言語が存在し、コミュニケーションの手段という意味ではそれぞれ重要であるが、英語が

国際共通語として最も中心的な役割を果たしている言語のひとつであるという現状に鑑み、英語力の向上を図る方策を中心に」、日本社会を挙げてまず英語力向上に取り組むことが提唱されています。

しかし、外国語の能力が、日本の国家力あるいは企業力に大きな影響を与えることをもっと認識すべきであると考えれば、英語だけでは発信にしろ受信にしろ情報はおのずと限られてくることも直視しなくてはならないと考えます。

1.2 複数の外国語を学ぶことの重要性

多様な社会のニーズへの対応

各学校の特色や考え、各地域に固有な背景によって、英語以外のさまざまな外国語へのニーズがあるのは当然です。それに応えるためにも、制度上の後押しが必要であり、日本の学校教育のなかに複数の言語を学べる環境を本格的に作っていく努力が必要とされるのは、必然といえます。

多言語による情報収集力は日本社会の生命線

外交、防衛、経済は言うに及ばず、文化、メディア等々あらゆる分野において、複数の外国語に精通した人材を広く養成しておけるかどうか、意思疎通や情報の質と量に影響を与えるものであり、日本社会全体の力を左右することになると考えます。21世紀の日本が、多言語が息づくグローバル社会に対応し、かつ多文化社会を築こうとするならば、英語だけでは立ち行かないのは自明です。

複眼的思考や視点・多文化的資質の獲得

英語以外の外国語を学ぶことで英語だけが外国語ではないことを知り、「ことば」のおもしろさを発見するとともに、英語との比較のなかで捉えていた日本語の特徴が、比較対象

が変わることにより日本語に固有でないと知ることもできます。英語では得られなかった複眼的な思考や視点・視野の獲得につながります。また世界にある多様な言語、文化、民族についての認識を深めることもできます。

国際語としての英語はさまざまな文化的背景をもつ人びとの言語であり、言語と文化を一対一で対応させて学習することは難しい面もあります。それに対し、中国語、韓国語、あるいはその他の言語では、背景にある文化理解を深めやすいといえます。

無論ひとつの言語の背景にある文化はどんな場合でも、単一文化として直線的に捉えるわけにはいきませんが、文化を比較したり、その異同を分析することを通じて、文化の可変性や多様性といった文化のダイナミズムを捉える学習が始まります。それによって、ステレオタイプな観念が緩和され、多文化的な視点を獲得することができます。

コミュニケーションの深まりと広がり

国際共通語であるといっても、英語ができれば世界のどこにいても困らないわけではありません。日本で日常的に接する外国語も必ずしも英語ではないのです。英語話者の人

口は世界の人口の4分の1でしかありません。ちなみに中国語を母語とする人は、世界各国にいる華僑や華人と呼ばれる人たちを含めて約12億人といわれています。この数字は世界の総人口の約17%を占めています。複数の言

語を学ぶことで、英語が通じる相手であっても、相手の母語でコミュニケーションすることによって、より親近感が深まります。また英語話者ではない人びともつながることができるのです。

日本の外国語教育多様化推進政策の流れ

- | | |
|--|--|
| <p>1985 臨時教育審議会第一次答申：「英語だけでなく多様な外国語教育を積極的に推進する」</p> <hr/> <p>1987 臨時教育審議会第三次答申：国際通用語としての英語、民族言語としての英語、英語以外の多様な外国語学習の重要性を指摘し、大学における第二外国語として、近隣アジア諸国の言語も積極的に対象とすること、高校における選択教科の幅を拡大すること、大学入試の外国語科目を多様化することに言及</p> <hr/> <p>1991 「外国語教育多様化研究協力校」の指定開始</p> <hr/> <p>1993 外国語教育の改善に関する調査協力者会議報告：「近隣のアジア諸国の言語はもとより、英語以外の様々な外国語の教育を一層推進することが必要である」</p> <hr/> <p>1996 中央教育審議会第一次答申：「中学校・高等学校の外国語教育は、現在、圧倒的に英語教育となっているが、これからの国際化の進展を考えると、生徒が様々な言語に触れることは極めて意義のあることであり、今後は学校の実態や生徒の興味・関心等に応じて、多くの外国語に触れることができるような配慮をしていくことも必要であろう」</p> <hr/> <p>1997 センター試験科目に中国語が加わる</p> <hr/> <p>1999 子どもの未来と世界について考える懇談会の提言：高校における多様な外国語教育を積極的に推進すること、外国語に対する子どもの興味関心の喚起に留意することを提言</p> | <p>2000 「21世紀日本の構想」懇談会答申：グローバルリテラシー（国際対話能力）の確立と東アジア（韓国・中国）との協力関係の強化の必要性に言及し、国民的覚悟をもった「隣交」を提唱</p> <hr/> <p>2001 英語指導方法等の改善の推進に関する懇談会報告：高等学校における多様な言語学習に配慮し、欧米先進諸国に目を向けがちだったことを改め、アジア諸国等の言語にも一層目を向けるよう提言。国際化、グローバル化する社会に対応し、基礎的・実践的コミュニケーション能力の育成は重要課題であるとしている</p> <hr/> <p>2002 センター試験科目に韓国語が加わる
「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想発表
「高等学校における外国語教育多様化推進地域事業」開始</p> <hr/> <p>2008 小学校の外国語活動の導入開始</p> <hr/> <p>2010 外国語能力の向上に関する検討会が設置され、(1)『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』の改訂、(2) 英語以外の外国語能力の向上、(3) 国語力の向上について検討開始</p> <hr/> <p>2011 外国語能力の向上に関する検討会：「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」を発表
小学校の外国語活動が完全実施</p> |
|--|--|

2. 隣人・隣国のことばを学ぶ意義

中国語・韓国語は、日本人にとって隣人・隣国のことば「隣語(りんご)」です。隣語を学ぶことは、自己を再発見し、隣人との対話を深め、東アジア地域の協調・協働関係の実現につながります。

2.1 隣語の必要性

日本と密接な関係にある隣国のことば

隣語は、地理的、歴史的、政治的、経済的に日本と密接な関係にあって、社会の形成に相互に大きな影響を及ぼした国・地域のことばであるということに注目したいと思います。隣語の学習が、歴史を含めた日本と隣国との関係性や相互依存性を、双方の見方を踏まえて見なおす契機になることは、大きな意味があるといえます。

中国、韓国との経済関係はますます緊密化しており、JETRO（日本貿易振興機構）発表の「日本年次貿易動向」（2010年）によると、日本の対外貿易額に占める割合は、輸出では中国が19.4%で1位、韓国が8.1%で米国に次いで3位、輸入でも中国が22.1%で1位、韓国が4.1%を占め6位となっています。中国語が経済大国の言語としてニーズが高まっているのも当然です。

いまや2、3時間もあれば隣国に行ける時代になって、人の往来は急増しています。気軽に隣国を訪問して隣語に接したり、使ったりすることが日常化してきたといえます。海外との姉妹都市交流や高校の海外修学旅行などの教育交流においても、隣国との人的交流は、ますます盛んになっています。海外修学旅行先として、韓国が196校（26,306人）に選ばれて3位、中国は97校（11,963人）で6位となっています。公立に限定すると、韓国は114校（16,811人）で1位、中国は56校（7,039人）で

5位です。一方、学校訪問を伴う外国からの教育旅行（引率者と生徒で構成される団体等で学校を訪問したものを指し、研修旅行・留学など個人的なものは除く）の受け入れ人数でも、韓国は8,910人で1位、中国は6,294人で3位となっています（2008年文部科学省調査）。

東アジア地域の協調関係を築くことは

ヨーロッパでは密接なつながりのある隣国との安定した関係を築くために、地域ブロック内で互いの言語の教育を促進する動きが、21世紀に入って見られるようになりました。日本にとって、アジア太平洋地域は政治・経済・安全保障上、極めて重要な地域であり、なかでも中国、韓国をはじめとする近隣地域内の人的交流を促進して相互理解と信頼関係を深め、協働して広域地域社会を構築していく必要があることは明白です。

「心をとらえるためのひとつの道はことばである」（倉石武四郎）との言のとおり、若いころから隣語に関心をもち、隣語話者と積極的に交流しようとする態度を形成することは重要です。互いの言語を使って対話を深め、心を通わせることは、今後の地域社会の基盤づくりに必須であり、地道ながらも極めて大きな影響を将来に及ぼすものと考えます。

「21世紀日本の構想」懇談会[★]は、2000年1月に発表

★1999年3月、21世紀における日本のあるべき姿を検討することを目的に、小淵恵三総理大臣のもとに設けられた懇談会。座長は河合隼雄国際日本文化研究センター所長。

した報告書で隣交を提唱し、韓国（朝鮮半島）・中国との関係構築に国民を挙げて取り組み、韓国語や中国語の語学教育を拡充すべきであるとしています。

【隣交】

21世紀には、地理的な近接性を持ち、歴史的・文化的な関係も深く、今後の潜在力を秘めた東アジアにおける協力関係を一段と強化すべきである。とくに日本と韓国・中国との関係は、単に外交という名で呼ぶには足りない。その関係は外交と呼ぶには余りにも深く、にもかかわらず、十分に深まっているとはいえない。外交的な努力だけでは掴みきれないものをすくいとり、深みのある関係を築く営みが必要である。そういう営みを「隣交」と呼ぶことにしたい。中国と韓国（朝鮮半島）との関係を長期的に安定させ、信頼関係を結ぶには、これまでの通常の外交努力では不十分であり、観光的、風俗的、流行的な理解では追いつかない。ある種の国民的な覚悟が必要である。そういう意味での「隣交」である。「隣交」に踏み出すにあたっては、日本人がこれら隣国の民族の歴史、伝統、言語、文化を十分に理解することが求められる。そのためには、学校教育において両国の歴史と日本との関係史、とりわけ現代史を教える時間を充実させるとともに、韓国語や中国語の語学教育を飛躍的に拡充するのが望ましい。日本国内の主要な案内板には英語と共に両国語が併記されるくらいに「隣交」感覚を研ぎ澄ましたいものである。（「21世紀日本の構想」懇談会報告書より抜粋）

日本国内の多文化共生を築くことば

隣語は、日本に暮らしている中国と朝鮮半島にルーツをもつ多くの人びとの言語でもあります。また、近年における短期および長期外国人滞在者数からみても、最も多いのは韓国籍と朝鮮籍および中国籍の人であり、中国語と韓国語は日本人にとって隣人のことば、日本国内の多文化共生のためのコミュニケーション言語のひとつだといえます。まさに中国語と韓国語の学習者はコミュニケーションをとろうとすれば、隣語を使って生身の隣語話者と対話し、通じる喜びを感じることができる状況が身近にあるのです。

就労や就学のために新規に在住するように

なった隣語話者の数が各地で急激に増え、地域や学校においてさらに多言語化、多文化化が進んでいます。地域社会で同じ住民として共生し、また学校のなかで同じ児童生徒として共生していくためには、外国籍の児童生徒が日本語を学ぶだけではなく、迎える側が中国語や韓国語を学習する意義は大きいと考えます。

平成22年版『出入国管理』（法務省入国管理局2010年11月発行）によると、2009年における外国人入国者総数（再入国を含む）は758万1,330人です。国籍（出身地）別で見ると、韓国が183万5,377人と最も多く（全体の24.2%）、次いで中国、中国（台湾）と続き、これら上位3国・地域で全体の54.6%を占めています。また上記入国者総数のうち、再入国を除く新規入国者数は611万9,394人、その95.2%（約582万人）が短期滞在者です。そのうち、観光を目的とした人たちが7割近くで、韓国が約100万人とトップです。また観光に次いで多い研修、留学を目的とした人びとについても、それぞれ中国と韓国が上位に上がり、隣語の必要性を示しています。

日本語、日本、日本人を映し出すことば

隣語を学ぶと、英語との比較では気づかなかった日本語の発見があり、日本語の特徴や思考の枠組みを相対的に捉えることができます。例えば、英語と比較してよくいわれる日本語の特徴に敬語表現がありますが、韓国語と日本語を比較すれば敬語表現が日本語固有のものではないことがわかります。また同じ敬語表現でも日本語とは違うものがあることを知り、固定観念から離れて、広い視野のなかで日本語を見ることができるようになります。

また、隣語は同じ漢字文化圏のことばとして、ことばのしくみ（構造）・語彙・音声において、日本語との類似性、共通性が発見でき

る言語です。隣語を学ぶことによって、あらためて日本語の語彙のなかに多く混在する隣語を認識し、新鮮な驚きを覚えます。しかし、異なる点も多々あり、隣国のことばを学ぶという知的な喜びやおもしろさを、日本語と対照させながら体感するのは、言語教育上も大きな意味があります。

中国語は日本語の文字の成り立ちや語彙に大きな影響を与えたことばであり、中国語から借用した漢語をもとに日本人が作った和製漢語の逆輸出といった中国語と日本語との関

係を発見する楽しさも味わうことができます。韓国語では、ハングルというアルファベットとは異なる文字との出会いも新鮮です。

さらに、隣語を一民族あるいは1つの国家の言語と捉えるのではなく、国内外を含めて多文化、多民族、多地域の言語として捉えることによって、新たな言語観や文化観を獲得できることにも着目したいと思います。

自己の姿を映しだす鏡として、隣語はほかの外国語をもっては代えがたいといえます。

2.2 隣語に対する社会的関心

中国語と韓国語が学校教育に位置づけられてしかるべき外国語であるだけでなく、学習者および学校や地域の隣語に対する関心が高まっていることも、隣語教育が必要である理由として挙げられます。

隣語学習へのニーズは質的にも量的にも、以前には考えられなかった高まりを見せています。韓流ブームをはじめとする、韓国、中国における現代の文化に対する関心が社会現象にもなりましたが、一過性のものではなく、日本人の対隣国意識にも変化が見られます。

特に若い世代を中心に、音楽、映画、ドラマ、漫画などのポップカルチャーやスポーツ等の領域において、日本と隣国との文化的な関係が新たに形成されようとしています。このことは、日本の高校生が隣語を選択して学習する理由として、映画やK-POP、ドラマへ

の関心を挙げていることに表われています。その他の理由としては、歴史や伝統文化に興味がある、中国人や韓国人の友だちがいるので話せるようになりたい、実際に中国や韓国に行ったときに使いたい、文字（漢字、ハングル）に興味をもったなどです。中国語については、将来仕事等に役立つ、中国はこれからも発展する国だなどが最近では学習動機として挙げられるようになりました。

これらの社会的、文化的ニーズに比して、教育の環境整備および制度が追いついていないのが現状です。各地域の教育委員会や文部科学省の理解と後押しがあれば、高校における隣語教育は大きく発展する可能性を秘めています。英語教育だけでなく、隣語教育も制度的に位置づける 때가到来していることを、強くアピールしたいと思います。

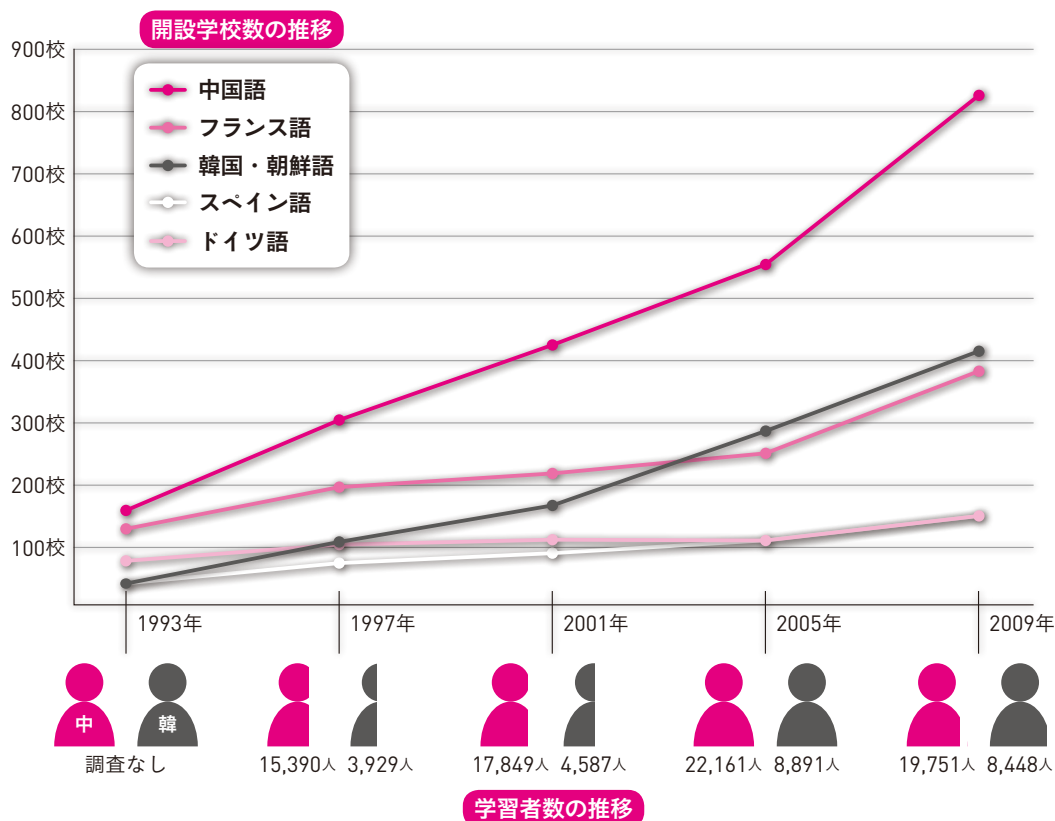
中 国語教育、韓国語教育ともに、歴史的、地理的、経済的、社会的要因から、地域によって開設状況が異なり、学校数にもばらつきが見られます。

文部科学省の2009年6月の調査によると、全国の高校で開設されている言語数は16言語。英語以外を開設している高校の実数は年々増加しているものの、全体でわずか729校（全体の約13%、公立540校、私立189校）です。延べで2,027校のうち、中国語が最も多く831校（公立639校・私立192校）、次いで韓国語が420校（公立340校・私立80校）、フランス語が373校（公立207校・私立166校）の順となっています。

しかし、履修者数で見ると、1位の中国語でも19,751人（高校生1,000人あたり5.9人）、フランス語8,954人（同2.7人）、韓国・朝鮮語が8,448人（同2.5人）です。TJFのこれまでの調査から、教師の数は、中国語が約500人、韓国語が約300人と推定されます。

以下のグラフのとおり、1990年を境に、中国語が英語に次いで実施校数が多い外国語になり、2005年を境に韓国語が第2位に浮上しました。しかし、学校数は増加しているものの、学習者数はあまり増えていません。隣語が制度的にしっかりと位置づけられ、「めやす」の考え方に基づき、学習者の興味・関心を高める授業が実現できれば、履修者の増加が見込まれます。

日本の高等学校における英語以外の外国語の開設状況



文部科学省調査「高等学校等における国際交流等の状況について」および「学校基本調査」による

3. 他者の発見 自己の発見 つながりの実現(教育理念)

外国語の学習を通して、他者を発見し、自己を発見し、
自他の理解を深めながら関係性を築き、
協働社会を創ることをめざします。

人やモノの交流が増えても、必ずしも相互理解につながっているとはいいがたく、いまだ固定観念に基づく扇情的な非難が見受けられます。「自他のつながり」を実現するためには、相手のことばや文化を学び、コミュニケーションを深めるなかで相手を知り、その相手と真摯に向きあい、自己を見つめなおすことが必要です。

他者の発見

他者とは人としての他者および他の言語、文化、社会を指しています。クラスメイト、身近にいる隣語話者、隣国の人びと、世界の人びとを含む他者、そして未知の言語、とりわけ日本語とつながりが深い隣語との出会いは、さまざまな発見や気づきをもたらします。異なる文字をもつ韓国語を学んで、日本語と非常に似通った表現や語彙があるのに驚いたり、見慣れたはずの漢字が、中国語では日本語と違う意味をもっていることに気づいたりします。隣語やその背景にある文化を学ぶ楽しさ、おもしろさ、驚きがさらなる学習の動機づけとなります。そして何よりも学習者が隣語を使ってコミュニケーションをしようとするのが、隣語話者との出会いをもたらし、お互いに尊重の念をもって向きあうことにつながるのです。

自己の発見

他者と出会い、関わることによってこそ見えてくる自己があります。他者のなかに自己が映しだされるのです。他言語との対照によって自言語を再発見し、他文化との比較によって自文化を再認識できます。自己の考えを表現するとともに、相手の考えを理解しようとするやりとりを通じて、自己を振りかえり、自己そのものも再認識するのです。他者の発見と自己の再発見は同時かつ双方向的に行なわれることとなります。

つながりの実現

「めやす」は、自他の理解を深めながら、共に生き、関係性を構築して、協働社会を創ることをめざします。他者の発見と自己の再発見の積み重ねは、他者と向きあい、自己を見つめなおしたうえで自己を表現し他者のことばに耳を傾ける「伝えあいによる共感」を生みだします。この伝えあいによる共感、さらに相互の「わかりあい」と新たな価値の「わかちあい」に発展し、ひいては真の意味でのつながりを実現させるのです。外国語教育を通じて学習者に豊かな学びの場を提供し、人びとが共に生きていける未来社会の担い手を育むことをめざします。

4. 人間形成とグローバル社会を生きぬく力の育成(教育目標)

外国語教育は単なる道具としての言語を
習得させるものではありません。

21世紀を生きぬく資質と能力を育てることをめざします。

「めやす」は、外国語教育を人間教育の一環として捉えて教育目標を設定しました。ほかの教科と協力して育む資質や能力もあれば、外国語科目だからこそ身につく能力もあるでしょう。単なる道具としての外国語の習得といったイメージを払拭し、学習者が外国語を学ぶことによって、人間として成長し、21世紀の社会に羽ばたいていくのに必要な力を身につけることを重視しました。それは21世紀のグローバル社会の期待に応えられる人になることを意味しています。

21世紀のグローバル社会に生きる力

若い人びとには、多言語、多文化が共生する21世紀のグローバル社会を生きぬくための力として、外国語による対話力、多様な他者とつきあう力、そしてグローバルな視野をもって社会に参画して活動する力を身につけてほしいと考えています。こうした「生きる力」を、外国語の科目で育てたいと思います。

豊かな感性と資質を育む

「めやす」では、「生きる力」を支える人間的資質と豊かな感性を育むことも重視しています。未知なることばを学び、異なる文化に触れること、そして多様なことばや文化的背景をもつ他者と出会い、コミュニケーションをすることを通じて、他者への理解が深まるだけでなく、みずからの視野が広がり、感性が磨かれ、資質が鍛えられます。

感性や資質は時間をかけて育まれるもので、上述の対話力、つきあう力、グローバル社会で活動する力と一体化して、「生きる力」となります。「他者の発見 自己の発見 つながりの実現」という教育理念から、次の感性・資質形成がとくに重要だと考えています。

他者と向きあうときに必要とされる資質としては、**寛容性、共感性、他者への尊重の念**があります。

自己と向きあうときには、**内省力、自尊感情、自主性、自律性**が求められます。

そして、自他の関係性の構築や社会づくりのためには、当然のことながら、**創造性、柔軟性、責任感**が必要となります。

5. 総合的コミュニケーション能力の獲得(学習目標)

「言語・文化・グローバル社会」の3領域における
「わかる・できる・つながる」という3つの力を、
「学習者・他教科・教室外」との連繋によって育みます。

5.1 キーコンセプトは3領域×3能力+3連繋

抽象度の高い教育理念や教育目標を、どのように学習目標として具体化するのか、外国語科目が守備範囲とすべき領域は何か、学習者に身につけてほしい力とは何かを、21世紀という時代の文脈のなかであらためて見なおしました。

「3領域×3能力+3連繋」

学習目標として設定した「総合的コミュニケーション能力」とは、言語、文化、グローバル社会の3つの領域における3つの能力から構成されています(22頁の表参照)。身につけたい3つの能力とは、わかる力、できる力、つながる力のことです。さらに3つの領域における3つの能力を身につけるためには、①学習者の関心・意欲・態度、学習スタイル、②既習内容や他教科の内容、③現実社会である教室外の人・モノ・情報とを、それぞれ連繋させることが重要です。

これらの要素から構成される学習目標のキーコンセプトは、「3領域×3能力+3連繋(スリー・バイ・スリー・プラス・スリー)」と呼ぶことにしました。一般に使われる、言語領域における「コミュニケーション能力」と区別するために、「総合的」コミュニケーション能力と命名しました。

「言語・文化・グローバル社会」の3領域

コミュニケーションは、言語力だけで成り

立っているわけではありません。多くの外国語教育のガイドラインや標準では、コミュニケーション能力は言語領域と文化領域から構成されています。生身の相手とコミュニケーションをするためには、その場面・状況や文脈を理解したり、相手の考え方や感じ方、生活様式など、その人の文化的、社会的背景についても理解する必要があるからです。

さらに、冒頭で述べたように「めやす」では、21世紀のグローバル社会に生きる力を獲得することをめざしており、グローバル社会が必要とする「21世紀型スキル」(「めやす」では、高度思考、協働、情報活用の3つのスキルから構成している。28頁参照)や、「グローバル社会に参画して社会をつくっていく力」を身につけることが必須であるところから、それらを含む第三の領域として「グローバル社会領域」を総合的コミュニケーション能力のなかに位置づけました。

「わかる・できる・つながる」の3能力

外国語学習の醍醐味は、3領域における知識・情報がわかる、実際に活用できる、そして他者(人・言語・文化・社会)とつながることではないかと考えています。

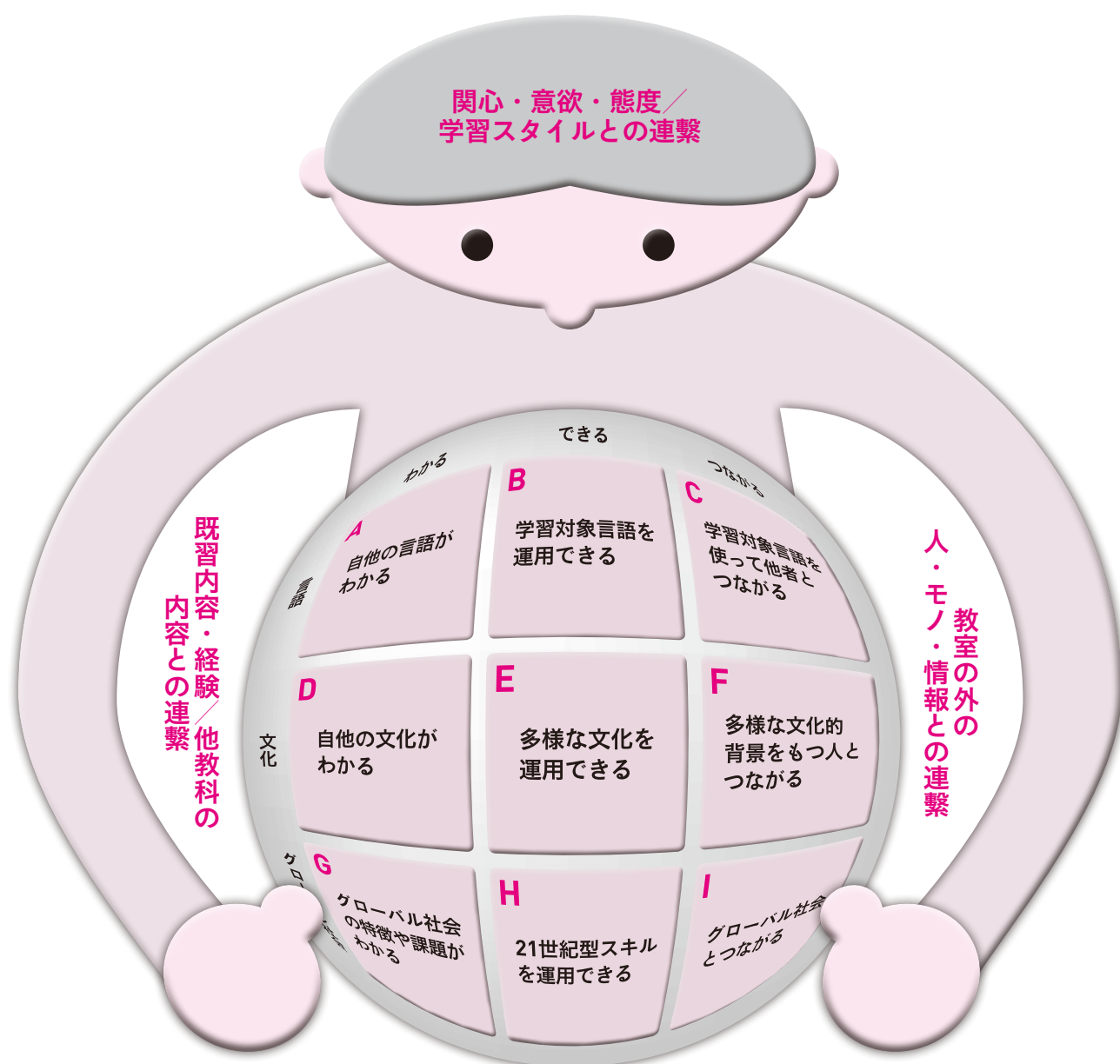
「わかる」は知識理解目標、「できる」は技能目標(言語運用能力や思考・判断力も含みます)、「つながる」は関係性構築目標として位置づけました。言語、文化、グローバル社会

のそれぞれの領域において、知識理解を深め、それを活用するスキルを身につけ、ひいては他者、多文化、グローバル社会とつながることが外国語学習の目標であると考えます。

これまでの学習は知識理解が中心で、記憶力や想起力がものをいう「わかる」力が重視されてきました。しかし、近年のIT社会においては、より高度な思考力を駆使して、知識や情報を収集（解釈）、分析（比較）、活用、総合、発表（提示）する能力が必要とされるよう

になりました。これらの力が「できる」力です。

「つながりの実現」をめざす「めやす」では、学習対象言語を使って積極的に他者とコミュニケーションをしようとする態度をもって他者と対話し、異なる考えを調整しようすることを重視しています。自己とは異なる他者と協働して社会をつくっていく力、これらの力が「つながる」力です。



スリー・バイ・スリー・プラス・スリー
3領域 × 3能力 + 3連繋の概念図

学習者の関心・意欲・態度、 学習スタイルとの連繋

3つの領域、3つの能力を強化するものとして、3つの連繋も目標としています。まずは、学習者の関心と意欲を引き出すことです。また学習を継続する態度形成を図る必要があります。学習者が学習する状況にあり、学ぶ意欲や態度が見られることが前提になります。

クラスによっては、教師はここで苦勞することもあるでしょう。学習者は1人ひとり異なっていて多様です。例えば、書いて覚えることが得意な学習者もいれば、聞いて覚えることが得意な学習者もいるように、学習スタイルが異なるのです。それぞれに合った授業をすることも容易ではありません。しかし、学習者の関心・意欲・態度、学習スタイルを常に考慮する必要があります。

すなわち、学習者が主体的、能動的に学習を行ない、自分の関心・意欲・態度、学習スタイルを踏まえて学習できるように配慮することが教師の役目です。学習者が学習ストラテジーを身につけ、生涯にわたって自律的に学習を継続できるように、その土台を作ることがめざします。

他教科の学習内容や既習内容との連繋

学習者がすでに学んだことや、他教科で学習している内容を踏まえたり、連繋させたりすると、さらに豊かな学習内容をもった活動ができます。内容重視の立場から、学習者にとって意味のある内容のなかに、学習したいと思う語彙や表現などの言語材料を自然に導入できれば一石二鳥です。

内容重視の学習は、近年の学習理論や外国語教育の実践結果からも、効果的であるとわかっています。また学習対象言語を使って第一次資料を調べたり、学習対象言語の話者か

ら文化や社会に関する情報を得たりすることによって、逆に外国語科目が他教科の内容を補強することになります。外国語教育が全教科のなかで重要な役割を果たすことができると思っています。

教室外の人・モノ・情報との連繋

教室で行なうコミュニケーション活動は、学習者にとって意味のある、現実社会に近い場面や状況のなかで行なうことが求められます。なぜならば言語の重要な機能は、コミュニケーションを通じて社会活動をすることであり、よって現実社会とのつながりのなかで学習することが一番効果的だからです。

そのため、教室内が実社会とつながるように、学習対象言語の話者を教室に連れてきたり、地域や海外から実物を持ってきたり、インターネットや新聞・雑誌の情報にアクセスしたりすることが推奨されます。教室内の学習を教室外とつなげることによって、学習者は地域社会やグローバル社会に実際に触れ、それに参加することができます。

また学んだ表現が通じ、あいさつが交わされたりすると、感動が生まれ、生の文化体験となって、学習者の関心を喚起することにもつながります。

事情が許せば、積極的に地域社会や学習している言語が使われる国や地域に出かけていって、母語話者を相手に学んだ言語を使うこともできます。

現実社会に通用する総合的コミュニケーション能力を育てるためには、教室のなかに関じこもることなく、必然的にコミュニケーションが求められる環境のなかで、本物のコミュニケーションをするほうが、学習の動機づけも高まります。

A 自他の言語がわかる

- a. 学習対象言語の文字・音声・語彙・表現（文法・語法）について知り、そのしるみを理解する
- b. 学習対象言語について新たな発見をしたり、母語と比較してその違いに気づいたりする

B 学習対象言語を運用できる

- a. 学習対象言語を使って、身近な事柄や関心のある事柄について、自分の気持ちや考え、情報を伝えたり、相手の気持ちや考え、情報を理解したり、相手とやりとりをして運用することができる
- b. 学習対象言語と母語を比較して、その共通性や相違性、関係性を探究して分析することができる
- c. 言語的能力のギャップを埋めて、コミュニケーションを成立させるために、さまざまな言語および非言語ストラテジーを使うことができる

C 学習対象言語を使って他者とつながる

- a. 学習対象言語や母語を使って、積極的かつ主体的に他者と対話をして、相互作用しながら共に関係を作りあげていく

D 自他の文化がわかる

- a. 学習対象文化に関して表象するさまざまな文化事象（事物や行動）について知り、理解する
- b. 学習対象の文化事象を観察して新たな発見をしたり、自文化や自分が知っている文化と比較して、その違いや関係性に気づいたり、推測したりする

E 多様な文化を運用できる

- a. 学習対象文化と自文化をはじめ、多様な文化事象を比較して、知識・情報を活用しながら、共通性や相違性を分析することができる
- b. 文化事象間の異同の事由および文化事象の背景にある考え方や価値などを探究し、自分の考えを表明することができる
- c. 文化事象の分析を通して、文化の多様性や可変性といった文化を見る視点を身につけ、自文化を再認識したり、ほかの文化事象に適用したりすることができる
- d. 自他の文化をはじめ、異文化間の相違性から生じる誤解や摩擦、緊張関係を調整したり、妥協点を探ったりして、協力して問題を解決することができる

F 多様な文化的背景をもつ人とつながる

- a. 多様な文化的背景をもつ人びとと主体的かつ積極的に関わり、相互に作用しながら、軋轢や摩擦を乗り越えてつきあう

G グローバル社会の特徴や課題がわかる

- a. グローバル社会（自分・学校・身近な地域社会・日本社会・広域地域社会・世界が緊密につながる21世紀の多言語多文化社会）の一員としての自覚をもち、グローバル社会の特徴や直面する課題について理解する
- b. グローバル社会に生きるために、21世紀型スキルを身につけることが必要であることを理解する

H 21世紀型スキルを運用できる

- a. さまざまな文化的背景をもつグループの一員として、メンバーと意見を交換したり、グループ全体の目標を達成するために、自分の役割を責任をもって果たすことができる（協働）
- b. 問題を解決するために、資料、状況を客観的に解釈・分析・吟味して判断し、自らの考えを根拠に基づいて表明することができる（高度思考）
- c. 情報を収集・編集・発信する際に、情報・メディア・テクノロジー（ICT）の特性をいかして、相互作用的に活用することができる（情報活用）

I グローバル社会とつながる

- a. 人・モノ・情報にアクセスして、自分とつながりのあるグローバル社会のネットワークに関わり、ネットワーク全体の目標達成やグローバル社会づくりのために、自分の能力、知識、時間などを提供したり、メンバーと助けあい協力して行動する



関心・意欲・態度／学習スタイルとつながる

連繋

既習内容・経験／他教科の内容とつながる

教室の外の人・モノ・情報とつながる

5.2 言語領域のわかる・できる・つながる力

ここからは、22頁の表を使いながら、領域ごとに3つの能力について、説明していきます。

言語領域の「わかる」

従来の外国語教育で最も重視されてきたのは「わかる」力です。わかるは、語彙、文法表現、音声、音韻、正書法などの言語のしくみの知識理解を目標としています。言語のしくみを知るとは言語学習の基礎を成すだけでなく、言語がどのように構成され、どのように使われるかを意識化するうえで重要です。

また、外国語のしくみを知ることにより、母語のしくみを客観的に見る力が身につく、母語の理解が深まり、母語の能力を向上させることもできます。

言語領域の「できる」

母語話者との直接交流の機会が多い現代社会においては、実際に言語を使ってコミュニケーションが「できる」ことが重要です。単に言語の知識を覚えるのではなく、実際の場面でコミュニケーションをして社会活動を行なうことが求められています。当然言語知識は必要ですが、コミュニケーションができるようになるためには、コミュニケーション活動を通して、言語のしくみを学ぶことをめざしたいのです。文法項目を順番に教えるのではなく、目標とするコミュニケーション行動に必要な表現・語彙を適宜導入し、ことばのしくみが難しい場合には定型句として教えます。

ことばを実際のコミュニケーション状況から切りはなさないように、現実あるいはそれに近い場面・状況を教室に作り、学習者がコミュニケーション活動に参加することが大切

です。実際にどのようなコミュニケーション行動ができるようになることをめざしたらいいのかを、「めやす」では、「～ができる」という能力記述文で提示しました(34頁「コミュニケーション能力指標」参照)。

また、外国語と母語とを比較分析して、その共通性や相違性、さらに歴史的な関係性を探究して分析することもめざします。さらに言語知識の不足を補うために、身ぶりや写真などを使ったり(非言語的方略)、相手に聞きかえしたり(言語的方略)など、コミュニケーションのためのストラテジー(方略)を身につけることも重要です。

言語領域の「つながる」

他者と交流し、積極的に対話をして関係を作ることが「つながる」の目標です。対話は基本的には異なる考えや意見をもつ者同士で、意見交換をして双方が合意できる考え、価値、気持ちを探るものです。

その過程は容易ではありませんが、そのなかで他者理解、自己の発見が起こり、相互理解が深まり、人間同士の「つながり」を築いていきます。その「つながり」は一瞬のこともあれば、一生続くものもあります。

現在、隣国をはじめ海外に気軽に行けるようになりましたが、日本国内においても、日常的に隣語話者と出会い、隣語と接する機会が日増しにふえてきています。もし高校生が隣語話者とやりとりする体験をすれば、ことばによって心と心を通わせる瞬間を手にすることでしょう。これこそ、まさしく外国語を学ぶ醍醐味なのです。この「つながり」は同じ外国語を学ぶクラスメイトから、教室外でその外国語を学んでいる仲間、その言語を話す人たちとの「つながり」へと広がっていきます。

コラム

「韓国語」とは？ 「中国語」とは？

「**韓**国語」と「中国語」を、「めやす」は以下のように捉えています。

ソウルことばを基礎にした標準語

韓国語は、話者の数では7,000万人を超える世界でも15位前後に入る大言語です。朝鮮半島のみならず、延辺朝鮮族自治州をはじめとする中国、カザフスタン、ウズベキスタンなどの中央アジア、米国、オーストラリアなど、世界の広い範囲に話者が存在し、方言をはじめとする言語の多様性が見いだせます。日本においては、民族学校を中心として在日韓国人、朝鮮人のなかでも用いられています。

世界で使われている韓国語のうち、正書法を有するものとしては、大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国それぞれのいわゆる標準語に相当するもの2つを挙げることができます。前者はソウルことばを基礎にしたもので、「標準語」とされ、後者の標準語は平壤のことばを基礎にしたもので「文化語」と呼ばれています。言語学的にはこの韓国の標準語と共和国の文化語は、ひとつの言語として考えられており、その違いはわずかなものです。

共和国の文化語とその基礎となっている平壤のことばへのアプローチが現在に限られていることから、「めやす」は、韓国のソウルことばを基礎にした「標準語」を学習対象としています。しかし、共和国の文化語とその正書法の存在をはじめ、世界に広がっている韓国語の多様性への学習者の関心を常に喚起する必要があります。学習の対象となる韓国語はさらに豊かな広がりをもちうると思います。

「めやす」が学習の対象としている韓国の標準語は、人為的に定められた規範的なものであり、アナウンサーなど訓練を積んだ話者が、ニュースなど一定の局面で用いていま

す。韓国の話しことばに接する機会が拡大している点に注目するなら韓国の標準語の基礎となったソウルで実際に用いられている話しことばも、今後対象としなければならないと考えます。

標準中国語としての「普通話」

国連の6つの公用語の1つである中国語は、中国、台湾、シンガポールなどの公用語です。世界各地に居住する華僑・華人社会も含めれば、日常的な中国語使用者数は10億を超えます。地理的に広範囲に分布する中国語は方言間の差が大きいため、北京方言を音韻体系の基準とし、北方方言を基礎方言とする「標準中国語」が共通言語として使われています。この「標準中国語」のことを、「普通話（プートンホア）」、台湾においては「国語」と称し、シンガポールでは「華語」と呼んでいます。なお、多民族国家である中国においては、「普通話」は民族間の共通言語としての役割も担っています。日本の中国語教育において「中国語」という場合、通常は「普通話」を指すことが多く、「めやす」でいう「中国語」も言語的には「普通話」を指しています。

中国語の正書法は漢字を用いており、台湾においては漢字の字体を簡略化しない伝統的な字体が用いられ、中国およびシンガポールでは漢字の字体を簡略化した「簡体字」が採用されています。また、漢字の発音を示すための手段として、「普通話」や「華語」では、「ピンイン」と呼ばれる表音ローマ字綴りが採用され、「国語」では、日本語におけるカタカナのように漢字の一部を使って発音を示す「注音符号」が主として使われています。「めやす」では、「簡体字」およびピンインを主な学習対象としています。

5.3 文化領域のわかる・できる・つながる力

文化領域の「わかる」

従来の外国語の授業では、学習対象となる文化についての知識理解を深めるために、ことばに表象される文化を扱ったり、ことばの学習から文化を切りはなして取りあげたりしてきました。異文化をステレオタイプに捉えることも多々あり、知識として与えがちで、学習者が文化事象に気づき、発見していく学習過程がなおざりにされる傾向もありました。

現在では母語話者からの情報収集、文化に関する膨大な情報が集積されているインターネットやテレビ、映画、雑誌、グッズなど、ホットな情報源の活用も可能となっており、知識の獲得の仕方も多様になっています。さまざまなメディアを駆使し、正しい文化知識を自分で探し、理解していくことをめざします。

文化領域の「できる」

母語話者と直接やりとりをすることが多い現代においては、相手とのコミュニケーションを円滑に行なうためには、相手の文化的背景を理解することが必須です。相手とのインターアクション（相互交渉・相互作用）の型が文化の影響を受けていることもありますし、非言語行動（身ぶり手ぶりなど）も文化領域と関連しています。あいさつや自己紹介ひとつとっても、相手との関係性を踏まえた適切な語彙や表現は何か、どのような行動をとったらいいのか、何を聞いていいのか等々、文化の問題がすぐに浮上します。無用な摩擦や誤解を軽減したり、多文化的資質を形成した

りするためには、ことばや文化の静的な知識理解だけでは不十分であるところから、文化のダイナミズムに対応できる学びが必要となります。

文化を所与のもの、固定的なものではなく、多様なもの、変化するものとして捉える視点を獲得し、自分と異なる文化への対処の仕方を身につけることが重要です。文化の境界線も、ナショナルカルチャーだけにとらわれることなく、サブカルチャーやグローバルカルチャーなど、多様な視点をもつことがステレオタイプを緩和させます。そのために自他の文化の相違および共通性に着目してさまざまな角度から比較分析を行なったり、文化事象間の異同や文化事象の背景にある要因などを考察したりして、異文化間の調整ができるようになることを目標にします。

文化領域の「つながる」

文化を捉える複眼的な視点をもって、同世代の母語話者などとの直接交流やウェブサイトを活用した間接交流に積極的に参加し、尊重の念をもって相手の背景にある文化に向きあい、みずからを振りかえりながら、関係性を構築していくことをめざします。その過程で、異なる価値観に葛藤したり、自分自身が相手の影響を受けて変容したり、さまざまな考え方などを調整したり、新たな共有価値を創造したりするなど、相互作用のなかで、多様な他者とつきあっていく力を身につけることをめざします。

コラム

「文化」をこう見る

「めやす」における「文化」とは、広義の文化を意味し、人びとの生活様式や行動様式、それらの背景にある抽象化された価値観や考え方、感じ方などを含む、生活体系全体を指すことばとして使っています。

「めやす」で学ぶ2つの文化

「めやす」では、言語と直接結びついている文化と、言語使用の場面・状況およびコミュニケーションの相手を理解するために必要と思われる、言語の背景にある文化を学習の対象としています。

前者は、敬語の使い方や語彙の特徴など、言語そのものに表象する文化で、呼称などの言語行動や、身ぶり・表情、習慣的行動などの非言語行動が含まれます。

後者には、日常の生活様式（学校・家庭・社会生活）や行動様式、考え方、感じ方、価値観をはじめ、教育などの制度、社会、宗教、さらに文化の形成に影響を与えている地理、歴史、自然環境等も含めています。それらの文化を、「目にみえる文化」（事物と行動）と「目にみえない文化」（考え方、感じ方、価値観など）の視点から捉えます。

前者については、「めやす」で学習の対象としている「中国語」と「韓国語」（24頁参照）を中心に、それぞれの言語に結びついているものを取りあげています。

後者については、隣語話者の多様性と在住する地域の広域性によって、隣語の背景にあ

る文化が極めて多様であることを念頭に置いて文化を捉えることが重要です。

中国語・韓国語の背景にある文化

隣語話者は、中国、韓国国内のみならず、日本をはじめ広くアジア、また世界に広がるさまざまな地域において生活しています。

中国大陆には漢民族のほか55の少数民族がそれぞれに独自の文化を維持しながら中国語を使って生活していますし、それ以外の国や地域にも、多くの中国人や中国系の人びとがおり、彼らは中国語を維持しながら暮らしています。それらの人びとの文化は、居住する地域・民族・年齢・性別等により異なります。

韓国語も同様で、朝鮮半島や日本にとどまらず、広くアジアのさまざまな地域に韓国語話者は生活しています。それらの韓国語社会の文化まで視野に入れておく必要があるのです。

このように、中国や韓国の文化と一言で括って、国民国家文化（ナショナルカルチャー）を唯一の文化の境界線として想定してしまうと、ステレオタイプの文化学習となってしまう。ナショナルカルチャーのなかにもサブカルチャーがあり、またグローバルカルチャーも各国・地域の人びとの暮らしに影響を与えています。しかし、こうした多様性に十分留意しながらも、日韓や日中などを比較することに意味がある事象については、韓国語

の場合は、韓国の文化、中国語の場合には、中国大陆に住む漢民族の文化を中心に置くこととします。

また、日本の文化との比較分析や、日本の歴史的、文化的関わりについて学ぶことも重視したいと考えます。日本と地理的、歴史的に深いつながりがある隣国、隣人の文化には、日本の姿が鏡のように映しだされ、学習者はあらためて自己の発見をすることでしょう。

学習の対象とする文化事象を具体的に例示

「めやす」では、文化を知識として理解するだけでなく、「目にみえる」文化事象（事物や行動）を学習者が観察し、みずから発見や気づきをすることが重要だと考えています。

めやすウェブサイトでは、教師がこうした授業を行ったり、カリキュラムを作成したりする際の助けとなる情報として、着目すると思われる文化事象（事物や行動）を、15の話題分野別に掲載しています。

例えば、高校生の周辺で起こりそうな、日常生活のさまざまなコミュニケーション場面において表象する文化事象が、言語活動とリンクする形で提示されています。外での食事の場面などでは、レストランの名前、看板、メニュー、料理、注文の仕方、食事の仕方、食器、支払の仕方等々があります。

文化事象の扱い方・着目の仕方の提案

ウェブサイトには、文化事象例と、それぞれの事象について、どのようなコミュニケーション行動をするうえで問題となるのか、どのような比較対象を選んだらいいのか、何を比較して、どんな異同に気づくとおもしろいのか、何に留意する必要があるのかを例示しています。

さらに文化事象の背景にある「目にみえない文化」（考え方や価値観）については、なぜ文化に異同があるのかを学習者が調べて、考えることがとても重要です。教師が答えを教えるのではなく、学習者の興味・関心を喚起し、適切な材料を提供したり、学習を導いたりして、学習者の観察力、想像力、調査力、分析力などを高めることで、文化の学びの力が身についていくのです。

こうした学習によって、学習者は文化を固定的に捉えたり、一見して断定し、表面的な違いを一般化したりすることの危険性に気づくようになっていきます。文化の多様性や可変性といった文化のダイナミズムを捉える視点や、異質なものに対する寛容性、そしてみずからの価値観や常識を相対化する姿勢を身につけ、異文化間調整をしながら多様な人びととうまくつきあっていける力と、協働して社会を創れる力をもった学習者を育てることを「めやす」はめざしているのです。

5.4 グローバル社会領域のわかる・できる・つながる力

グローバル社会領域の「わかる」

21世紀のグローバル社会の特徴としては、①グローバル社会（個人・身近な地域社会・国・広域地域社会・世界がつながっている）、②国境の壁が低くなり、人びとは国境を超えて移動し、情報は地球全体で共有されている、③国家がさまざまな領域で相互依存関係にあり、地球の運命を人類が共有している、④国際社会の主体が国家だけでなく、個人の行動がグローバル社会に直接影響を与え、社会の変化が個人に影響を与えている、⑤多言語・多文化状況がいたるところで日常化し、国家は唯一の帰属集団ではなくなり、文化はそれぞれの固有性と多様性を残しつつ、多層化、重層化、共通化が進んでいる、などが挙げられます。

この領域における「わかる」力とは、社会の一員としての責任を自覚し、21世紀のグローバル社会の特徴や重要な課題を理解することです。この社会を生きぬくために必要な21世紀型スキルとは何かを理解し、それらを身につけることが必要だと認識することも目標としています。

グローバル社会領域の「できる」

21世紀の高度情報化社会、デジタル時代を生きぬくためには、20世紀とは異なる能力が必要とされています。これを21世紀型スキル（21st Century Skills、英語ではスキルズ：スキルより幅広い概念を示すために複数にしている。単なる技術的スキルではなく、能力に近いより広い概念）と称し、スキル育成をめざした世界的な教育改革の動きが活発化しています。

従来の物事を記憶する、暗記する学習ではなく、知識や情報を取捨選択し活用する力、課題を発見し解決する思考力が求められてい

ます。既存のものにとらわれない独創性、新しいことに前向きに対応する創造性が資質として大切です。「めやす」では、30頁で紹介するキー・コンピテンシー（Key Competencies）や21世紀型スキルを参考にし、「めやす」の実現のために必須である、協働力、高度思考力、情報活用力（情報・メディア・テクノロジー）の3つのスキルを身につけることに焦点をあて、グローバル社会領域の「できる」力を構成しました。

同時に、21世紀型スキルのなかから、内省、創造性、柔軟性、責任感などは「できる」力ではなく、「めやす」の教育目標として掲げた資質のなかに位置づけています（18頁参照）。

▶協働力

自分と違う考え方、価値観、感性をもつ多様な他者と協力して作業できる力を指します。

「めやす」は、日本の近隣地域をはじめとする広域地域社会において、ことばも文化的背景も異なるメンバーが、違いを乗り越え、広域ネットワーク社会を協働して創りあげていくことを目標にしています。

新たな価値の創造が期待される21世紀は、チームを組んで仕事することが想定され、協働力が必須とされています。日本の学校教育のなかでは、班（グループ）による学習方法が高く評価されてきました。21世紀に問われるグループ学習は、グループ内の協調性や社会性よりも、むしろ自分と異なる考え方、価値観、感性をもつメンバーから構成されるグループにおいて、他者と切磋琢磨して作業できる力を指しています。友好関係を深めて信頼関係を作り、各自が自分の役割に責任をもってあたることが期待されます。

協働力とは、①目標達成のための作業に、

グループの一員として参加できる（参加）、②自分に与えられた作業を、決められた時間内に責任をもってやり遂げることができる（信頼性）、③グループ内の話しあいで、メンバーの意見を聞くとともに、自分の意見も言い、全体の結論を出すために貢献することができる（ディスカッション能力）、④目標達成のために自分の能力、知識、時間などを提供し、メンバーを助けたり、妥協したりして、前向きに協働作業をすることができる（グループワーク）の4つです。

▶高度思考力

従来の外国語教育で重視されていた記憶力や想起力より高度な思考力を指しています。具体的には、①事実、問題、データなどを解釈し、分析し、評価し、自分の考えをまとめて発表できる（情報処理）、②自分の考えを客観化し、データで裏づけして説明することができる（客観的説明）、③問題に対処し、解決できる（問題解決）力のことです。

▶情報活用力

情報、メディア、テクノロジーを活用する力です。①必要な知識や情報を特定し、情報源にアクセスして、収集した情報を評価したり、整理したりすることができる（情報リテラシー）、②学習対象言語や文化に関連する生

のリソースを客観的に評価して、それがどのように言語や文化に反映されているか、あるいは影響を及ぼしているか理解することができる（メディアリテラシー）、③PC、インターネット、メールなどの現代の情報機器やソフトウェアをはじめ、音響・映像機器などの使い方や特徴を知り、環境や目的に応じて、適切かつ効果的に活用することができる（テクノロジーのリテラシー）の3つです。

グローバル社会領域の「つながる」

隣語を学ぶことを通して、自分が住んでいる身近な地域社会や国、広域地域社会（東アジア地域など）、グローバル社会がそれぞれ自分とつながっていることを実感し、それに関わることをめざします。

まずは地域社会とのつながりを考えたり、信頼できるウェブサイトで、世界の同世代と母語や外国語で情報交流や相互理解のためのやりとりをし、ネットワークを構築することも可能でしょう。人・モノ・情報に積極的にアクセスして、グローバル社会のネットワークに参入し、ネットワーク全体の目標達成やグローバル社会づくりのために、自分の能力、知識、時間などを提供したり、メンバーと助けあい協力して行動したりすることが期待されます。

コラム

世界が注目！ 21世紀型スキル

これまでで予想しなかった新しい形のグローバル化が進むなか、教育は依然として産業革命以来の古色蒼然とした教育方法と教育内容を踏襲しているといわざるをえません。学習者はテクノロジーを日常生活の当然のツールとして育ってきた世代であり、社会に出ると、新しい秩序、体系、環境のなかで働かなければなりません。そのような状況でありながら、教育は対応できていないという反省から、「21世紀型スキル」の重要性が叫ばれるようになりました。世界各国はいま新しい知識、能力、資質をもった人間を育てることに必死で取り組んでいます。

「めやす」が参考にしたのは、以下に紹介する3つのプロジェクトです。それぞれの研究の背景や、研究者には重なりがあり、相互に連動した動きがあります。

キー・コンピテンシー Key Competencies

OECD（経済協力開発機構）が、1999～2002年にかけて行なったプロジェクトの成果で、多数の加盟国の多分野にわたる専門家が参加して、国際的合意を得た新たな能力概念です。人が生きるうえで鍵となる力、国、文化、分野、状況を超え、グローバル社会を生きるために普遍的に重要とされる力、全ての個人の人生の成功と、良好に機能する社会を実現させるために必要な能力とされています。コンピテンシーという能力概念は、従来の知識や技能の習得に絞った能力観に加えて、その前提となる学習への動機、意欲や関心、習得した技能や能力を、行動や成果にいたるまで活

用できる力（コンピテンス）の複合体を指しています。コンピテンシーは次の3つのカテゴリーに分類されます。

- ①相互作用的に道具を用いる（道具：言語、シンボル、テキスト／知識や情報／技術）
- ②異質な集団で交流する（他者とうまく関わる／協働する／紛争を処理し解決する）
- ③自律的に活動する（大きな展望のなかで活動する／人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する／みずからの権利、利害、限界やニーズを表明する）

キー・コンピテンシーでは、言語は相互作用的に用いる道具のひとつに位置づけられています。言語知識や言語技能の習得だけでは意味がなく、行動が伴ってはじめて力となります。現実の生活で実際に言語を活用する力、すなわち対象言語話者と交流するためのコミュニケーション能力を身につけ、コミュニケーション行動ができてスキルを獲得したことになるとしています。

21世紀型スキルパートナーシップ Partnership for 21st Century Skills

2002年に米国のIT関連企業等の主導のもと、米国連邦教育省をはじめとする教育機関・財団が連携して設立した組織です。21世紀の人材を育てるために、主要教科のなかに21世紀の課題と、21世紀の課題解決に必要なとされるスキルを組みこむことをめざして米国の教育改革に乗りだしました。21世紀を生きるために必要な4つの分野の知識、スキル、

資質を挙げ、学習者がこれらを獲得することを教育の目標に取り入れるべきであると主張しています。また、教科の知識を与えて、それを学習したかどうかを評価するのではなく、以上の内容を組織的に取り入れたカリキュラムで教え、新しい方法で評価する必要があることも主張しています。

21世紀を生きるために必要な、知識、スキル、資質は以下のとおりです。

- ①教育の核となる教科の知識（国語、読解、数学、科学、外国語、経済、歴史、地理、芸術、政治社会等）と21世紀を生きるために重要な話題分野の内容（グローバル化の影響、ビジネス、経済、保健衛生、環境問題等）
- ②高度の思考能力と学習スキル（高度の思考能力と問題解決能力、創造性、創出性、コミュニケーションの能力、協働能力）
- ③テクノロジーのリテラシー、情報とメディアのリテラシー（情報活用能力）
- ④生活能力（リーダーシップ能力、倫理性、説明責任、生産性、自律力、社会的責任感、個人の責任感）

21世紀型スキル 21st Century Skills

マイクロソフト、シスコシステムズ、インテルと世界の教育科学の研究者たちが、OECD、UNESCOなどの国際機関とも連携して育成に取り組んでいる21世紀に身につけるべきスキル（能力）です。前述の21世紀型スキルパートナーシップが検討した考え方をもとに、2003年に取り組みが開始されました。

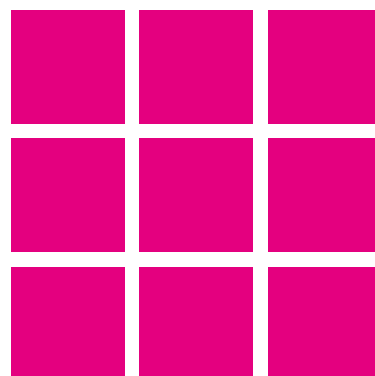
スキルは以下の4つのカテゴリー 10項目に整備され、それらを育成する基礎となる、情報リテラシースキル、ICT活用スキルが求められています。主要教科と学習スキルの重視、21世紀的コンテンツとコンテキストの学習、21世紀型学習ツールの使用と21世紀型スキルを測定する成績評価の実施を教育の指針にしています。

- ①思考の方法：創造性と革新性、批判的思考・問題解決・意思決定、学習能力・メタ認知
- ②仕事の方法：コミュニケーション、コラボレーション／チームワーク
- ③学習ツール：情報リテラシー、情報コミュニケーション技術／ICTリテラシー
- ④社会生活：市民権（地域および地球規模）、生活と職業、個人的責任および社会的責任（文化的差異の認識および受容能力を含む）

スキルの評価方法を検討するプロジェクトATC21S（21世紀型スキルの評価プロジェクト Assessment & Teaching of 21st Century Skills）も始動しました。2012年に実施されるOECDの国際学力到達度テストであるPISAでPCを使った問題解決能力の測定が加えられる可能性が高く、世界的注目を集めています。

参考文献

D.S. Rychen & L.H. Salganik (eds.) (2003) Key Competencies for a Successful Life and a Well-Functioning Society. Göttingen: Hogrefe & Huber. (立田慶裕監訳『キー・コンピテンシー：国際標準の学力を目指して』2006、明石書店)



コミュニケーション能力指標

(can-do statements)

コミュニケーション能力指標

「できる」力をめざすために
15の話題分野、4つの言語運用能力レベルを設け
学習到達目標を指標化しました。

言語領域の「わかる」（語彙や表現、文法、語法、音声、音韻、正書法の知識理解）については、これまで数多くの研究が行なわれてきたものの、「できる」力については具体的かつ体系的な学習到達目標の提示は行なわれてきませんでした。しかし、70-80年代から国内外の外国語教育現場において、コミュニケーションを重視した外国語教育が行なわれるようになるにつれ、近年、欧米では言語運用の到達目標が提示されるようになりました。

「めやす」では、学習者が中国語・韓国語を使って現実社会でどのようなコミュニケーション行動ができるようになったらいいかを考え、「～ができる」という能力記述文（can-do statements）で、学習到達目標となる「できる」項目を一覧化する作業に取り組みました。それがコミュニケーション能力指標です。

コミュニケーション能力指標は、言語領域を中心に作成したのですが、指標を達成するためには、文化領域とグローバル社会領域の能力も必要とされます。

指標化の必要性

外国語の授業では、カリキュラムの目標を、どんな文法・表現を教えるか、どんな語彙を教えるかという項目により立てることが多いと思います。こうしたやり方は、教師にとっては項目を順番に教えていけばカリキュラムを終了できる点で楽ですが、外国語の能力開発という観点から見ると、カリキュラムを終えても、学習者が外国語を使って何ができるようになったかを見極めることが困難です。

それに対し、カリキュラムの目標を、外国語を使って「～ができる」という形で設定し、それを達成するように教えると、カリキュラムの最後に学習者が何ができるかを評価しやすいし、「できる」能力をもった学習者が育ちやすくなるのです。具体的な能力指標をまず作り、学習者に最初に明示しておく、学習者は学習の成果が実感でき、学習意欲を高めることにつながります。また、教科書を1冊終えることを目標化するよりも、具体的なコミュニケーション能力が身につくことを目標化（指標化）するほうが、特定の教科書に縛られずに自分のクラスの状況にあった授業計画が立てられるという利点もあります。

15の話題分野別に、 コミュニケーション行動を提案

指標の作成にあたってまず、学習者にとって意味のある、内容を伴ったコミュニケーション行動であることを重視する立場から、学習者の興味・関心に根ざした身近な話題や、発達年齢に即した話題、さらには学習者の関心を喚起したり視野を広げたりする話題を15選定しました（次頁参照）。

これらの話題分野に沿って、学習者が出会うであろう実際の使用場面や状況を想定しながら、目標とするコミュニケーション行動を選び、指標化していきました。指標は、中国語・韓国語の各部会がまずそれぞれの言語や教育現場の状況を踏まえて開発したうえで両者を照合し、相互に比較する過程で、指標を追加したり調整したりしました。日本の高校

【15の話題分野と内容】

自分と身近な人びと／自分に関する話題、友だちや家族など身近な人、ペットの話題等

学校生活／自分が所属する学校の様子や学校での生活に関する話題

日常生活／学校の時間以外のふだんの生活に関する話題

食／食べ物の好き嫌いや食事の習慣など、食生活に関する話題

衣とファッション／服やアクセサリ、化粧などに関する話題

住まい／家に関する話題

からだと健康／からだの部位や特徴、健康などに関する話題

趣味と遊び／放課後や休日、アルバイト、趣味などに関する話題

買い物／実際の買い物場面、買い物行動に関する話題

交通と旅行／町の様子や通学などに利用する交通機関に関する話題

人とのつきあい／日常のあいさつなど

行事／年中行事や個人・家族に関する記念日などの話題

地域社会と世界／地理・歴史・時事問題などに関する知識についての話題

自然環境／四季や天気に関する簡単なあいさつ、気候に関する話題

ことは／母語と外国語に関する話題、簡単なあいさつを含む

生を学習者と想定しているので結果的に共通している指標が多くありますが、当然異なる指標もあります。これは、2つの言語のしくみ（構造）、音声、語彙、正書法などが異なるほか、2つの言語が話される社会、文化の違いもあり、また、日本国内における高校からの中国語教育、韓国語教育の実情が異なることによるものです。

指標は絶対的なものではない

コミュニケーション能力指標は、教える順を示したものでなく、またすべてを取りあげなくてはならないというものでもありません。それぞれの話題分野、それぞれのレベルで、高校からの中国語・韓国語教育で目標として設定するといひ、典型的な例を列举したものです。自分の授業の内容、学習者の興味、言語レベルに応じて、目標としてふさわしいものを採用したり、教師が新たな指標を追加したりすることを想定しています。指標が教育現場での実践を通じて、さらに成長していくことを願っています。

「めやす」では、言語領域中心のコミュニケ

ーション能力指標のみを作りましたが、文化領域とグローバル社会領域に関しても、その目標設定、評価には、後述の文化領域とグローバル社会領域のループリック（評価基準表）例が参考になります（94頁参照）。

言語レベルは4段階に設定

言語レベルについては、欧米の先行研究を参考にしながら、日本の高校から大学の状況に合わせて、以下のとおり、独自に1から4までの4段階の言語運用能力指標を設定しました（36頁の表参照）。コミュニケーション能力指標は、この言語運用能力指標とあわせて使用するものです。コミュニケーション能力指標が内容標準（何ができるかを提示）であるのに対して、言語運用能力指標は能力標準（どのくらいできるかを提示）であるので、両者が相まって「できる」の内容と到達度を示すことになります。

レベル1は、学習した基本的な語彙・表現を使って簡単な言語機能を果たせるレベル。

レベル2は、学習した語彙表現、文法を使って、想定内の言語活動を行なえるレベル。

レベル3は、想定外の状況でも、助けを借

りて言語活動が行なえるレベル。

レベル4は、想定外の状況で、言語を創造的に使い、複雑な言語活動もできるレベル。

この言語運用能力指標は、両言語共通のものとして作成しました。

この指標をもとに、中国語・韓国語の特徴を考慮しながら、15の話題分野別・4段階の言語レベル別コミュニケーション能力指標を作成しました。日本の高校の隣語教育の現状では、レベル1および2が目標として一般的であると思われますが、レベル3および4をめざす高校もあることと、「めやす」としては「高校から」大学・その他も視野に入れており、4段階にレベル設定をしました。

言語運用能力はコミュニケーション・モードで記述

言語運用能力指標およびコミュニケーション能力指標では、「話す、聞く、書く、読む」の4技能と、コミュニケーション論で使用されている3つのコミュニケーション・モード（対人、解釈、提示）を用いて記述しました。つまり、4技能そのものの上達をめざすのではなく、4技能を使ってコミュニケーションでできることを重視しています。

コミュニケーション能力指標では、3つのモードのバランスをとることに留意しました。3つのモードの特徴および各モードの例は、次頁の表のとおりです。

これまで外国語教育では、話す、聞く、書

言語運用能力指標

- | | |
|-------------|---|
| レベル1 | <ul style="list-style-type: none"> 自分が想定している範囲で、基本的な言い回しを使って、相手の協力を得られれば簡単なやりとりができる。 自分にとって身近な事柄について、短い語句や文で表現することができる。 よく耳にしたり目にしたりする語句や文のうち、ごく基本的なものを理解することができる。 |
| レベル2 | <ul style="list-style-type: none"> 自分が想定している範囲で、学んだ語句や文から選択して、相手の協力を得られればやりとりができる。 自分にとって身近な事柄について、短い語句や文を並べて表現することができる。 よく耳にしたり目にしたりする語句や文を理解することができる。 |
| レベル3 | <ul style="list-style-type: none"> 自分が想定していない状況においても、学んだ語句や文を使って、相手の協力を得られれば、ある程度創造的なやりとりができる。 自分の身の周りや関心のある事柄について、ある程度まとまった内容を、趣旨が通じる程度に表現することができる。 ある程度まとまった内容を、辞書の助けを借りたり、事前に関連情報を得たりして、理解することができる。 |
| レベル4 | <ul style="list-style-type: none"> 自分が想定していない状況においても、ある程度創造的なやりとりができる。 より広い範囲の事柄について、少し複雑かつ抽象的である程度まとまった内容を、より正確で適切な語句や文を使って表現することができる。 ある程度まとまった内容を理解することができる。 |

言語運用能力指標のレベル1と2は、以下の、①のNovice Low/Mid、②のBeginning/Transitional Level、③のA-1/A-2（基礎段階の言語使用者）レベルにおおよそ相当します。

①Proficiency Guideline, ACTFL (American Council on the Teaching of Foreign Languages), U.S.A. 1986（全米外国語教育協議会の学校教育用4技能言語運用能力基準）

②Japanese for Communication, A Teacher's Guide, Wisconsin DPI, U.S.A 1996（米国ウィスコンシン州教育庁編『日本語教育用カリキュラムガイドライン』）

③CEFR (Common European Framework of Reference for Languages, Council of Europe 2001. 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠)

く、読むという4技能ごとに目標を設定し、それに基づきコミュニケーション能力を評価するのが一般的でした。「めやす」では、コミュニケーションの過程や文脈に焦点をあて、コミュニケーション能力の目標をモード別に設定し、評価することを推奨しています。これまでの4技能については、3つのモードのな

かに含まれていると考えています。現実の言語生活では、3つのモードのコミュニケーションがそれぞれ相互に関連して行なわれているので、教室でも3つのモードが循環して練習できる授業設計をすると学習効果が上がります。

3つのコミュニケーションモード

モードの種類	モードの特徴
対人モード （やりとり） 話す・聞く 日常会話、電話での会話、面接やインタビュー、討論、あいさつ。 書く・読む メールや手紙の交換。	①話し手が直接的、間接的（電話など）に接触し、話しことばまたは書きことばを通して行なう双方向のコミュニケーション。対話に参加する者の間で意味のあいまいなところを明確にする意味交渉が行なわれる。 ②対人モードが適切に実行されるには、コミュニケーションの目的に応じて意味交渉がどのような流れで行なわれるか認識するなど、適切な戦略を使える社会文化的知識も重要。
解釈モード （理解） 聞く 電車等の車内放送や録音された電話案内を聞く、ラジオやテレビドラマを聴取・視聴する。 読む 街頭の広告を読む、新聞や小説を読む。	①話しことば（音声）や書きことばを通して、意味、情報、感情を受けとる受動的なコミュニケーション。情報の提供者はその場にはおらず、情報の受け手が提供者の発した話しことばや書きことばを通して情報を理解、解釈しようとする。 ②情報には言語だけでなく、図、絵、写真、表など理解、解釈を助けるものが含まれることもある。 ③言語知識を使って意味を理解するだけでなく、いろいろな情報、知識、スキルを使い、個人的に解釈していることに留意。また意味交渉ができないため、より高度な言語、文化、思考力が必要。
提示モード （表現） 話す ビジネスプレゼンテーション、聴衆の前で歌を歌う・劇を演じる、講義をする、子どもに話を聞かせる。 書く 新聞の記事を書く、ニューズレターを作る、ポスターを作る、レポートを書く。	①話しことば、書きことばで聞き手のグループや直接接触のない読み手や聞き手に対して、意味、情報、感情を伝える能動的コミュニケーション。意味がわかりやすいようにある種の構成（例えば、導入部分、結論部分など）を使ったり、相手の文化的規範に従った形式で情報を伝える。 ②文字情報のほかに、写真、絵、表などの統計的データなどを伴うこともある。 ③聴衆、読者に応じた情報の伝達方法がコミュニケーションパターンを選択する文化的能力も必要となる。相手を説得しようとする、高度の思考能力を使うことになるし、プレゼンテーションでは、情報活用能力も求められる。

コミュニケーション・モードの考え方は以下の文献を参照しました。
 National Standards in Foreign Language Education Project (eds.): Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century, National Standards Collaborative Project, 1999.

コミュニケーション能力指標を使う際の留意点

話題分野

- ◆15の話題分野は、外国語のカリキュラムで初級から比較的よく使われる順に挙げている。
- ◆基本となる話題分野を設定して、そのなかから学習目標とする指標を選択する。複数の話題分野から指標を選択して授業を設計することもできる。
- ◆クラスの状況に合わせて話題分野のトピックスの内容を組みかえて使用することも推奨される。

言語レベル

- ◆各話題分野の指標一覧では、言語運用能力指標の言語レベルの段階を1から4の数字で示している。35頁にあるように、コミュニケーション能力指標は内容標準なので、常に各言語レベルの到達度を示す能力標準である「言語運用能力指標」(36頁の表参照)とセットになっていることに留意されたい。
- ◆各レベルの指標の冒頭にある1-a、1-bなどの番号は、引用するときに便利のように、便宜上振ったものである。
- ◆クラスの言語レベルを設定して、そのなかから学習目標とする指標を選択することが基本となるが、複数の言語レベルから指標を選択することも推奨される。

指標の表示

- ◆各話題分野および各言語レベルにおける指標の数は異なっている。よく使われる身近な話題分野ほど取りあげた指標は多い。
- ◆中国語、韓国語ともに、日本の高校生を主な学習者と想定しているため、指標の多くは共通になっている。ほかの言語の参考にもなりうると考えられる。しかし、言語や文化の固有性や日本語との関係性も考慮し、独自の指標を選定したり、独自の事例を付けたりしている。各言語独自の指標には末尾に(韓)(中)とそれぞれ記している。
- ◆指標はコミュニケーションモード(37頁の表参照)を踏まえ記述されている。指標を活用するときは、それが対人(話す・聞く、読む・書く)、解釈(聞く、読む)、提示(話す、書く)の、どのモードで記述されたものかを常に念頭に置くことで、指標と実際のコミュニケーション活動を関連づけることができる。また、あるモードで提示されている指標をほかのモードに変えて使用することもできるが、この際には文字、情報量の負荷などを考えて、学習者のニーズに合った指標を作ることが望ましい。

なお、めやすウェブサイトでは、各話題分野および各言語レベル別に、指標を達成するために必要とされる語彙例、表現例、文化事象例、グローバル社会事象例、評価例を数多く示しています。また各話題分野・各言語レベル別の単元案がプロジェクトメンバーによって開発され順次掲載される予定です。さらに、広く教育現場からのフィードバックを得て、追加すべきコミュニケーション能力指標をはじめ、実践例を収集し共有していく予定です。これらの材料を活用して、あなたの学習者に合ったマイプランを設計してください。

1

1-a. 名前（姓名）や属性（高校生、学年、年齢、誕生日など）を、言ったり尋ねたりできる。

1-b. 家族構成（何人家族で誰がいるか）について、会話したり、書いて説明したりできる。

1-c. 簡単な自己紹介（姓名、学校、学年、年齢、誕生日、干支、住んでいる所、好きなこと、趣味など）を、口頭でまたは書いてすることができる。

1-d. 携帯番号やメールアドレスを、口頭で伝えあうことができる。

1-e.（自分やクラスメート、先生などの）名前を、ハングルで書いたり読んだりできる。（韓）

3

3-a. 自分や身近な人の特徴（得意なことや不得意なこと、長所・短所、性格など）について、口頭でまたは書いて紹介しあうことができる。

3-b. 好きなことやもの・人について、その理由を含めて、口頭でまたは書いて紹介しあうことができる。

3-c. 自分の経験（うれしかったこと、つらかったこと、感動したことなど）について、語りあったり、書いて伝えたりできる。

3-d. 人生設計（何歳ごろ何をしたいか、その理由など）について、書いて伝えたり、語りあったりできる。

3-e. 自分の人生の目標やモットーについて、口頭でまたは書いて紹介できる。

3-f. 家族について簡単に紹介した文を読んで概要を理解したり、それを参考に自分の家族について書いたりできる。

3-g. 将来の夢や希望について、語りあうことができる。

2

2-a. 家族の職業（会社員、学生など）やペット（名前、種類、飼いはじめた時期など）について、口頭でまたは書いて紹介しあうことができる。

2-b. 自分や身近な人の外見（背が高い、髪が長いなど）について、口頭で描写しあうことができる。

2-c. 卒業後の進路（進学する、就職する、留学するなど）および将来就きたい職業や働きたい場所について、話しあうことができる。

2-d. 相手の国に親戚や知り合いが住んでいるかどうかについて、口頭でやりとりできる。

4

4-a. 自分の生い立ちや思い出について、文章にまとめることができる。

4-b. ライフストーリーや手記を読んで、概要を理解できる。

4-c. 家族（親子関係や家族の役割など）について書かれた文章（評論、小説など）を読んで、家族のあり方について意見交換できる。

4-d. 友だちづきあいについて書かれた文章（日本や相手の国の高校生の事例など）を、読んで比較することができる。

自分と
身近な人びと

学校生活

1

1-a. 学校の名前や所在地（都道府県や市など）を、言ったり書いたりできる。

1-b. 中国語で書かれた時間割（何曜日、何時間、科目など）を、見て理解できる。（中）

1-b. ハングルで書かれた時間割（何曜日、何時間、科目など）を、読んで理解できる。（韓）

1-c. 時間割を見ながら、好きな科目や嫌いな科目について、言ったり尋ねたりできる。

1-d. 学校のこと（制服、給食、宿題、体育館・図書室ほかの設備の有無など）について、口頭でやりとりできる。

1-e. よく使われる教室用語を聞いて理解したり、わからないときは、そのことを伝えたりできる。

1-f. 授業やクラブを担当している先生（名前、性別、担当科目やクラブ、出身地など）を口頭で紹介することができる。

1-g. 自分が学習している科目名や学校の施設名を、書いて伝えることができる。

3

3-a. 学校生活で感じていること（楽しいことや大変なことなど）について、語りあったり、書いて伝えあったりできる。

3-b. 先生がどんな人（外見や性格など）か、口頭でまたは書いて説明することができる。

3-c. 学校の特徴（ユニークな授業や何で有名か）について、口頭で紹介しあうことができる。

3-d. 自分の学校の行事（行事名、時期、内容など）について、口頭でまたは文章にして紹介することができる。

3-e. 相手の高校の学校案内を読んで、概要を理解できる。

3-f. 校則（制服、頭髪、携帯電話の使用など）について、口頭で説明したり尋ねたりできる。

3-g. 学校のなかを、設備の配置などを説明しながら案内することができる。

3-h. 交流行事で学校を代表して、学校紹介などを交えたスピーチができる。

2

2-a. 教室や学校内のどこに何があるか（げた箱、職員室、体育館、プール、保健室など）について、口頭でやりとりできる。

2-b. 学校の簡単な概要（共学、中高一貫、全校／クラスの生徒数、男女別人数、時間割など）を説明した、簡単な資料を作ることができる。

2-c. 休み時間や放課後の過ごし方（クラブ活動、生徒会活動、清掃など）について、口頭でまたは書いて紹介しあうことができる。

2-d. 学校のスケジュール（1日、週間、年間）について、口頭でまたは書いてやりとりできる。

2-e. 自分がクラスや学校・クラブ活動などで担っている役割（委員や係りなど）について、話すことができる。

4

4-a. 学校についての案内や行事のお知らせなどを載せた資料を作ることができる。

4-b. 日本の高校生活の特徴や教育制度について、口頭または文章で説明することができる。

4-c. 相手の国の高校生活の特徴や教育制度についての説明を聞いたり読んだりして、日本と比較しながら意見交換できる。

4-d. 受験について書かれた新聞などの記事を読んで、感想や意見を述べあうことができる。

1

- 1-a. 1日の生活の基本的なあいさつができる。
- 1-b. 1日の生活行動（何時に何をするか）について、会話できる。
- 1-c. 1週間の生活行動（何曜日に何をするか）について、会話できる。
- 1-d. 普段持ち歩いているものや身につけているものについて、会話できる。
- 1-e. 予定（いつ何をするか）を、メモにして伝えることができる。

3

- 3-a. 毎日の生活における自分なりの過ごし方や工夫について、会話ができる。
- 3-b. アルバイトの経験（頻度、期間、はじめたきっかけ、続けた理由、学んだこと、感じたことなど）について、口頭で説明できる。
- 3-c. 身近な人（家族や友人など）と普段どのように過ごしているかについて、短いエッセーを書くことができる。
- 3-d. 家族内の家事分担や自分の役割について、話しあうことができる。
- 3-e. 家庭内での習慣や決め事（朝晩のあいさつ、門限など）について、理由とともに文章で紹介できる。
- 3-f. テレビの番組表などを理解できる。
- 3-g. 日記を書くことができる。

2

- 2-a. 日常の生活行動（1日単位または1週間単位）について、その頻度や時間の長さなどを含めて、口頭で紹介しあうことができる。
- 2-b. 1日、1週間単位の予定や報告（何曜日に何をするか／したかなど）を、簡単に、口頭でまたは書いて伝えあうことができる。
- 2-c. 日常生活の様子（忙しい、楽しいなど）について、会話できる。
- 2-d. その日にしたことを、箇条書きで記録できる。
- 2-e. カレンダーに書かれた予定を、だいたい理解できる。

4

- 4-a. 困っていること、悩んでいること、不満に思っていることなどを、打ち明けたり、聞いてあげたりできる。
- 4-b. 日常生活で起きたハプニングや失敗談を披露できる。
- 4-c. いろいろな人のライフスタイルについての記事を読んだり番組を見たりして、そこから学んだことを話しあうことができる。

日常生活

1

1-a. お店の看板（レストラン、食堂、ファストフードなど）を、見て理解できる。

1-b. レストランなどで、従業員を呼ぶことができる。

1-c. 必要なもの（メニュー、箸、皿、紙ナプキンなど）を、要求することができる。

1-d. 食べたいものや飲みたいものを、メニューのなかから探すことができる。

1-e. メニューを指さして、数量や有無を確認しながら注文できる。

1-f. 料理の味や状態についての簡単な感想（おいしい、甘い、辛い、薄い、熱いなど）を述べたり、受け答えをしたりできる。

1-g. 残った料理を持ち帰りたいと頼むことができる。

1-h. お店で食事の会計をすることができる。

1-i. 食べたい料理やおいしいと思った料理、行きたい店や気に入った店の名前などを、メモできる。

1-j. 食事のときによく言う表現（おながすいた／いっぱいだ、召しあがれなど）を使って、口頭でやりとりができる。（中）

1-j. 食事のときによく言う表現（いただきます、ごちそうさま、召しあがれなど）を使って、口頭でやりとりができる。（韓）

1-k. 自分の好きな食べ物、嫌いな食べ物、食べられないものなど、料理名や食品名を、口頭で伝えることができる。

1-l. 朝食・昼食・夕食によく食べるものについて、言ったり尋ねたりできる。

1-m. 自分が作ることができる料理や、作ってみたい料理の名前を口頭でまたは書いて伝えることができる。

3

3-a. 健康的な食生活（気をつけていること、間食・外食をしているかなど）について、話したり書いたりして紹介できる。

3-b. 料理番組を見たり、各地の代表的な料理のレシピなどを讀んだりして、材料や作り方が理解できる。

3-c. 日本の代表的な料理や自分の住んでいる地域の料理（料理名、味付け、作り方）について、口頭または文章で紹介できる。

3-d. 日本と相手の国の食文化（食べ方、マナーなど）について、紹介文を書くことができる。

3-e. 日本と相手の国の食文化（食べ方、マナーなど）について、会話できる。

食

2

2-a. メニューを見て、大きな分類（前菜、スープ類、肉料理、魚料理、主食、鍋料理など）が理解できる。

2-b. 注文した料理について、不満（遅い、違うなど）を伝えることができる。

2-c. 料理を勧めること（たくさん食べてください、熱いうちに食べてくださいなど）、勧められたときの対応（もう食べられません、～は苦手ですなど）ができる。

2-d. 支払いの仕方（割り勘、ご馳走になる／する）について、口頭でやりとりできる。

2-e. 食品のラベルにある主な情報（商品名、食材、食べ方、賞味期限、カロリーなど）を、見て理解できる。

2-f. 料理の種類（洋食、和食、韓国料理、中華料理など）の好みについて、会話できる。

2-g. 自分の食生活（いつ、どこで、誰と、どんなものを食べるかなど）について、口頭で説明できる。

2-h. 日本と相手の国それぞれの年中行事で何を食べるかについて、写真などを見せながら口頭で紹介しあうことができる。

2-i. 料理の大まかな作り方（調味料、食材、調理器具など）を、身ぶりを交えたり、絵に描いたりして、口頭で説明しあうことができる。

2-j. 自分の好きな食べ方・嫌いな食べ方（かける、まぜる、つける）を、伝えることができる。（韓）

4

4-a. 地域・季節・民族などによって多様な中国料理に関する資料を、インターネットなどで調べ、それぞれの特徴について、レポートにまとめることができる。（中）

4-a. 地域・季節などによって多様な韓国料理に関する資料を、インターネットなどで調べ、それぞれの特徴について、レポートにまとめることができる。（韓）

4-b. 現代の若者の食生活について読んだり聞いたりして、その内容について、口頭またはメールや手紙などを使って意見交換できる。

4-c. 世界の食文化や食糧の問題についての新聞や雑誌の記事を読み、そのことについての意見を口頭で発表できる。

1

1-a. 身につけているもの（服、かばん、靴、小物など）の名称や色・素材を、言うことができる。

1-b. 服の好み（よく着る服、好きな色など）や髪型の好み（ロング、ショートなど）について、言ったり尋ねたりできる。

1-c. 身につけているもの（服、かばん、靴、小物など）をほめる（よく似合う、きれいなど）ことができる。

1-d. ファッション雑誌を読むか、どのファッション雑誌を読んでいるか、言ったり尋ねたりできる。

1-e. 知っている芸能人やスポーツ選手のファッションについて、感想（カッコいい、かわいい、ださいなど）を言うことができる。

3

3-a. ファッション雑誌の記事を読んで、いまの流行について、理解できる。

3-b. いま、自分たちの間で流行しているファッションについて、写真などを用いて、簡単に紹介しあうことができる。

3-c. 服装や小物、髪型などの流行について、思ったことや感じたことを、文章で表現できる。

3-d. 服装や身だしなみ・髪型などの学校でのルールについて、口頭で説明したり尋ねたりできる。

3-e. 社会的な行事（冠婚葬祭など）のときの服装のTPOについて、口頭で説明したり尋ねたりできる。

3-f. ファッションについて、どこから情報を得るのか、話しあうことができる。

2

2-a. 自分の服装や身につけているもの・髪型について、書いて紹介できる。

2-b. 髪型・服装・身につける小物などの好みについて、言ったり尋ねたりできる。

2-c. ショッピング（服や小物）や美容院・理容室に行く頻度はどのくらいか、言ったり尋ねたりできる。

2-d. 雑誌や写真を見せながら、美容院・理容室で自分の希望する髪型を大まかに伝えることができる。

2-e. 洗顔、洗髪、整髪などに関する商品のラベルを見て、使い方がわかる。

2-f. 自分が作れるあるいは作ったことのある衣服や小物（マフラー、手提げかばんなど）について、会話できる。

4

4-a. 服装のTPOについて、ある程度まとまった文章を読んだり、話したりできる。

4-b. 自分のファッションに対するこだわりについて、話しあうことができる。

4-c. 相手の国の伝統服や民族衣装について調べ、その特徴（歴史や地域性、現代の利用状況など）について、レポートにまとめることができる。

4-d. さまざまな制服について調べ、その機能や意味（職業や身分との関係など）について、意見交換できる。

衣と
ファッション

1

1-a. 各部屋（台所、トイレ、寝室、居間など）の名称を、言ったり、聞いて理解したりできる。

1-b. 部屋のなかにあるもの（机、ベッド、本棚など）を、言ったり、聞いて理解したりできる。

1-c. 自分が住んでいる所（自宅が学校の寮か、何階か、一軒家かなど）について、言ったり尋ねたりできる。

3

3-a. 住居の大きさ・構造（間取り、階、誰が使う部屋かなど）を、口頭でまたは書いて、簡単に説明できる。

3-b. 部屋の使い方や特徴について、会話できる。

3-c. 住居について気に入っているところや改善したいところなどを、伝えあうことができる。

3-d. 住居やその周辺環境として望ましい条件は何かについて、話しあうことができる。

3-e. 学校の寮などの施設の使い方や建物の設備、器具の使い方や注意点について書かれた文章を、読んで理解できる。

3-f. 日本と相手の国の多様な住居（形態や住み方など）について書かれた文章を読んで、それぞれの特徴を、簡単なレポートにまとめることができる。

2

2-a. 部屋の様子（日当たりがいい、南向き、散らかっているなど）を、口頭で説明できる。

2-b. 家具の配置（何がどこにあるのかなど）について、言ったり、聞いて理解したりできる。

2-c. 家の周りの環境（近くにある建物、静か／にぎやか、駅から近いなど）について、言ったり尋ねたりできる。

4

4-a. 日本と相手の国の家のしくみについて調べて、共通点と相違点を、話しあうことができる。

4-b. 将来どんな家に住みたいかについて、書いたり話しあったりできる。

4-c. 自分が住みたい部屋の条件を伝え、賃貸契約について、交渉することができる。

4-d. 人にとって住居がどのような意味をもっているのかについて、話しあうことができる。

4-e. 日本と相手の国の住宅問題に関する記事を読み、その解決方法について、話しあうことができる。

4-f. 地域の自然や気候、生活形態と住環境の関係について調べ、自分なりの意見を述べることができる。

住まい

健康からだ だと

1

1-a. からだの部位や体型の特徴（やせている／太っている、背が高い／背が低い、足が長い／短いなど）について、口頭でまたは書いて表現できる。（中）

1-a. からだの部位や体型の特徴（やせている／太っている、背が高い／背が低い、足が長い／短いなど）について、口頭で説明できる。（韓）

1-b. 身長・体重・血液型を、言ったり尋ねたりできる。

1-c. からだの調子（疲れているか、気分が悪いかなど）について、言ったり尋ねたりできる。

1-d. 病院や保健室に行きたいと言ったり、行くことを勧めたりできる。

1-e. 身近な薬に必要なもの（風邪薬、痛み止めなど）を、言うことができる。

3

3-a. 病院の受付で受診に必要な手続き（申込書や問診表の記入など）ができる。

3-b. 医師の質問を理解し、病気やけがの経緯や状況を口頭で説明することができる。

3-c. 医師の診断結果（薬の服用の仕方、入院の必要性など）を聞いて理解できたり、それについて質問したりできる。

3-d. 診断書や薬の説明書を、読んで概要を理解できる。

3-e. 健康のためによいと言われている民間療法（食事療法、服装、過ごし方、心のもち方など）について、口頭で情報交換できる。

3-f. 好きな人や有名人が行なっている健康法や体力づくりなどについて書かれている記事を、読んで概要を理解できる。

3-g. 自分の健康法や体力づくりについて、書いて伝えることができる。

3-h. 入院日数や薬の服用の仕方などについて、尋ねることができる。

2

2-a. 病院の案内図を見て、自分が受診したい科の場所を、見つけることができる。

2-b. 他人や以前の自分と比較しながら、いまの体型やからだの部位の特徴について、会話できる。

2-c. 健康のためにしていること（運動、食事など）について、口頭で紹介しあうことができる。

2-d. 病状（風邪をひいた、おなかや頭が痛い、熱がある、咳が出るなど）について、口頭で説明したり、尋ねたりできる。

2-e. からだの調子について、書いて伝えることができる。

2-f. お見舞いの決まり文句を、口頭でまたは書いて伝えることができる。

2-g. 口頭のまたは書かれたお見舞いの決まり文句を理解できたり、自分の回復状況を口頭でまたは書いて伝えたりできる。

2-h. 医師の指示（仰向けに寝てください、横を向いてくださいなど）を、聞いて理解できる。

2-i. 医師に診断書を書いてほしいと、口頭で依頼できる。

4

4-a. 健康や保健に関する文章（運動と体力づくり、からだのしくみなど）を読んで、発見したことや自分の考えを話すことができる。

4-b. 漢方薬や漢方医学について書かれた文章を、読んで理解できる。（中）

4-b. 韓方薬や韓方医学について書かれた文章を、読んで理解できる。（韓）

4-c. 日本と相手の国の伝統的な健康維持法や病気の治療法について調べ、それぞれの特徴をレポートにまとめることができる。

4-d. からだの部位を使った日本語と学習対象言語の表現を比較し、それぞれの考え方について、話しあうことができる。

1

1-a. 休みの日（週末や長期休暇など）の過ごし方（よくすること）について、会話できる。

1-b. 休みの日に友だちを（行楽地、カラオケ、コンサートなどに）口頭で誘うことができる。

1-c. どんなこと（スポーツ、映画、読書など）をするのが好きか、口頭で紹介しあうことができる。

1-d. 好きな有名人の名前や職業などを、口頭でまたは書いて紹介しあうことができる。（中）

1-d. 好きな有名人の名前や職業などを、口頭で紹介しあうことができる。（韓）

1-e. 好きなテレビドラマや映画・本・音楽などのタイトルを、リストアップできる。

3

3-a. 友だちからの遊びに行く誘いを、人間関係に配慮しながら、口頭で受けたり、断ったりできる。

3-b. 好きなことや熱中していることの、すばらしさやおもしろさを、口頭で伝えることができる。

3-c. 趣味や習い事（頻度、期間、はじめたきっかけ、続けた理由、自分にとっての意味など）について、口頭で説明できる。

3-d. 自分の周りではやっていることやものについて、写真や実物を使いながら、口頭でまたは書いて紹介できる。

3-e. 遊びやゲームのルールなどの説明書を、読んで大意を理解できる。

2

2-a. 友だちを遊びに誘って、待ち合わせの約束を、電話またはメールですることができる。

2-b. 休みの日にしたこと（いつ、どこで、何を、誰となど）について、感想（楽しかった、疲れたなど）を含めて、口頭で伝えあうことができる。

2-c. 映画上映やイベント公演について書かれた情報を、読んで理解できる。

2-d. 出かけるときに持っていくものについて、口頭またはメールで確認しあうことができる。

2-e. 休みの日によくすること（趣味、アルバイト、ボランティアなどの内容）について、感想（おもしろい、つらいなど）を交えて会話できる。

2-f. 好きなものや趣味が何か、口頭でまたは書いてやりとりできる。

4

4-a. 映画や小説などのあらすじや、イベントの見どころを、口頭で説明できる。

4-b. 相手の国における日本のポップカルチャーについて調べ、現地の若者がどのようにそれを受け入れているかについて、話しあうことができる。

4-c. 日本と相手の国の余暇の過ごし方について、インターネットなどで調べ、その結果を、口頭で発表したり、レポートにまとめたりできる。

4-d. 自分や同世代が余暇にアルバイトをする目的や経験について、口頭または文章で説明できる。

4-e. 現代社会の多様なライフスタイルに関する記事を読んで、労働と余暇について自分の意見を、レポートにまとめることができる。

趣味と遊び

買い物

1

1-a. 中国語で書かれた案内図などを見て、自分が買いたいものの売り場を、探すことができる。(中)

1-a. 買いたいものがどこで売っているのか尋ねて、身ぶり手ぶりなどの助けを借りて、理解できる。(韓)

1-b. 基本的な接客表現を、聞いて理解できる。

1-c. メモを見せたり、身ぶり手ぶりを交えたりして、自分が買いたいものがあるかどうかを、尋ねることができる。

1-d. 店員に値段を尋ねて数字を示してもらうなどして、価格を把握できる。

1-e. 購入する意思の有無を、口頭で伝えることができる。

1-f. 商品を指さしながら、口頭で見せてほしいと店員に頼むことができる。

1-g. 広告やカタログなどを見て、買いたいもののリストを作ることができる。

1-h. 購入したものの包装依頼や、入れる袋の要不要を、言うことができる。

1-i. お店の開店・閉店時間を、尋ねることができる。

1-j. 支払い場所や支払い方法を尋ねて、お金を払うことができる。

3

3-a. ほかのもの（より大きいもの、デザインが違うものなど）を店員に探してもらうことができる。

3-b. 値段の交渉（減額してもらう、おまけをもらう、希望価格を言う、値引き限度額を尋ねるなど）をすることができる。

3-c. 購入したものの細かい包装の指示や配送の依頼を、口頭ですることができる。

3-d. 注文書に必要な事項を記入し、商品を購入することができる。

3-e. 商品の支払い方法について書かれたものを、読んで内容を確認することができる。

3-f. 人気商品が売れている理由を、尋ねて理解できる。

3-g. 商品の使い方や保存の仕方などを、聞いて理解できる。

3-h. 日常の買い物（どこで何をかうか、その理由など）について、口頭でまたは書いて紹介しあうことができる。

3-i. お小遣いやその使い方について、紹介しあうことができる。

2

2-a. お店や売り場の場所、買いたいものの有無や値段などを、尋ねることができる。

2-b. 価格の決め方（割引や売り方など）に関する表示を、見て理解できる。(中)

2-b. 案内図や価格の決め方（割引や売り方など）に関する表示を見て、売り場の場所や商品の価格などを、理解できる。(韓)

2-c. 欲しい商品の数・サイズ・色などを伝えることができる。

2-d. (商品の試着など) 試してみてもいいか、尋ねることができる。

2-e. 商品について感じていること（値段が高い、大きいなど）を、口頭で伝えることができる。

2-f. 買い物の情報（場所、商品名、価格など）を、口頭でまたは書いて、教えてもらったり、アドバイスしたりできる。

2-g. 店員の勧めを断る（ほかには何もいらない、1個だけでいいなど）ことができる。

2-h. 支払い場所や支払い方法（レジの場所やクレジットカードの使用の可否など）を尋ねて、代金を支払うことができる。(中)

4

4-a. インターネットやカタログなどで商品を比較検討し、どれを購入すべきか決めて注文できる。

4-b. 購入した商品についてクレームをつけ、返品・交換を（手紙などで）依頼できる。

4-c. 電話で商品などの注文ができる。

4-d. 若者の消費行動などについてのテレビ報道を見たり、新聞や雑誌を読んだりして、レポートにまとめることができる。

4-e. 店内放送（商品の宣伝など）や店頭販売を、聞いて理解できる。

1

- 1-a. 自分の行きたい場所を、口頭でまたは書いて伝えることができる。
- 1-b. 観光名所やお勧めのお土産を、尋ねることができる。
- 1-c. 通学などで普段利用する交通機関を、言ったり尋ねたりできる。
- 1-d. 施設（駅、空港、店など）の案内表示（〇〇行き、切符売り場、入り口、入国検査など）や街中の標識（交通標識、立ち入り禁止、出入り口など）を見て理解できる。
- 1-e. 列車や飛行機の時刻表を、見て理解できる。
- 1-f. 券売機で切符やカードの購入ができる。
- 1-g. 目的地と枚数を、言ったり、書いて見せたりして、切符を買うことができる。
- 1-h. 身ぶり手ぶりを交えながら、席があいているかどうか尋ねたり、席を勧めて譲ったりできる。
- 1-i. 車やオートバイの運転免許の有無について、言ったり尋ねたりできる。
- 1-j. 乗り場や買った切符などが正しいかどうか、口頭で確かめることができる。
- 1-k. ホテルのフロントで、必要な情報（両替・荷物の預かりなどができるか、周辺にコンビニがあるかなど）を、尋ねることができる。

3

- 3-a. 目的地までのアクセス方法（交通手段、道順、所要時間や費用など）を尋ねたり、説明したりできる。
- 3-b. 観光地の案内プレートや説明文・ガイドブックの大意を理解できる。
- 3-c. 旅行ガイドの説明を、聞いて大意を理解できる。
- 3-d. 旅行について（旅行中の出来事や印象に残ったことなど）、感想を話したり、簡単な紀行文を書いたりできる。
- 3-e. 将来行きたい所やお勧めの旅行先について、理由を含めて語りあうことができる。
- 3-f. 自分の住んでいる地域の交通事情について、口頭または文章で説明できる。
- 3-g. ホテル内の設備や備え付け品の利用方法（電話のかけ方、シーツ交換やクリーニングサービス、有料か無料かなど）についての説明を、読んで理解できる。
- 3-h. インターネットを利用して、宿泊希望日やアクセスを確認したり、部屋の希望を伝えたりして、ホテルの予約ができる。
- 3-i. 列車やバス・駅・飛行機・空港内での通常のアナウンスを、聞きとることができる。

2

- 2-a. 地図を見せながら、目的地までの道順を、尋ねることができる。
- 2-b. 目的地までの所要時間や費用について、尋ねたり教えたりできる。
- 2-c. 目的地までの交通機関、ルート（乗降駅、乗換駅など）、所要時間や料金について、尋ねたり、口頭でまたは書いて教えたりできる。
- 2-d. 始発と終電の時間を、尋ねることができる。
- 2-e. バスや電車にどんな種類があるか、説明できる。
- 2-f. 乗るときに行き先を確かめたり、目的地に着いたかどうか尋ねたりできる。
- 2-g. ここで降りしてほしい、道をあけてほしい、などの意思表示ができる。
- 2-h. 荷物を持ってもらったり、持ってあげたりするための簡単なやりとりができる。
- 2-i. 旅行計画やいままでの旅行（いつ、どこへ、誰と、何日くらいなど）について、会話できる。
- 2-j. 旅行の簡単な日程表を作って、相手に知らせることができる。
- 2-k. 車内や駅などに書いてある、交通ルールやマナー表示（優先席、並び方など）を見て理解できる。
- 2-l. 宿泊先のトラブル（お湯が出ない、テレビがつかない、バスタオルが無い、鍵をなくしたなど）を、伝えることができる。

4

- 4-a. 旅行の目的地（地理、歴史、見どころ、魅力など）について調べてレポートにまとめ、口頭または文章でやりとりできる。
- 4-b. 旅行の手配（交通機関、ホテルの予約など）を、電話でできる。
- 4-c. 旅行の途中で発生した交通機関やホテルの、トラブルや変更に対し、口頭で対応できる。
- 4-d. 日本と相手の国の交通システムについて書かれた文章を読んで、それぞれの特徴を比較しながらレポートにまとめたり、口頭で発表できる。

1

1-a. 人とのつきあいでよく使う基本的なあいさつ表現（初対面、感謝、励まし、謝罪、断りなど）を、言ったり、聞いて理解したりできる。

1-b. 電話・ファクスの番号やメールアドレスを、口頭で伝えあうことができる。

1-c. 自分や交流相手の住所や宛名を書いたり、書かれた住所や宛名を見て理解したりできる。

1-d. 電話をかけるときによく使う表現（もしもし、～いますかなど）を用いて、電話で簡単なやりとりができる。

1-e. お祝いの気持ち（おめでとう、頑張ったねなど）を、口頭でまたは書いて伝えることができる。

1-f. 招いたり招かれたりするときに交わす基本的な表現を、言ったり、聞いて理解したりできる。

1-g. 相手のこと（性格、特技など）を、口頭でまたは書いてほめることができる。

3

3-a. 日本ではどんなときにどんなあいさつをするか、口頭または文章で紹介できる。

3-b. 相手に受け入れてもらえるような表現を使って、口頭で忠告や断りなどができる。

3-c. 相手の年齢や立場を配慮して、手紙を書くことができる。

3-d. 相手の国の家庭や学校で守らなければいけないマナーやルールについて書かれた文章を、読んで理解できる。

3-e. 日本の家庭や学校で守らなければいけないマナーやルールについて、口頭でまたは書いて説明できる。

3-f. 日本と相手の国の人びとの好みや日常の習慣・つきあい方について書かれた文章を、読んで大意を理解できる。

3-g. インターネット・電話・ファクスの使用に関する指示を、聞いて理解できる。

2

2-a. 電話の取り次ぎや間違い電話をかけた場合の対応ができる。

2-b. 相手の都合を聞いて、日程や場所などを決めることができる。

2-c. 誰かを誘ったり、誘いを受けたり断ったりできる。

2-d. 贈り物を渡すときの表現を、言ったり、聞いて理解したりできる。

2-e. 招かれたことに対するお礼を、口頭でまたは書いて伝えることができる。

2-f. 誰にどんなプレゼントを贈るか、どんなものを誰からもらったことがあるか、感想を含めて、言ったり尋ねたりできる。

2-g. 人とのつきあいを円滑にできるような表現（ねぎらい、励まし、期待など）を、言ったり、聞いて理解したりできる。

2-h. 定型表現を使った、簡単な手紙やメールを、書いたり読んだりできる。

2-i. インターネット・電話・ファクスの操作に必要な基本用語や指示（ダウンロード、ログイン、送受信、留守電など）を、読んで理解できる。

4

4-a. 日本と相手の国における通信手段（インターネット、携帯電話など）について書かれた文章を読んで、相違点や類似点について、話しあうことができる。

4-b. 相手の国の宅配・郵便事業について書かれた文章を読んで、日本との違いについて、レポートにまとめることができる。

4-c. 人とつきあううえで大事にしていることについて、作文を書くことができる。

4-d. 日本と相手の国の贈答習慣について調べ、それぞれの特徴について、文章でまとめたり、話しあったりできる。

4-e. 場面に応じて、「タブー表現」を避けたやりとりができる。

人とのつきあい

行事

1

1-a. 行事（年中行事、祝祭日、記念日、通過儀礼など）の名称・月日を、言ったり尋ねたりできる。

1-b. 行事（年中行事、祝祭日、記念日、通過儀礼など）の名称を、見て理解したり、書いたりできる。**(中)**

1-b. 行事（年中行事、祝祭日、記念日、通過儀礼など）の名称を、読んで理解したり、書いたりできる。**(韓)**

1-c. 行事（年中行事、誕生日などの記念日、祝祭日、通過儀礼など）のなかで、自分の家で祝うもの・祝わないものを、言ったり尋ねたりできる。

1-d. 祝祭日や記念日・通過儀礼の決まり文句やお祝いのことばを、見たり聞いたりして理解できる。

1-e. 祝祭日や記念日・通過儀礼の決まり文句やお祝いのことばを、言ったり書いたりして伝えることができる。

1-f.（誕生日や記念日などの）プレゼントに何が欲しいか、口頭でまたは書いてやりとりできる。

3

3-a. 自分や家族にとって大事な行事（由来や意味、過ごし方など）について、紹介しあうことができる。

3-b. 高校生にとって大事な行事は何か、なぜ大事なのかについて、話しあうことができる。

3-c. 日本の行事（年中行事、祝祭日、記念日、通過儀礼など）の由来や意味・一般的な過ごし方について、口頭または文章で説明することができる。

3-d. 相手の国の行事（年中行事、祝祭日、記念日、通過儀礼など）の過ごし方について書かれた文章を、読んで大意を理解できる。

3-e. 個人的なイベントや記念日をどのように過ごしているか、また、過ごしたことがあるか、感想を含めて、書くことができる。

2

2-a. 行事（年中行事、祝祭日、記念日、通過儀礼、イベントなど）の際に自分や自分の家族はいつ・何をするのか、口頭で紹介できる。

2-b. お祝いや記念日に何を贈るのか、それを選ぶ理由を含めて、簡単に言うことができる。

2-c. お祝いや記念日に贈るカード・メールに、簡単なメッセージを書くことができる。

2-d. お祝いや記念日に贈られたカードやメールの簡単なメッセージを、読んで理解できる。

2-e. お祝いや記念日に何をもらったか、誰からもらったか、その感想を含めて、簡単に言うことができる。

4

4-a. 日本と相手の国の行事（年中行事、祝祭日、記念日、通過儀礼など）の特色や共通点・相違点などについて、説明したり、自分の考えを書いたりできる。

4-b. 年中行事や記念日が社会的にどのような影響を与えているのか、話しあうことができる。

4-c. 日本と相手の国の合同のイベント（交流事業など）について、口頭または文章でやりとりして、企画書にまとめることができる。

1

1-a. 自分の住んでいる町や都市と国の名称を、言ったり書いたりできる。

1-b. 自分の住んでいる町の施設（映画館、図書館、体育館、公園など）の有無や利用できる曜日と開始時間・終了時間について、口頭でやりとりできる。

1-c. 相手の国の主な都市名や世界の主な国名を、言ったり、見て理解したりできる。

1-d. 相手の国や日本を代表する人物（国家元首や歴史上の人物、いまの有名人など）の名前を、言ったり書いたりできる。

1-e. 自分の住んでいる町や都市の、有名な場所や食べ物などを、言うことができる。

3

3-a. 地域で行なわれる行事（夏祭り、バザーなど）について、自分や相手がそれにどう関わっているかなどを含めて、尋ねたり、簡単に説明したりできる。

3-b. 都市や町について書かれた文章を、読んで大意を理解できる。

3-c. 日本や相手の国の人びとの、暮らしや生活習慣について、口頭または文章で紹介しあうことができる。

3-d. 最近起きた社会的な事件や出来事について、感想を述べあうことができる。

3-e. 日本や中国の政治制度・地理・歴史・風俗習慣などについて書かれた文章を、読んで大意を理解できる。（中）

3-e. 社会制度（結婚、徴兵制度など）についての文章を、読んで理解できる。（韓）

3-f. 現代や歴史上の著名な人物についての文章を、読んで大意を理解できる。

3-g. 社会的な関心事（少子高齢化、戦争、飢餓、歴史など）について、読んだり聞いたりして大意を理解できる。

2

2-a. 自分たちの住んでいる町や都市について紹介する簡単な資料（位置、都市／農村、産物、人口などの特徴）を作ることができる。

2-b. 自分の住んでいる町や都市に対して思っていること（いいところや不便なところなど）を、話することができる。

2-c. 相手の国の首都や主な都市の地図上の位置を、言うことができる。

2-d. 日本や相手の国の有名人や建築物について名前や特徴（何をした人か、いつ建てられたかなど）を、口頭または文章で紹介できる。

2-e. 身近な社会制度（免許取得・飲酒・喫煙・結婚などができる年齢）について、会話できる。

2-f. 日本や相手の国の特徴（面積、人口など）を、口頭で説明できる。

4

4-a. 日本と相手の国における地域社会（町内会の組織や活動など）について書かれた文章を読んで、その共通点・相違点などについて、話しあうことができる。

4-b. 国際問題についてのテレビのニュースや新聞報道の内容を理解できる。

4-c. 現代社会の課題（少子高齢化や雇用など）について書かれた文章を読んで、自分の意見を含めて、口頭または文章で意見を交換できる。

4-d. 日本と相手の国の関係（文化、歴史、政治、経済など）について調べ、自分なりの意見をレポートにまとめることができる。

4-e. 国際社会で生きていくために何が必要かについて、意見交換できる。

地域社会と世界

1

1-a. 天気についてよく言う簡単な言い回し（今日は暑い、暖かい、寒い、涼しいなど）を使って、あいさつを交わすことができる。

1-b. 新聞やテレビなどを見て、天気や季節に関する基本的な情報（晴れ、曇り、雨、雪、四季など）を、聞いたり読んだりして理解できる。

3

3-a. 自然現象・自然災害に関する文章を、読んで大意を理解できる。

3-b. 最近起こった、あるいは忘れられない自然現象・自然災害（地震、津波、台風など）について、被害の規模などを尋ねたり説明したりできる。

3-c. 日本や相手の国の気候変動や環境問題に関する記事を、読んで大意を理解できる。

3-d. 環境問題に対する自分の取り組みについて、感想を含めて、口頭または文章で紹介できる。

3-e. 季節を表わす表現を使って、手紙を書くことができる。

3-f. 大規模災害のリアルタイムの報道の要点を理解し、周りに伝えることができる。

2

2-a. 季節の好き嫌いとその理由（楽しみ方、困ることなど）について、会話できる。

2-b. 日常の天気や季節の特徴（最高気温、最低気温など）について、会話できる。

2-c. テレビの映像情報（天気マークや天気図）の助けを借りて天気予報を見て、雨具の準備や衣類などの選択をするための基本情報（空模様、気温、各種注意報など）を、理解できる。

2-d. 日本や相手の国の各地の気候や地理の大まかな違いなどについて、書いたり話したりできる。

2-e. 自然災害（地震、津波など）時の定型の避難放送を、聞いて理解できる。

2-f. 自分の住んでいる地域にある景勝地（場所、名前）を、口頭で紹介できる。

2-g. 中国の季節のイベント（端午節、中秋節、重陽節など）に関する案内を、読んで概要（日時や場所、活動など）を理解できる。（中）

2-g. 韓国の季節のイベント（お花見、秋夕、紅葉狩りなど）に関する案内を、読んで概要（日時や場所、活動など）を理解できる。（韓）

2-h. 最近の天候や自然現象（地震、台風、雷雨など）について、会話できる。

4

4-a. 自然災害や環境問題に関するテレビのニュースを見たり、新聞や雑誌の記事などを読んだりして、話しあうことができる。

4-b. 自然災害や地球環境の問題を踏まえ、自分には何ができるかということ、国際協力のあり方について、議論できる。

4-c. 地域の開発と自然保護について、景勝地（富士山、ヒマラヤなど）を例にして、自分の意見を口頭で発表できる。

4-d. ふるさとや、自分が行ったことのある／行きたいと思っている地域や国の、自然環境や四季の様子について、文章で紹介できる。

ことば

1

1-a. どんな言語を学んでいるか、言ったり尋ねたりできる。

1-b. 自分の話す学習対象言語についての相手の評価を、聞いて理解できる。

1-c. どこで学習対象言語（ほかの外国語）を学んでいるか、言ったり尋ねたりできる。

1-d. 学習対象言語を学んでの簡単な感想（おもしろい／難しいなど）を、言いあうことができる。

1-e. 物の名前を学習対象言語でなんと言うか尋ねたり、日本語でなんと言うか教えることができる。

1-f. 相手の話すことがわかったかわからないかを、口頭で伝えることができる。

1-g. 相手の話すことがわからないときに、聞きかえしたり、ゆっくり言ってもらよう頼んだりできる。

1-h. わからない漢字の読み方を、尋ねることができる。（中）

1-i. 「中国語」の言い表わし方（漢語、中文、中国語、普通話など）を、見たり聞いたりして理解できる。（中）

1-j. 聞きとった音や知っている単語を、漢字やピンインでどう書くのか尋ね、書いてもらうことができる。（中）

3

3-a. 学習対象言語の学習でおもしろいことや難しいところなどを、理由を含めて、書くことができる。

3-b. 日本や相手の国でよく使われることわざや慣用句を、聞いて理解したり、その意味を説明したりできる。

3-c. 学習対象言語の特徴について簡単にまとめた文章を、読んで理解できる。

3-d. 学習対象言語の文字の成り立ちや特徴を書いた文章を、読んで理解できる。

3-e. 日本語と中国語の関係（日本語のなかにある中国語、中国語のなかにある日本語など）について、口頭で簡単に説明できる。（中）

3-e. 日本語と韓国語を比べて、類似点や相違点を、簡単な例を挙げて、文章で説明できる。（韓）

3-f. 漢字の書き方を、部首を使ったり、同じ漢字を使っていることば（「文章」の「章」など）を引用したりして、口頭で説明したり尋ねたりできる。（中）

2

2-a. 学習対象言語を学びはじめた理由を、言ったり尋ねたりできる。

2-b. 外国語の学習状況（何語を、どこで、どのくらい学んでいるか）について、口頭でまたは書いてやりとりできる。

2-c. 学習対象言語や日本語などのなかで好きなことばは何か、言ったり尋ねたりできる。

2-d. 日本語の文字の種類と使い分けについて、口頭で紹介できる。

2-e. ハングル字母の名称を使って、つづりを説明したり、尋ねたりできる。（韓）

4

4-a. 辞書に載っていないことば（新語や俗語など）についてインターネットで調べ、意味を理解できる。

4-b. 日本語の特徴を学習対象言語と比較して、口頭または文章で説明することができる。

4-c. 日本と相手の国で表現は似ているが意味が異なる、または表現は違うが意味が似ていることわざについて、口頭で説明することができる。

4-d. 日本や中国における、民族の言語や方言について調べ、その内容をレポートにまとめることができる。（中）

4-d. 日本や韓国で話されている言語（方言、外国語、若者ことば）について調べ、口頭または文章で発表できる。（韓）

4-e. 手紙やスピーチに、相手の国のことわざや慣用句を、適切に用いることができる。

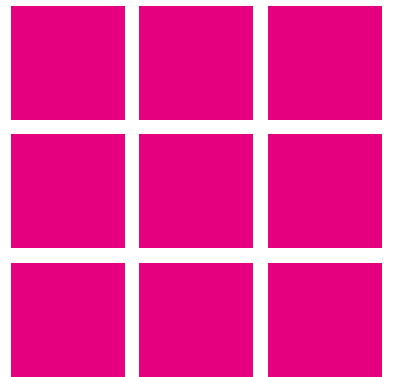
4-f. 互いのことばの教育について書かれた文章を読み、意見交換できる。

4-g. 世界で学習対象言語が話されている地域について、その歴史的背景も含め調べて、口頭または文章で発表できる。

4-h. グローバル化した社会のなかで、外国語を学ぶ意味を考え、意見交換できる。

4-i. 時代によってことばが変化していくこと（現代の若者ことば、メールに使われる話しことばと書きことばの中間語など）について、意見交換できる。

4-j. 外国語を学ぶことの意味や、日本と相手の国の若い人びとがお互いの言語を学ぶ意味について考え、話しあうことができる。



II. 「めやす」が提案する授業づくり

1. 理論から実践へ

「めやす」は、学習者中心で、内容および文脈を重視した、活動型の言語教育を志向しています。

第1部で提案したとおり、「めやす」は、中国語・韓国語教育の立場から、21世紀の日本の外国語教育のビジョン（展望）と、外国語教育関係者が果たすべきミッション（使命）、理念、目標を提言するものであり、教育行政者、教育政策立案者、教育関係者をはじめ、学習者やその保護者、そして広く国内外の社会に対して外国語教育の意義を喚起するものです。

しかし「めやす」は、そのめざすものを示すことに終始するものではありません。第2部では、これまでの外国語教育のアプローチを見なおし、第1部で示した理念や目標を実現させるための具体的なカリキュラムデザインや評価の方法、学習内容や学習活動のあり方を提案します。

新しい外国語教育のアプローチの提案

「めやす」は、外国語教師がその考え方や目標を具現化して、自分の授業案を創造する過程を支えるものであり、そのことによって、学習者が総合的コミュニケーション能力を獲得し、みずからの人間形成を図っていくことに貢献しようとするものです。そのために、本冊子と「めやす」ウェブサイトを使って、授業設計に役立つ单元案、言語材料、文化事象、評価基準、教材・リソース等々を数多く例示することにしました。

「めやす」は、外国語教育を標準化しようとするものではありません。さまざまな学習者、変化する学習者のニーズ、異なる教育条件、多様な教育環境に対応していくときの文字どおりめやすです。「めやす」は最近の言語

教育理論、第二言語習得理論、評価理論、脳の研究などの成果に基づいて作成されたものです。教師もこうした研究を援用しながら、みずからの考えや置かれた環境のなかで、「めやす」を柔軟かつ効果的に活用し、教育活動を最適化することが大切です。

言語の重要な機能

言語の機能の1つは、もちろんコミュニケーションをすることです。コミュニケーションではお互いの発話を理解しあうためのやりとり、いわゆる意味交渉を行なうことが重要ですが、それ自体が最終的目標ではありません。意味交渉の結果、人間関係を円滑にしたり、他人の心を動かしたりして、さまざまな社会活動を行なうことも、言語の重要な機能なのです。学習した語彙・文法表現を活用して、社会活動を行なう能力を身につけるためには、教室に言語を使った社会活動をもちこむことが一番効果的です。

さらに、言語の重要な機能の1つは、考えることです。私たちは言語を使って考えています。言語の能力が高まれば、考える能力も向上します。したがって、外国語の授業は考える力を伸ばす最適の環境を与えてくれます。言語は単なる道具ではないのです。語彙・文法表現を学習するのでも、記憶力だけを使って丸暗記する学習方法には限界があります。第1部の学習目標で、グローバル社会領域の「できる」力として、「高度思考」を掲げたのも、21世紀の時代が要請する思考力の育成が重要な課題だからです。

これまでの外国語教育では、語彙と文法表

現を教えることが中心にありました。近年、語彙・表現を使ってコミュニケーションを行なうことに注意が払われるようになってきたものの、コミュニケーションによる社会活動および高度思考能力の使用や発展までは意識されてきませんでした。「めやす」が最終的にめざす外国語教育の目標は、言語を使って社

会活動をする力や考える力までを意識した総合的コミュニケーション能力を身につけることです。

それでは、こうした能力を育てる学習活動はどのように展開していけばいいのでしょうか。

1.1 コミュニカティブ活動の推奨

「めやす」では、総合的コミュニケーション能力を獲得するために、「コミュニケーション活動」を行なうことを推奨しています。コミュニケーション活動とは、現実あるいはそれに近いコミュニケーションの目的を果たすために言語を使用をするもので、言語のやりとりを、形式だけでなく、文脈のなかで意味をもたせて行なう活動のことです。こうした活動を一連の流れをもってつなげることで、授業案や単元案を設計します。

「めやす」では、この一連のコミュニケーション活動を、「**学習シナリオ**」と呼んでいます。また、こうした学習活動を、「学習者中心」および「内容重視」の考え方に基いて行なうことも推奨しています。

これまでの外国語教育の中心であった語彙・文法表現を身につける学習活動は、依然として重要なものであることはいうまでもありませんが、これは「プレコミュニケーション活動」（コミュニケーション活動を行なうために必要な語彙・表現を事前に習得する活動）と呼ぶべきもので、それだけでは、コミュニケーションができるようになりません。

学習シナリオの類型

学習シナリオは、通常いくつかの連続した学習活動からなっています。1コマの授業で

終わるものもあれば、1学期、あるいは複数の学期にまたがって行なわれるものもあります。シナリオには、現実社会のコミュニケーションがそうであるように、学習活動の目標、学習環境、コミュニケーションの場面・状況、相手、理由、内容、方法、結果などが含まれています。

「めやす」のウェブサイトでは、この学習シナリオづくりをはじめ、現場の教師がカリキュラムや授業づくりに参照できるように、中国語・韓国語それぞれに分けて、話題分野別言語レベル別（35頁参照）にコミュニケーション能力指標、語彙・表現例、文化・グローバル社会事象例、単元案、評価例等を掲載しています。単元案は、①単元目標と3領域×3能力+3連繋の学習目標、②目標を達成するための学習活動、③学習活動の過程および最後に行なう評価から構成されています。②の学習活動は、学習シナリオ（コミュニケーション活動）と、それに必要な語彙・表現およびその習得方法（プレコミュニケーション活動）、取り扱う文化・グローバル社会事象、使用する教材やリソース、教室外や他教科との連繋から構成されています（90頁参照）。

▶ 簡単な学習シナリオ

数コマの授業でもできる簡単な学習シナリオの例です。

【学習シナリオ例1】

▶ タイトル：「家族をテーマにした韓国の歌を歌おう」

▶ 言語レベル：2

桃栗高校の1年生の韓国語クラスでは、家族を表わす語彙と家族を紹介する表現を学習した。家族関係の語彙や表現が歌詞に含まれる韓国の曲を、日本語あるいは簡単な韓国語の単語をキーワードにインターネットで探し、その歌詞の意味をみんなで考える。韓国の家族関係のどのような場面が表現されているかを日本語で話しあう。その曲のなかに入っている家族を紹介してみる。最後に、インターネットで曲そのものを探して、歌詞カードを韓国語で書き、みんなで歌う。

このシナリオでは、プレコミュニケーション活動として家族に関する語彙や家族を紹介する表現を身につけることが求められています。インターネット上で検索するスキルを使い、リソースを集めるほか、家族についての韓国の文化を考える機会も含まれています。歌のなかに出てくる家族を紹介するコミュニケーション活動は評価にも使うことができます。数回の授業でも、3領域「言語領域」、「文化領域」、「グローバル社会領域」全ての目標が設定されています。3連繫でいえば、インターネットを使って、教室外の情報と連繫しています。

数コマの授業でも学習シナリオを作ること、コミュニケーション能力を高める活動が簡単に取れられます。また、学習者の学習への動機づけを高めることはいうまでもありません。

ここに挙げた学習シナリオは、あくまでも教室活動の例示であり、教師は自分の置かれ

た環境、達成すべき目的、学習者のニーズなどに応じて、自由に中身を変更したり、活動を加えたり減らしたりして使用することができます。また、韓国語のシナリオを中国語に変えること、その逆、あるいは他言語への応用も可能です。

▶ セマティック・ユニット

あるテーマを選び、そのテーマの内容をもとにコミュニケーション活動、さらには現実社会との関わりを伴った活動を行なうものは「セマティック・ユニット」（主題型学習）と呼ばれます。言語学習では、学習者に関連した、意味のあるテーマ・内容で言語を学習したほうが、言語そのものの学習を目的としたときよりも、効果が現われることがわかっています。内容を重視することにより、意味交渉がより行なわれやすくなり言語学習が進みます。

「めやす」では、特に21世紀を生きるために必要な環境問題、人口問題などのテーマ・内容に着目しています。このようなテーマ・内容を授業に組み入れることにより、21世紀の地球社会をより深く考え、高度の思考能力を働かせることになります。また、テーマ・内容に関連した情報を収集、分析するなかで、情報やテクノロジーのリテラシーを発達させます。

このようなアプローチでは、現実生活で使われる言語材料が多く取り入れられ、生きた言語、生きた文化に触れる機会も増えます。例2は21世紀の社会が直面するテーマをもとにした「黄砂問題を一緒に考えよう」という学習シナリオです。

【学習シナリオ例2】

▶ タイトル：「黄砂問題を一緒に考えよう」

▶ 言語レベル：4

松竹高校の3年生の中国語クラスでは、教科書の「環境」をテーマにした単元の学習を終えた。この単元を学習中に中国における環

境対策について興味をもち、「黄砂」の問題について調査研究し、発表することになった。

まず、グループに分かれ、発生の原因、影響、対策と黄砂問題解決のための国際協力について、日中のウェブサイトや研究資料を調べたり、環境保護団体、政府の職員にアンケート調査を行なって、結果をまとめる。グループで調べた内容を交換し、黄砂問題解決のためのクラスの提言を中国語と日本語でまとめ、ウェブサイトアップロードする。中国の友好校にメールを送り、このウェブサイトに対するコメントを書いてくれるように頼む。友好校の生徒のコメントをもとに提言を見なおす。

その後、黄砂問題に関するパンフレットを日本語と中国語で作り、学園祭で配布して同級生や一般の人に黄砂が環境に及ぼす影響とその解決法を知ってもらう。

▶ 交流型学習

教室の外に出て、中国語・韓国語を話す人たちと交流するタイプの学習シナリオは、現実の文脈のなかで言語を使う環境を生みだし、学習効果を高めます。教室外の人、モノ、情報とつながることで、学習がより具体的なものになり、動機づけも高まります。学校がある地域社会に住む中国人や韓国人との交流もあれば、中国・韓国の友好校の生徒を自分の学校に招いたり、みずから友好校に出かけたり、修学旅行で中国・韓国に行ったりするなどのケースも考えられます。

このような大がかりな交流でなくとも、交流型の学習シナリオは実行できます。インターネットの急速な発達により、ブログ、スカイプ、ビデオコンフェレンスなど、無料で教室外と交流できるツールが次々に出てきました。これらのツールを使うことにより、「グローバル社会領域」の「できる」、3つの領域における「つながる」の目標を達成しやすくなるでしょう。

【学習シナリオ例3】

▶ タイトル：「家族が喜ぶお土産をテーマに語ろう」

▶ 言語レベル：2

花月高校で韓国語を学ぶ2年生の生徒たちは5日間、京畿道にある友好校を訪問することになった。2日間は友好校の生徒の家にホームステイすることになっている。

相手の家族のことを知るとともに、自分の家族のことも知ってもらうために、ホームステイ先の生徒とまずスカイプ（メールでも可）で自己紹介しあう。その際、相手の家族の趣味を聞いておく。それぞれのホームステイ先の家族の趣味にあったお土産として何を持っていくと喜ばれるか、グループに分かれて話しあう。自分の家族の意見も聞いてお土産を用意する。先生の助けを借りながら家族を紹介するブックレットを写真なども加えて作っておく。

ホームステイ先では、そのブックレットを使って、家族を紹介しながら、持っていくたお土産を渡す。自分の家族の趣味を伝え、それぞれに何をお土産に買って帰ったらいいかアドバイスを得る。

韓国旅行から帰ってきた生徒たちは、ホームステイの状況とともに、自分の家との類似点、相違点など気づいたことを発表する。家族のお土産に対する感想を含んだ礼状をホームステイ先に送る。

▶ プロジェクト型学習

より発展したものとして、「プロジェクト型言語学習」があります。このタイプは教室内に現実社会の文脈を与えて、教室外の人、モノ、情報とつながり、社会的目的を果たすことができます。プロジェクト型言語学習は教室内での言語学習と教室外の社会をつなぐ架け橋となります。このアプローチでは、学習者を実際に言語を使う環境に置き、コミュニケーションのために言語を使うことを要求します。準備のため、ペアやグループで作業

することにより協働力が身につくだけでなく、計画を立てたり、順序よく段取りを考えたり、意味交渉をしたり、自分の意見をはっきり述べたりすることで、高度の思考能力を使うことを促します。

また、グループ内で自分の仕事を責任をもって仕上げ、時間管理をして締め切りを守ることで、自律的な学習者を生みだします。情報を収集、整理し、それをどのように提示するかなどを考える機会が豊富にあり、情報のリテラシーを育む環境を提供することができます。グループワークが中心となるため、言語能力が弱い学習者は、言語能力のある学習者に助けられることもある一方で、自分の個性や強みを発揮して助ける側に回る機会もあり、クラス内に言語能力のレベル差があっても効果的な授業を行なうことを可能にします。

また、さまざまなタイプの学習者、学習スタイルに対応できます。さらに、プロジェクトの結果をいろいろな形で発表することで、プレゼンテーションの能力が開発され、メディアのリテラシーも発達します。プロジェクト型学習の学習シナリオ例は、85頁を参照してください。

学習シナリオは、そのタイプにかかわらず、学習者のニーズ、興味、能力、知識を考慮してデザインすることが望まれます。それにより学習の動機づけを高めることができます。学習シナリオは、学習者が自主的、自律的に学習していけるように、「学習者中心」に作られるべきです。学習は、他人から一方的に教授されるのではなく、自分が中心となって学習すべきことを発見し、積極的に関与して責任をもつことが肝要です。

1.2 学習者中心の考え方

学習とは、認知能力や認知ストラテジーを使って新しい情報と経験をすでにある情報や経験と結びつけて、学習者がみずから新しい知識を生みだし、新しい意味を構築していく意識的な行為です。

新しい知識や意味はそれを実際に使うことで、精巧なものになり、強化されます。「めやす」で、現実の社会、あるいはそれに近い状況・場面を設定し活動することを推奨するのはこのためです。

新しい知識や情報が、すでにある知識や情報と結びつけられなければ、それは孤立したものの寄せ集めにすぎず、現実生活での応用はできません。「めやす」が「既習内容、経験、他教科の内容との連繋」を3連繋の1つとして推奨するのも、その理由からです。

個々の学習者がもつ知識、情報、経験は異なりますから、学習の仕方や内容も異なり、新しく作られる知識もそれぞれ異なります。

また、異なる生活背景や社会条件、生得的な環境を個々の学習者はもっているわけですから、「個々の学習者の学習スタイル」と連繋することが大切なのは説明するまでもありません。個々の学習者は、自己の思考や自分のもつさまざまな特性に合っている、あるいはそれらが尊重されていると感じることにより、学習意欲をさらに高めます。

スキルを身につけるプロセス

新しい知識や情報を得て、スキルを身につけていくプロセスは、単純にそれらを吸収していくものではなく、分析や理論化、問題解決をしたのちの新たな仮説の設定など複雑な要素を伴った創造のプロセスそのものといえます。このプロセスでは、複層的な高度思考能力が求められます。「めやす」で「グローバル社会領域」の「できる」として挙げられた「高度思考能力」や「情報活用のスキル」が目

標項目になっているのも、この理由からです。外国語のクラスはこのような能力を使い、発展させるためのよい場所です。この能力を伸ばすことにより、現実社会での対応能力、生活能力を強化することができます。

学習内容は学習者が考える

学習者が自分の目標や学習内容を意識的に考え、コントロールする度合いと学習効果は密接に結びついていることがわかっています。現実の生活に直接関係あること、将来必要とされることを学習の題材として取りあげたり、学習者の不安や失敗に対するおそれなどを取り除いたりすることは、よい効果をもたらします。

常に題材を教師から与えられるのではなく、自分の関心や興味、ニーズに基づき、自分に関する題材で学習内容を決めることが許されていれば、学習の動機づけは高まります。また、難易度が適切であれば、現実の社会の状況の複雑さを反映したほうが、記憶や理解を中心とした単純な活動よりも学習効果があることもわかっています。「めやす」が「教室外の人、モノ、情報」と連繋して教室活動を行なうことを勧めるのも、このためです。

このように自己責任で積極的、自律的に学

習を進めていけば、高い学習効果を得られることがわかっています。

教師の果たす役割

学習者中心の活動を行なううえで、教師の果たす役割は、どこにポイントを置くべきでしょうか。

外国語を実際に使用し、社会活動を行なっていく能力を身につけるには、多くの努力と練習と時間を必要とします。そのため学習者は、その学習に高い動機づけをもっている必要がありますが、学習の過程でガイダンスやフィードバックを与えて動機づけを高めていくのは、教師の重要な仕事です。

教師は、個々の学習者の背景を考慮した授業を作ったり、学習者がニーズやテーマに即した短期的、長期的計画を立てるのを助けたり、学習者のレベルや準備の度合いを判断して、ガイダンスを与えたりします。また、学習の障害となるものを取り除いて、最適な学習環境を作ること、さらに学習意欲は高まることが期待できます。学習者がみずから学習戦略を選んで試すように導くことで、自律的かつ自立的な学習者が育ちます。

このような能力は教師中心の授業ではなく、学習者中心の授業によりはじめて身につくものです。

1.3 目標設定と評価の重要性

ここで強く述べておきたいのは、目標と評価の重要性です。効果的な学習とは、チャレンジングではあるけれども達成可能な高い目標があり、学習の結果が、学習過程も含め適切に評価されると学習者が確信するときに起こるものだということです。能力目標に基づいた評価、自己評価、総括的評価は、学習意

欲を高め、目標達成を確実にするものです。また、学習の過程における評価は、学習過程に対するフィードバックを与えるもので、目標達成を促進します。「めやす」は、まさにこの目標と評価を設定する際の基本となるものです。

2. カリキュラムデザイン

明確なゴールとその達成度を測る評価を考えることから
カリキュラムづくりをはじめましょう。

これまでのカリキュラムデザインでは、言語領域の「わかる」力を重視し、多くの場合最初に学習項目を考え、教科書の内容ありきで、それをどのように教えるかを考えていました。これでは、カリキュラムの終了時に学習者が何ができるようになるかはっきりしないだけでなく、「できる」、「つながる」力をもった学習者を作るのはやさしいことではありません。また、今までは教え終わったあとでテストを作り、評価をしていましたが、これでは学習者は自分が達成すべき目標がはっきりわかりません。

そこで、どんなコミュニケーションができるようになっているかという能力目標を立て、それに基づいた評価をあらかじめ作り、学習者に、カリキュラムの最後にどのようなテストを行ない、どのように評価されるかを知らせておくことによって、学習者は、何を習得すべきかがわかり、より高い目標を達成できるようになります。最終評価が「できる」、「つながる」力を測るものであれば、学習者は評価でよい成績を得ようと努力しますから、その結果として「できる」、「つながる」力がつくようになります。

このように最終的な目標を最初に決めて作成するカリキュラムデザインの方法を「**カリキュラムのバックワードデザイン**」といいます。外国語のクラスですから「言語」の領域を中心にカリキュラムを作っていく場合が多いので、これからの議論は「言語」に焦点をあてますが、「文化」や「グローバル社会」領域もバランスよく取りいれてカリキュラムデザインをすることが肝心です。

次の1から9のステップをくり返し行なうことで、3つの領域の3つの能力を獲得する学習環境を作ることができます。

ステップ1 クラスの条件を考慮し、 学習者のニーズを分析する

クラスや学習者の置かれた状況を踏まえ、どのようなニーズのもとに教えるのかよく考えます。例えば、1年の授業時間数、なぜ中国語・韓国語を学習しているのか、学習者の動機づけはどれくらいか、中国語や韓国語学習にどのような態度で臨んでいるのか、教室ではどのような活動ができるのか、教室外で中国語・韓国語を使う機会はあるのか、友好校との交流は可能かなどの条件を考慮したニーズ分析を行ないます。必要であれば、学習者のこれまでの中国語・韓国語の学習の経過や結果を調べる評価（診断評価）も行なっておきます。

ステップ2 自分のクラスの目標を決める

ニーズ分析をもとに1年間でどのような学習目標を達成するかを設定します。「めやす」の「言語」、「文化」、「グローバル社会」の3つの領域、「わかる」、「できる」、「つながる」の3つの力、さらに3つの連繫を組みあわせて、目標を設定することになります。「言語」については、「めやす」では「できる」能力を指標化し、3つのコミュニケーションモード（37頁参照）に関して4レベルの言語運用能力指標（36頁参照）を設定しています。この指標を参照して、どのレベ

ルを達成目標とするか決めます。

「言語」の運用能力レベルを設定したら、次にその能力をどのような話題分野で達成するかを考えます。「めやす」の場合には、高校の外国語のクラスで扱うといい15の話題分野（35頁参照）を提示してあります。これらの話題分野のなかから、学習者の興味、関心、ニーズをもとに1年のカリキュラムで扱うものを選びだします。

話題分野を選んだら、設定した「言語」運用能力のレベルに関連した具体的なコミュニケーション能力指標（39頁参照）を見ます。3つのモードを踏まえ、いくつかの能力指標が示されています。これはあくまでも例示です。自分の教えるクラス、生徒のニーズに合うように取捨選択したり、「めやす」が示していない能力指標を自分で作って、目標とすることもできます。

選んだ話題分野に関して、「文化」、「グローバル社会」の具体的な達成目標を立てます。その際には、「授業づくりの参考資料」の領域別評価ルーブリック例（94頁参照）がレベル設定の参考になります。これにより1年間のカリキュラムを終了したときに、3つの領域で学習者が達成すべき具体的目標ができるわけです。

ステップ3 目標達成を測る評価を作る

カリキュラムの終了段階で、これらの目標を達成したことを示す根拠になるものは何かを考えます。例えば「外国人に慣れた中国人・韓国人に、間違いはあっても学習した語彙と文法を使って、自分の家族について説明できる」という目標を立てたとします。友好校から来た先生に家族の紹介をすることが指定のレベル（間違いはあっても学習した語彙と文法を使って）でできれば、目標を達成したことになります。

カリキュラムを終えたときに、友好校の先生と学習者を直接会話させ、それを観察することで目標を達成したかどうかを評価できます。それが不可能であれば、ロールプレイで似たような状況を作り評価します。すなわち、カリキュラムの終了段階で、最初に掲げた目標を達成したかどうかの根拠になるものを考え、どのように評価するかを決めるわけです。これを「総括的評価」といいます（71頁参照）。

上述の直接交流、あるいはロールプレイを評価する際には、語彙や文法の量と使い方、発話の正確さや流暢さ、ジェスチャーの使い方、発話のストラテジーの使い方、文化に対する配慮などを評価対象としたルーブリックを使うことができます（101頁参照）。

カリキュラムの最後にどのような評価をし、どのようなルーブリックで評価するかをあらかじめ知らせておくことで、学習者は自分の達成すべき目標がはっきりとわかり、学習しやすくなり、目標も達成しやすくなります。

また、学習の過程で、各段階での目標を達成しているかどうかを適宜評価する形態や内容も考えておきます。これを「形成的評価」といいます。形成的評価は、学習者が、自分の学習進度を把握し、適切な助言やサポートをもらって学習を効果的に進めることができるようにするためのものです（71頁参照）。

ステップ4 学習項目を考える

具体的に授業で何をどのように教えるかを考えます。ステップ3の例でいえば、父、母、兄、妹など家族関係を表わす語彙、家族の名前、年齢を言うための数詞、仕事や趣味などに関する語彙、これらを紹介する

ために必要な文法表現、家族の紹介に関連する文化事象、文化背景の知識、コミュニケーションのストラテジー、相手がどれくらい日本の家族について一般的背景を知っているかを推察し、それをもとに話の流れを考える高度思考などが教えるべき項目となります。多数の項目をどのような順序でどう組みあわせて教えるかを考えます。

ステップ5 学習活動を考える

ステップ4で考えた項目を単に教えるだけでは「わかる」力しか獲得できません。「できる」、「つながる」力にも広げていくためには、教室内外でさまざまな活動が必要となりますが、どのような活動を、どのような順序で行なうか、評価はどの時点でどのように行ない、学習者にフィードバックしていくかなどを、総合的に考える必要があります。

ステップ6 教材を選択あるいは開発する

自分が立てた計画を完全に満たす教材や教科書がないことが多いので、選んだ教材や教科書を使って目標を達成するためには、クラスの状況や目標、授業計画に教科書を適応させる、いわゆる「教科書のアダプテーション（適応）」が必要になります（次頁参照）。すなわち独自の目的に合わせて教科書の内容を取捨選択したり、加えたり、変えたり、学習項目を扱う順序を入れかえたりすることです。このアダプテーションの量が一番少なくてすむ教科書を選べば、教師の作業はかなり軽減されます。

ステップ7 実際の授業を行なう

いよいよ授業案を作ります。日々の授業で

も1年の最後に学習者に達してもらいたいレベル、達成してもらいたい目標を常に念頭に置くことが大切です。カリキュラムデザインの段階で考えた形成的評価を適宜入れ、学習者にフィードバックするとともに、この評価結果を日々の授業設計、授業実践に役立てていきます。毎日の授業をする際にも、授業の終わりに達成したい目標をはっきり意識して、それを達成するように教えることが大切です。その積み重ねが最初に考えた目標達成につながります。

ステップ8 最初に設定した目標を達成したかどうか調べる

カリキュラムの終わりに、あらかじめ作っておいた総括的評価を実施し、最初に立てた目標を学習者が達成したかどうかを調べます。ステップ3のように、総括的評価はどのようなものか、何をどのような基準で評価するのか、その評価は学習者の成績をつける際にどのように使用するかを、あらかじめ学習者に知らせておきましょう。

ステップ9 カリキュラムを評価する

評価の結果や1年間の教室実践に対して教師も自己評価し、翌年のカリキュラム作成や実践に役立てます。カリキュラムの目標を調整する大きなものから、日々の授業の内容を変えたり、教材の内容を変更したりする小さなものまで、必要な変更を加えて、カリキュラムを充実させていきます。

コラム 教科書調理学

外 国語のクラスでは、自分で開発した教材を使うことも可能ですし、市販の教科書を使うこともできます。

市販の教科書を使うと自分で作る教材の量を減らしたり、負担を減らすことができるという利点があります。教科書には副教材がついている場合も多く、教師、学習者に多くのリソースを提供します。また、カリキュラムのシラバスを決め、コースに構造を与えるためにも役立ちます。

よい教科書には学習者が必要とするよいインプットやよい例が含まれており、対象言語の母語話者でない教師にとっては、授業運営の助けとなる働きもあります。長い間使われてきた教科書には、教師のフィードバックが反映されていて、使いやすいことも多いものです。

しかし、いろいろな教科書を眺めてみると、実際に使われている表現とは異なる表現例が出ている場合があります。教育のために単純化されたり、特定の文型を教えるために、その文型がくり返し出てきて不自然となっていることも多いものです。文化についても一部しか取りあげていなかったり、現実を

美化あるいは一般化しすぎる傾向もあります。理想的な学習者を対象に書かれていることが多く、目の前にいる学習者のニーズを反映していなかったり、クラスの学習環境にぴったりと当てはまらないことのほうが多いのも事実です。

このような問題点を克服して、教科書を使うためには、どうしても教科書の内容を使いやすい形に変更する「教科書のアップデートション（適応）」が必要となります。目標に適った教科書のアップデートションを行なうことにより、教科書を使う意義が高まります。

カリキュラムの作り方でも述べたように、カリキュラムを作る際には教科書から出発するべきではありません。まず自分のカリキュラムで何を達成したいかという目標をコミュニケーション能力指標をもとに立て、その目標を達成するのに一番いい内容の教科書を選ぶことになります。自分の教育理念や教育目標を完全に満たす教科書を見つけることは困難なものです。まして「めやす」のような新しい教育の考えを反映した教科書はいまのところないので、当然のことながら教科書のアップデートションが必要となります。

アップデートションの方法

方法	事例
1. 学習者のニーズ（年齢、性別、仕事、宗教、文化、学習環境、地域など）に応じて内容を変更する	大学生用の教科書の内容を高校生用に書きかえる
2. 教科書に含まれる内容が学習の目的を果たすために十分でないときは、新たな内容を加える	コミュニティとのつながりを作るための内容が含まれていないので、新たに加える
3. 教科書の内容で、目的に合わない余計な部分を省略する	必要のない文法項目の説明が含まれているので、それを使わない
4. 教科書の提示順にとらわれず、目標に合わせて使用順序を変え再編成する。	テクノロジーに関する語彙が教科書の後半に出てくるので、学習言語の入力方法を説明する際に、先に提示してしまう
5. 活動・タスクを学習者の状況に合わせて調整する	教科書では東京という文脈で練習することになっているが、自分の町という文脈に置きかえる
6. 十分な活動がない場合に活動・タスクを長くしたり、加えたりする	自己紹介の活動が少ないので、自分で関連の活動を作り、生徒に練習させる
7. 協働作業をすることで、活動の効果と効率が上がるので、個人活動をグループ活動にする	1人ですることになっている文法項目の練習をペア活動に作りかえて練習させる
8. 授業時間が足りない部分をカバーするため、宿題あるいは自主学習にする	教科書、ワークブックの文法練習を全て宿題にして自分で勉強させる

3. 「めやす」に基づいた評価

「めやす」に基づく評価では、学習者中心の評価を重視することや、さまざまな評価を組みあわせること、あらかじめ評価基準を決めることがキーポイントです。

3.1 伝統的評価から新しい評価へ

90年代に評価の分野でパラダイム・シフトが起こり、評価の目的、内容に大きな変化が見られるようになりました。具体的な能力目標を立て、それを達成するように教えようという動きです。評価もあらかじめ決められた普遍的な能力指標に基づいて行なうようになってきました。

伝統的な評価では、学習の結果を評価することに重きが置かれました。成績をつける、合格・不合格を決定する、順位をつける、学習者を分けることなどが、評価の主目的となっていました。新しい評価では、学習をサポートし、より効果的にするために、学習の終了時ではなく、その過程で評価する、また過程そのものを評価するようになってきました。すなわち教師中心の評価から、学習者中心の評価に重心が変化したといえます。

伝統的評価と新しい評価の組みあわせ

コミュニケーションの実践的能力を身につけることが外国語教育の主目的のひとつとなり、これまでの語彙や文法の知識を調べる評価から、コミュニケーションの実践的能力を調べる評価が重要となってきました。しかし、言語習得の過程では、語彙、文法表現はまず知識として脳に入り、実践的練習の結果、実践能力に変わっていきます。したがって、知識の段階では、知識が身についているかどうかを調べる評価も意味を失ったわけで

はありません。すなわち、伝統的な評価と新しい評価を効果的に組みあわせることで、学習効果を高めることができるわけです。

多角的に評価する

学習者にはいろいろなタイプがあり、その学習スタイルも千差万別です。新しい評価では、個々の学習者の能力をできる限り引き出すために、あるひとつの能力の局面を評価する場合でも、いろいろな方法を使って評価を行なうようになりました。常にひとつの形で評価を行なう伝統的評価とはこの点でも違いがあるといえます。さまざまな特徴、能力をもった学習者の潜在的な力を引き出す教育は、評価の仕方をも大きく変えたといっているでしょう。

伝統的な評価では、ペーパーテストのような画一的な方法で行なう単純な評価が多かったといえますが、新しい評価では、学習者に言語を使っていろいろなことをさせ、いくつかのステップを踏みながら、多角的に評価をすることが多くなりました。個々の学習項目を別個に評価する伝統的な評価に対し、能力全体を評価するものや、学習した内容だけでなく、その応用力、統合力も評価の対象とするようになりました。そのため、学習者は語彙や文法表現などの言語知識だけでなく、問題解決能力、文化の能力、高度な思考能力、複雑な認知能力も要求されることがあります。

信頼性重視から妥当性重視へ

伝統的評価では、採点のしやすさ、採点の客観性を重視し、○×テストや多項選択式テストが多く使われましたが、このようなテストは文脈を無視した「項目に関する知識」の理解度のみを調べるものになりがちで、目標として設定した能力の達成度を調べていないことが多くありました。これはテストの「信頼性」をより重視していたためです。

これに対し、新しい評価では、調べたい力を実際に調べる、すなわちテストの「妥当性」をより重要視することが一般的になってきました。このため、自由回答による評価や言語を使用して何かをさせる評価、個人により違う答えが出てくる設問による評価、また文脈のなかで能力が身についたかを調べる評価が多くなりました。方法としては、ロールプレイやシミュレーションに加えて、さまざまな形のデモンストレーションやプレゼンテーシ

ョン、社会活動を通しての評価など、多様な形があり、また教室にとどまらない評価の形式が使われるようにもなりました。すなわち、コンテキスト（文脈）無視の評価から、実際のコンテキスト内での実践能力を評価する方向に変化してきたといえます。

評価は学習者と教師の共同作業

伝統的評価においては、教師が学習者を評価するものが主流でしたが、新しい評価では、学習者が自分を評価する「自己評価」、学習者同士が評価しあう「学習者間評価」、グループ内で評価しあう「グループ評価」など、学習者が評価に参加するようになり、評価は学習者と教師の共同作業であるという考えが強くなりました。クラスの外の人に評価を頼む「外部評価」も一部に取り入れられています。

伝統的な評価と新しい評価

伝統的な評価	新しい評価
成績によって可否を決めたり順位をつけたりして、学習者を区別することなどが主目的	教師が学習者を効果的に支援し、学習を促進することが主目的
学習終了時に結果を評価することに重きが置かれる	学習の過程で、また学習の過程そのものを評価することに重点を置く
特定のカリキュラムの内容に基づいた評価が一般的	あらかじめ設定した能力指標に基づいて評価を行なう
語彙や文法項目などの知識をテストする評価が一般的。コンテキストを無視した評価も多い	知識の評価だけでなく、現実のコンテキストのなかで実際のタスクを行ない実践能力を評価することが多い
ペーパーテストのような画一的な方法を用いる単純な評価が多い	さまざまなタスクを課して、いくつかのステップを踏みながら行なうダイナミックな評価が多い
1つの評価方法を使うことが多い	学習者のタイプや学習スタイルに合わせて、いろいろな評価方法を使う
個々の学習項目をそれぞれ評価する	応用力、統合力などの総合的な能力も評価する
言語の能力のみを評価する	文化の能力や高度の思考能力なども評価する
テストの「信頼性」をより重視する	テストの「妥当性」をより重視する
教師が学習者1人ひとりを評価するものが主流	「自己評価」、「学習者間評価」、「グループ評価」、「外部評価」なども取り入れる
○×式テスト、多項選択式テスト、点数評価を多く用いる	実践能力評価として、ポートフォリオ、デモンストレーション、ジャーナル（学習日記）などを用いる

3.2 ルーブリックによる評価とその作り方

「めやす」では、評価基準が明確であり、学習効果を高める評価の方法としてルーブリックによる評価を推奨します。

ルーブリックの効用

能力記述文による目標を立てて教育を行なう場合、その目標を達成したかどうかを評価することとともに、評価の結果を学習者に伝えることが重要です。評価の結果を伝える方法はいろいろあります。伝統的評価では、「100点満点の82点」のように点数によって結果を伝えることが一般的でしたが、82点が目標の82%を達成したというわけではありません。また減点された18点がどのような意味をもつかもはっきりしません。これに対し**ルーブリック**（数段階に分けてレベルのめやすを記述したもの。達成度を判断する評価基準表）は、期待する目標に対してどこまで達成しているかをわかりやすく示すツールとして、能力目標を立てて、それを達成する教育が一般的になりはじめた90年代に、外国語教育でも使われるようになりました。

ルーブリックは、学習の過程と、結果を評価する際に使われる採点基準を明確に記述した評価のガイドラインであり、教師が公正かつ首尾一貫した方法で評価を行なうことを可能にします。学習者に有意義なフィードバックを提供するだけでなく、事前に学習者に渡すことにより、学習者はたえず目標を確認し、自己評価をして自分の学習を内省し学習方法を修正することで学習効果が高まることがこれまでの実践研究でわかっています。

「めやす」では以下の理由から、ルーブリックによる評価を推奨しています。

(1) 学習者に期待される目標とどのように評価されるかを示すことによって、学習効果を上げることができる、(2) 学習者が自分の

能力を評価することが可能となるので、評価に関与できる、(3) 学習者に自分の学習を内省する機会を与える、(4) 評価目標、評価基準が具体化される、(5) ひとつの評価シートで多くの学習者を評価できるので、評価に使う時間を節約できる、(6) 評価の結果をフィードバックすることで、学習者の学習内容、学習方法を改善できる、(7) 学習者は自分の強いところ、弱いところがわかりやすい、(8) 作りやすいし、使いやすい。

ルーブリックの構成要素

ルーブリックは通常、学習者のパフォーマンス（実践能力）、学習結果、学習プロセスを含む「評価要素」、「レベル」、「評価要素に関するレベル別記述」の3つから成り立っています。「レベル」は最低2つから多い場合には10あるいはそれ以上に分けられることもあります。レベルが少なすぎると、よいか悪いか、目標を達成したかしていないかの2項対立的なルーブリックとなり、学習者にフィードバックするという点では十分な情報が与えられないことになります。

一方、レベルが多くなりすぎると、レベル別の記述を書くのが複雑になり、レベルの区別をつけにくくなる場合もあるので、目的などに合わせて適切な数のレベル設定をする必要があります。その意味では3つから5つのレベル設定が適当といえます。

仮に4つのレベルを設定した場合、4つ目ではなく3つ目のレベルを「目標を達成したレベル」に設定します。これにより、4つ目が「目標以上を達成したレベル」、2つ目が「目標

達成まであともう少し」、1つ目が「目標達成までまだまだ努力が必要なレベル」とすることができ、評価もしやすいですし、学習者へのフィードバックもわかりやすくなります。

ルーブリックの種類

言語能力やパフォーマンスを要素に分けずにレベル別に評価することも可能です。このような評価は「**全体的評価**」と呼ばれます。この際にはルーブリックの「レベル別記述」は、言語能力やパフォーマンスに含まれる要素がまとめて記述されます。それに対して、要素に分け、例えば「発音」、「文法」、「語彙」、「内容のわかりやすさ」、「ビジュアルの使い方」、「観衆とのアイコンタクト」などについてそれぞれ「レベル別記述」を明示して評価するものは「**要素分解評価**」と呼ばれます(70頁参照)。このような評価は、学習者がどの要素に関して能力があるのかを示すことができます。

このとき、採点の対象となる要素は、教師が何に重点を置き教えているかに基づくべきですし、評価の対象となるタスクはより適切なものが選択されなければなりません。

適切に作られたルーブリックは評価の信頼性や妥当性を高めるとともに、教師に自分の教育の方法と内容を内省する材料を与えることにもなります。複数の教師が同一のルーブリックを使う場合には、レベルやレベル別記述の判断に関して、きちんとした合意を教師間でもっておくと、多くの学習者を同一基準で公正に評価することが可能となります。

ルーブリックの作り方と使い方

ルーブリックを作る際には、**(1)** まず採点対象となるタスク(課題作業)、プロダクト(成果物)、プロセス(過程)を決める、**(2)** 全体的評価にするか、要素分解評価にするかを決める、**(3)** レベルの数を決定する、**(4)** 要素

分解評価の場合には、どの要素を採点対象とするか決定する、**(5)** 全体評価の場合には、レベル別に1つずつの記述を書き、要素分解評価の場合には、要素ごとにレベル別の記述を書く、という手順になります。

レベルは、1, 2, 3……の数字だけで示しておくこともできますが、「目標以上を達成」、「目標を達成」、「目標まであともう少し」、「目標達成まで努力が必要」のように、達成目標に対してどのレベルにいるのかがわかるように具体的に書くと、効果的なフィードバックをすることができます。またこのレベルについての表現は、できるだけポジティブ(肯定的)にすることが学習者の動機づけを高めることにつながるので、「ダメ」、「努力が足りない」などのネガティブ(否定的)な表現は避けるようにしたいものです。

「レベル別の記述」は、それぞれのレベルの差が均一になるようにします。例えば、3レベルと2レベルの間に開きがありすぎて評価できなかったり、2レベルに値する評価の記述が非常に広い範囲をカバーするために多くの学習者が2レベルと採点され、同じレベルのなかで大きな差が出てきたりするような記述は避けるようにしましょう。

要素分解評価を使う場合に、教師自身が強調した要素に、より比重を置いて採点することもできます。このような方法は「**加重化**」と呼ばれます。学習者はどの要素が重点的に評価されるのかがわかり、学習の目標設定がしやすくなります。

ルーブリックは最初から学習者に渡しておくことが大切です。また同じルーブリックを使って、学習の過程で何度か間をおいて評価を行なうと、能力の発達状況が可視化できます。教師が採点に使ったルーブリックを学習者のポートフォリオ(75頁参照)に残しておくと、自分で学習の進度がわかり、目標達成のための戦略を立てやすくなります。

要素分解評価を4つのレベルで行なうルーブリック（提示モード／話す）

要素 \ レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標まであともう少し	1 目標達成まで努力が必要
内容 ×2★	必要な内容より多くのことを創造性を使って表現。細かい点も詳しく説明している。内容も正確。	タスクの目的に適切な内容をカバーしている。創造性を使って詳しく説明している部分もある。内容も正確。	必要な内容を大体カバーしているが、細部は示されていない。内容はほぼ正確。	最低限の内容、あるいはそれ以下しかカバーされていない。内容に間違いもある。
構成	導入部にはじまり、話の展開がはっきりと表現されていて、結論までうまく話が構成されている。	構成の各部分間の推移が自然でないことも多少あるが、起承転結に沿って記述されていて、話の流れがわかる。	話の流れには沿っているが、それぞれの部分への推移がはっきりせず、部分間の関係が弱い。	起承転結がはっきりせず、それぞれの部分の関係づけが不十分。
理解しやすさ ×3★	文法、語彙、発音に多少問題はあるが、言いたいことは完全に理解できる。	文法、語彙、発音の大きな間違いがときどきあり、理解しにくいことはあるが、タスク達成の障害にはなっていない。	文法、語彙、発音の重大な間違いのために、ときどき理解できないことがある。	文法、語彙、発音の問題が多く、理解できない部分が多い。
パフォーマンス	生き生きとしたスムーズな描写で、聞く人の興味をひく話し方である。	ときどき話がとぎれたり、速度が落ちることはあるが、相手にわかってもらおうという努力が伝わってくる。	談話がとぎれることが多く、話し方も単調で、メリハリがない。	談話がとぎれ、発話量が少ない。

★ ×2, ×3はそれぞれの評価要素が2倍、3倍に加重されて採点が行なわれることを示す。

全体的評価を3つのレベルで行なうルーブリック（提示モード／話す）

3 目標以上を達成	メッセージを大変効果的に伝えている。 語彙が豊富。 文法的間違いがない、発話が正確。 非常に興味深い内容。 自分の誤りを自分で直して、高い理解度を維持しようとしている。
2 目標を達成	メッセージは大体内容がわかる。 適切な語彙量ではあるが、ときどきつまる。 レベルにふさわしい文法能力はあるが、間違いのパターンがあり、理解度を下げている。 内容は予想できるものであるが、適切である。 ときどき自分の誤りを自分で直している。
1 目標に達せず	メッセージの内容を伝えるのに苦労していて、言いたいことがはっきりしないことがある。 語彙の間違いがあり、メッセージが理解できないことがある。 文法的間違いがパターン化。 同じ内容が何度もくり返し出てくる。 誤りに気がついていないため、自分の誤りを直すことはほとんどない。

注：学習対象言語を使っていなかったり、言語能力が限られており、設定した一番低いレベルにも達していない場合、あるいは与えられたタスクとは関係ない内容であった場合には、採点の対象とならなかったことを学習者に伝える。

3.3 総括的評価と形成的評価

学習の過程で行なう形成的評価と最後に行なう総括的評価を上手に組みあわせることが、よい学習者を作ります。

カリキュラムのバックワードデザイン（62頁参照）では、カリキュラムの目標を立てたあとに、それを達成したかどうかを判断する評価をあらかじめ作成しておき、カリキュラムの終わりにその評価を実施します。このように、カリキュラム、単元、単元のまとまりの終わりに目標を達成したかどうかを調べる評価を「総括的評価」といいます。それに対して、カリキュラム、単元などの途中に行なう評価を「形成的評価」といいます。

学習目標を反映した評価を作る

「めやす」は、コミュニケーションの実践能力の習得を大きな目標としていますから、ペーパーテストだけでは測れない部分を含めた「総括的評価」をデザインすることが大切です。

例えば「家族」についての単元で、学習者が自分の家族の構成、特徴などについて、よく耳にしたり目にしたりするごく基本的な語句や文を使って話したり、書いたりできるようになることが目標であるとします。この場合の「総括的評価」は、写真を見せながら、自分の家族構成について学習対象言語（中国語や韓国語）を使って口頭でプレゼンテーションをすることや家族構成を示すポスターを作る活動となり、それぞれ、ループリック（68頁参照）を使って行ないます。

バックワードデザインではこのような評価を、単元を教える前に作っておきます。単元のはじめに、学習者にどのような「総括的評価」を行なうかを説明し、さらに、評価に使うループリックを渡しておくことも大切です。

す。これにより、学習者は何を評価されるか、何を達成するように学習を行なったらいかが、単元が始まる前にわかり、学習しやすくなるだけでなく、目標がはっきりするため学習効果が上がり、学習の動機づけも高めることができます。すなわち「評価は学習者を作る」わけです。

必ずフィードバックする

この「家族」の単元では、以前に学習した家族に関する語彙、家族の人数を示す数量詞などの復習をしたり、家族の趣味や仕事を述べる新しい語彙や、家族が得意なことを紹介する文法表現を新出項目として学習したりするとしましょう。このとき学習者の記憶や学習を助けるために語彙や文法表現の小テストなどを定期的に行なうことが「形成的評価」にあたります。このような評価は、○×式や多項選択式のテストなど、時間を使わずに知識の定着を調べるもので十分です。テストがなければ勉強をしない学習者には、このような小さなテストは学習の動機づけを高めることになります。また○×式や多項選択式テストの場合には結果がすぐにわかり、自分の強いところ、弱いところが一目でわかる利点もあります。このようなテストはやりっぱなしにしないで、結果が悪い場合にはどのように弱いところを補うかフィードバックすることが必要ですし、クラス全体ができない場合には教師がテストの結果をもとに、さらに練習を加えるなど、授業内容、方向性を変える対処も重要です。

このような「形成的評価」の結果は学習者

の成績をつけるときの材料のひとつにしてもよいし、フィードバックするためだけに使い、成績には反映させなくてもよいでしょう。成績づけの対象になると、緊張して能力を出しきれない学習者もいるので、評価の目的に応じて柔軟に対応するようにします。

総括的評価と形成的評価の相乗効果をねらう

語彙や文法表現の練習を通して、家族について話したり、説明したりする能力を徐々に身につけていくわけですが、「総括的評価」で実施する活動を最終目標として、いまどのレベルにあるかを定期的に自己評価させるのも「形成的評価」のひとつであり、学習効果を上げることにつながります。その際には、単元の最初に渡してある「総括的評価」のルーブ

リックを使い、身についた能力を意識化させるとよいでしょう（次頁「3.4 自己評価」参照）。自己評価を教師の評価と比べ、自分の能力を正しく認識させることも学習に役立ちます。

また、グループごとにプレゼンテーションの練習をする際などに、メンバー同士で評価しあい、フィードバックしあったり、ペアの会話練習でお互いを評価するのも、よい「形成的評価」となります。

客観的に評価できるようにルーブリックを上手に作り、評価の仕方をしっかりと教えておくと、学習者の評価は教師の評価に非常に近くなるという研究結果も出ています。学習者が自己の言語能力を正しく判断し、それを学習に役立てることは、非常に有益なことです。

総括的評価と形成的評価

	形成的評価	総括的評価
実施時期	カリキュラムや単元の途中	カリキュラムや単元の最後
特徴	教師、学習者が進行中の学習、学習環境を改善するためのデータを集めることが目的。学習促進に役立つように、学習者にフィードバックするために使われることが多い。教師が授業内容や方向性の調整に使うこともできる。成績に反映させなくてもよい。	学習目標を達成したかどうかを評価することが目的。あらかじめ決めた能力目標をもとに行なわれる。成績をつけるのに使われることが多い。
形態	クイズ、小テスト、ジャーナル（学習日記）、内省レポートなど	ペーパーテスト、パフォーマンス・テストなど

3.4 自己評価

正しい自己評価は、自律的な学習者を作ります。

教師中心の教育では、評価というと、教師が内容、基準を決めて実施し、採点するというのが通例でした。テストの結果も、成績をつけるのに使われたり、教育活動の方向性を決めたりと、教師が自分の目的のために使うことが多かったといえます。しかし、学習者中心の教育が浸透するにつれ、学習者に評価させる自己評価が多く使われるようになってきました。

自己評価のさまざまなメリット

学習者に自分の学習進度、学習結果を自己評価させることは、自分の学習に責任をもたせることになり、自立性を高めることになります。また、自己評価を通して、客観的に内省し、どのように学習効果を上げるか、どのように学習の仕方を変えるかなどを考え、学習を自分でコントロールすることで、自律性を高めることになります。これは「めやす」のめざす資質の育成につながります。

学習の過程で、自分の脳のなかでどのようなことが起こっているかを内省できる学習者は、自己評価によって学習が進むといわれています。自己評価は、学習者に、何をどのように学習したか、これまで学習したことと新しく学習したことがどのように関連しているか、これからどのように学習したらよい結果が得られるか内省する機会を与えます。内省の積み重ねにより、内省能力の高い学習者を作ることにもなります。

自己評価を利用することにより、学習者は、自分の学習活動を補正し、学習時間を増やしたりして、行動を変化させていきます。どのように学習したらよいかを考えることで、教師に質問するようになる学習者も現れてきます。教師の側としては、学習者が自己の学習プロセス、学習結果をどのように見ているか、どのようなプロセスを経て学習を行っているかを見る機会ができ、両方で学習についてより有意義で、生産的なコミュニケ

自己評価のメリット



ーションをすることが可能になります。

自己評価を通して、学習者は、授業の目標を意識化することができ、何をすべきかがはっきりわかります。自己評価の結果を時系列に並べてみるにより、自分の能力の発達具合を見ることができ、自分が最終目標に対して、現在どこにいて、目標到達までにどれくらいの時間、どれくらいの練習が必要かをはっきりと見極めることもできます。自己評価の結果はポートフォリオ(75頁参照)に入れて、定期的に眺め、進度を内省することができ、学習の記録として残すことができます。

自己評価の方法

自己評価を学習にポジティブな影響を与えるものとするには、どのように評価を行なうかをトレーニングしておく必要があります。例えば、いくつかの学習サンプルを示し、それがループリックでどのように評価されるかをあらかじめ教師が示したり、学習者が自己評価したサンプルに教師がコメントを加えたりします。学習者が正しく評価できるようになれば、教師が1人で全員の学習者を評価し、フィードバックするより時間を大きく節約することになります。

自己評価にはいろいろな方法があります。単純なものは、ある事柄が知識としてあるいは能力として身についたかをチェックリストで評価させることです。学習項目をリストにした1枚のカードを学習者にもたせ、それぞれの項目を習得したと自覚したときに、チェックマークをつけ、その日の日付を入れるようにさせると、学習の目標をはっきりさせるだけでなく、内省能力を高め、また学習への動機づけを高めます。

教師が作成したループリックを学習者にもたせ、定期的にその基準で自己評価させて、結果を記録させるのもよい方法です。評価結果をグラフで表わすことも、成長を視覚的に

把握できる利点があります。また、教師と学習者が同じループリックで別個に評価し、それを比較できるように記録するのもいい方法です。

4点、あるいは5点の点数評価で自己を評価させたり、アンケート調査用紙形式の質問にイエス、ノーで答えていく方法もあります(103頁「自己評価例」参照)。

学習日記(ジャーナル)をつけることも自己評価でよく使われる方法です。これも学習者の内省能力を高めるのに役立ちますが、この日記を教師が見ることにより、学習者の学習スタイル、学習の困難点を知ることもできます。日記を通して、学習者と教師が対話を行なうこともできます。

学習者は自分の学習状況を思い浮かべながら自己評価することが多いのですが、自分がロールプレイしているところなどを録音、録画し、それを聞いたり、見たりしながら自己評価させると、客観的な評価が行なえます。また、録画でボディランゲージ、ジェスチャーなどを正しく評価できるようになることで、言語使用をより具体的に観察することが可能になります。

内省を促すとともに、自分の能力発達を可視化する方法として、プレテストとポストテストもよく使われます(107頁参照)。プレテストは、ある項目を教える前に、学習者にこれまで学習したこと、すでに知っていることを内省させるものです。そして、その項目について学習した後にポストテストを実施し、自分の能力を内省させ、学習前の自分の能力と比較させることができます。

自己評価が適切にできるようになると、学習者に評価基準を作らせたり、評価シートを作らせたりすることもできます。学習者自身が学習評価に深く関わるほど、より自立的な学習者が作られることがわかっています。

3.5 ポートフォリオによる評価

ポートフォリオ評価を導入すると、学習者の成長の過程が評価でき、学習者が自分の学習に責任をもつようになります。

ポートフォリオとは、学習目標にのっとり学習の記録を計画的、長期的に集めたもので、学習目標達成の過程、結果を評価するためのものです。学習目標をもとにあらかじめ設定された基準により、ポートフォリオに含まれる個々の学習記録および、その記録全体が評価の対象となります。教師の指示とサポートのもと、学習者が責任をもってポートフォリオを作成、管理します。ポートフォリオにはそれを見て、評価するものの存在が不可欠です。ポートフォリオを学習者自身が評価する場合は自己評価となります。教師がクラスの成績の一部としてポートフォリオを見る場合もありますし、クラスメート、親などが評価する可能性もあります。

ポートフォリオによる評価の信頼性、妥当性についてはいろいろな議論がありますが、長期間にわたる学習者の能力発達の経過を見たり、クラス学習の成果を多角的な面から見たり、個々の学習者の特性を知りたいときにはよい評価です。学習者に責任をもってポートフォリオを作らせると、自己の学習に責任をもった自律的な学習者を作るのに役立ちます。

目的にあったポートフォリオのデザイン

ポートフォリオにはいろいろなモデルがありますが、きちんと目的を作り、評価に利用しないと、学習者の記録を単にためこむだけになり、時間がかかり場所をとるだけになりかねません。効果的にポートフォリオをデザインし、評価を実施するためには、デザインの段階で、まず評価の目的を決める必要があ

ります。そしてその目的に沿った学習目標を設定あるいは選択し、その目標が評価できる学習のタスク、あるいはその結果の成果物を決めて、評価する評価基準を作ります。

ポートフォリオの中身を決める

次に、学習成果物をどのように集め、ポートフォリオを構成していくかを決めます。集めていく期間が長ければ長いほど、当然のことながら、学習の過程を長く観察、評価できることになります。何をポートフォリオのなかに入れるか、誰が入れるものを選ぶかなども設定しておきます。時間をかけて計画をしっかり立てておくと、管理する際に楽になります。例えば、学習者に好きな成果物を何でも入れるように言うと、收拾がつかなくなる可能性があります。あるタスクに関して、あるいは、ある期間に自分の成果を一番表わしているものを2つだけポートフォリオに入れ、自己評価しておくように言うと、管理がうまくいきます。ポートフォリオを作り始める前に、学習者にポートフォリオ評価の目的、作成プロセス、評価方法、評価基準をあらかじめ知らせておくことが重要です。

ポートフォリオには、例えば、学習のプロセスで行なわれたロールプレイの録画・録音、日記や作文、ジャーナル、小テスト、学習の最後に実施したパフォーマンス・テストやペーパーテストの結果や自己の目標、教師のコメント、感想文、友好校からの手紙などが入れられます。

ポートフォリオを作る際には、教室のなかにファイルキャビネットを置き、1人ひとり

の学習者にフォルダーを用意してポートフォリオとすることもできますし、成果物を全てデジタル化し、オンライン上にアップロードする方法も使われます。オンライン上に作っておくと、許可されたものがどこでも見られる便宜性があるほか、場所をとりません。学生に常にもたせて管理させることもできますが、紛失する可能性があります。

ポートフォリオ評価

実際にポートフォリオ評価を実施する際には、決められたものを学習者が入れ忘れないようにリストを作り、入れたものにチェック

マークをつけさせたりするとよいでしょう。成果物だけでなく、自己評価を行なったルーブリックに評価日を書いて入れておくと、能力の発達具合が見られます。ポートフォリオの作成状況、管理状況も適宜、ルーブリックなどを使って評価すると、学生も管理しやすいでしょう。

最終的にポートフォリオが完成したら、あらかじめ作っておいたルーブリックに従って、ポートフォリオそのものを評価します。あらかじめ評価者が決まっている場合には、その評価者に評価してもらいます。

ポートフォリオ自体の評価ルーブリック

要素	レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標まであともう少し	1 目標達成まで努力が必要
ポートフォリオに入れるものの選択とその説明		ポートフォリオに入れたものの全てがポートフォリオの目的に合致し、その説明も非常に明確である。	ポートフォリオに入れたものの大多数がポートフォリオの目的に合致している。説明も明確で、内容が理解しやすい。	ポートフォリオに入れたものの半分以上がポートフォリオの目的に合致しているが、よくわからないものもまだある。説明もまだ不完全なものが多い。	ポートフォリオに入れたものの多くが目的に合致していない。説明も不完全でよくわからないものが多い。
内省		全ての内省レポートで、自分の成長具合を目標に照らしあわせて明確に内省している。	大多数の内省レポートで自分の成長具合をよく内省している。	半分以上の内省レポートで自分の成長具合を目標に照らしあわせて内省している。	自分の成長具合の内省に欠ける。
内容物の質		ポートフォリオに入れたものの全てが学習成果、学習プロセスを明確に示している。	ポートフォリオに入れたものの大多数が学習成果、学習プロセスを明確に示している。	ポートフォリオに入れたものの半分以上が学習成果、学習プロセスを明確に示している。	ポートフォリオに入れたものが学習成果、学習プロセスを示すのに十分ではない。
内容物の構成の仕方		内容物が非常にわかりやすく構成されており、必要なものを簡単に探しだせる。	内容物がうまく構成されており、必要なものを探することができる。	内容物の構成が不完全な部分もあり、必要なものを探すのに時間がかかることがある。	内容物の構成が不完全で、必要なものがどこにあるかなかなかわからない。

4. 「めやす」を授業活動に取り入れる

「めやす」の考えを全面的に授業設計に反映させていくことはやさしいことではありません。まずはできるところからはじめましょう。

ステップの第一歩は、1年の授業が終わったら、それぞれのコミュニケーション・モードについて、言語運用能力指標のどのレベルを達成するように教えたかをきちんと認識することです。

初級のクラスであれば、言語運用能力指標のレベル1、あるいはその途中までの達成が目標となるでしょう。そのレベルを達成するためには教え方や教える内容をどのようにする必要がありますかを考えます。クラスのなかにコミュニケーション活動や社会活動をもちこむためには、最初の授業からそのことを意識した授業を行なう必要があります。

また、学習者が実際にコミュニケーションを行なって社会活動ができるようになるためには、その前段階となる音声・文字指導などのプレコミュニケーションな段階から「めやす」の考え方を取り入れていくことが重要です。「わかる」活動であっても「できる」、「つながる」の活動を視野に入れて行なう必要があるからです。

学習者が最初の授業から、これからの教室活動の目標を理解し、効果がある学習方法とはどのようなものかを自然に体得することも大切です。

4.1 音声・文字の教え方を見なおしてみよう

伝統的な外国語教育では、言語を使っの基本的なコミュニケーションの練習に入る前に、文字や音声の基本を習得する必要があると考えていることが多いのではないのでしょうか。

特に個々の音声が正確に身につく前に会話の練習をすると、流暢さは身につくが、悪い発音を最後まで直せないと考える教師がいます。事実、発音が悪いと意味も正確に伝わらない場面は多々起こります。

音声と文字の間に規則的な関係がある正書法をもつ言語の場合には、音声を正確に身につけるとともに、文字も完全に書けるようになることを期待する教師もいます。確かに、文字、特に音声は言語学習の基本の基本であり、発音だけでなく、聞きとれなければコミュニケ

ーションはできないので、初歩レベルでの教育は重要です。

形式と意味を結びつける

単に単音を文脈なしにくり返したり、文脈なしに同じ文字を何度も何度も書いているのでは、学習者はつまらないだけで、学習に対する動機づけを失ってしまうでしょう。せっかく学習対象言語を使って母語話者と話したい、つながりたいという意欲をもって学習しはじめたのに、無味乾燥な文字・音声の授業が続いてばかりでは、意欲が低下し、外国語学習に否定的な態度を作りあげるだけです。学習初期にこのようなカリキュラムにするのは避けたいものです。

言語学習の基本とは、形式（音声・文字）と

意味の結びつきを学ぶことです。それなのに意味に対する注意がない音声・文字の教育は、効果がないどころか意義のないことです。

この基本に立ち返ると、音声・文字を教えるときには、学習者にとって必要かつ身近な語句や短い表現を使い、その語句や表現の意味と一緒に音声・文字を教えるようにするのがよいでしょう。

語句や表現を1つの単位で発音

音声を教える場合、語句や表現を聞いて、まず意味を理解し、どのような文脈でその音の列が使われるかを理解し、そのうえで、その語句、表現を発音させるようにします。その語句、表現を1つの単位として発音させ、個々の音声にあまり注意を向けさせないようにしたほうがよいでしょう。いろいろな母語話者の認知の実験を見てみると、非母語話者の個々の音声の正確さよりも、アクセントやイントネーションなどのプロソディー（韻律）の正確さのほうが、意味の理解により大きな影響を与えていることがわかっています。

アクセントやイントネーションは、音声を1つひとつ教えるだけで覚えられるものではなく、文脈のなかで語句、表現を聞いて、使ってはじめて習得され、それを担う音声と一緒にしか学べないものです。初級の学習者には、名前、地名、あいさつ、日常の決まり文句など身近ですぐに使える語句、表現を使って、音声とプロソディーを一緒に学習することに慣れさせるのがよいでしょう。

個々の音は、独立して発音される場合と異なり、語句や表現のなかで発音される場合、前後に来る音により、微妙に変わるのが普通です（音韻的には同じと解釈されます）。このような変化も個々の音を練習するだけでは身につけません。文脈のなかで語句、表現を聞き、くり返し発話することによって身につくよう

になります。

音を概念化する

ある語句を教師が言い、学習者にまねをさせて言わせた場合、学習者は聞こえた音の列、プロソディーを聞こえたように単純にまねしているわけではなく、聞こえた音声を一度脳のなかで分析し、どのように発音したら正しい音声、プロソディーで再生できるかを概念化しています。正しく発音するためにはこの概念化が適切に行なわれる必要があります。この概念化は、母語の音声との違いを教えたり、個々の音の調音法を教えるだけではできません。聞きとれなければ発音ができないというのは、この概念化が適切に起こっていないからです。

この概念化を助ける方法のひとつは、クリティカル・リスニングといわれる母語話者の発音と自分の発音を聞き比べて、違いを聞き分け、その差をなくそうとする活動です。このような練習は、MP3プレーヤーや携帯電話などを使って、教室外でもできます。

大量にインプットする

音声学習の能力は個々の学生によってかなり差があります。外国語の音声をすぐに身につけ正しく発音する学習者もいれば、時間がかかる人もいます。また文字や文字情報によらなくても、耳だけで正しく発音できるようになる人もいれば、音声と関連した文字、文字列をアンカーにしなければ、音声と意味を関係づけられない人もいます。このような学習者のためには、音声を教えるために使う語句、表現を表わす文字列を一緒に見ながら教えることにより、学習スタイルに対応できます。また、これは文字を文脈のなかで教えるのに役立ちます。

音声にしても文字にしても、発音したり書く前に、大量に聞いたり読んだりすることに

より学習が進みます。この点を考えてカリキュラムを作成することが重要です。学習者によっては、同じ語句を何度も自分で発音してみないと、また同じ文字を何度も書いてみないと覚えられないという学習スタイルをもっている人もいますので、こういう人には教室外での練習を宿題として与え、対応することも重要です。

慣れるまでの工夫

学習者や教師の特性によっては、上述のよ

うな文脈のなかで徐々に音声、文字を導入していくアプローチには抵抗があるかもしれません。だからといって、文脈から離れての古典的な学習、教育は非効率的です。このような場合、まずその言語の音声や文字の体系を表などにして簡単に説明しておき、文脈のなかで異なる音声や文字が導入されるごとに、その音声、文字が体系表のどこにあるかチェックマークをつけて、全体像のなかで個々の音声と文字を把握できるようにすると、不安感を少なくすることができます。

4.2 語彙・文法表現の教え方を変えよう

教科書中心の語彙・文法表現の「わかる」レベルの授業をしていて、教科書に頼る方法を急には変えられない教師は、語彙・文法表現の「わかる」活動に徐々に「できる」、そして、できれば「つながる」活動を加えていくようにしましょう。「めやす」では、語彙・文

法表現の活動をプレコミュニケーションからコミュニケーションにつなげていくために、語彙・文法表現の**5+5(ファイブ・プラス・ファイブ) アプローチ**を勧めています。

次頁で具体的な例を紹介しましょう。

語彙、文法表現を習得するための5 + 5

【活動例1：導入】

イラストを見せながら、趣味に関連する新出語彙を導入する。音声と文字の両方を使って語彙を提示する。

【活動例2：趣味当て遊び】

教師が問題を読みあげ、生徒はa～dの記号で答える。
1. 山田さんは走るのが好きです。趣味は何だと思えますか。
2. 金井さんはコンサートによく行きます。趣味は何だと思えますか。
a. 絵画 b. グルメ c. ジョギング d. 音楽鑑賞

【活動例3：仲間はすれ探し】

教師は「仲間はすれのことばはどれですか。なぜですか」と聞き、生徒に言わせるかカードを取らせる。
1. サッカー、野球、バレーボール、ジョギング、バスケットボール
2. 書道、茶道、華道、柔道、香道
▶ 生徒に、自分に関係する語彙をもう1つ足すようにさせると、より高度な思考力が身につく。

【活動例4：趣味のクラスの紹介】

あなたは町のカルチャー・スポーツセンターのアドバイザーです。次の人たちがアドバイスを求めています。どのようなクラスを勧めますか。自由にアドバイスしてください。
例：手が器用です。→クラフトのクラスはどうですか。
1. 音楽が大好きです。
2. 字が上手になりたいです。
3. たくさんの人と友だちになりたいです。

語彙の習得活動をつくる

STEP
1

導入

- ▶ 語彙も文法もコンテキスト（文脈・意味）のなかで教えることが大切である。絵、写真、レアリア、ジェスチャーなどを使ってコンテキストを作ることが教師の仕事の1つである。

→ 【活動例1】



STEP
2

インプット活動

- ▶ 耳や目からのインプットをたくさん与える。言わせたり書かせたりしてアウトプットさせる必要はない。→ 【活動例2】



STEP
3

ことばで遊ぶ活動

- ▶ ことばを言わせたり、フラッシュカードから選ばせたりするなどさまざまな活動を考える。答えは1つではなく、与えられたことばを学習者自身が分析し、どれがほかのものと違うかを考えるような活動にする。そうすることで、形式と意味の関係に対する理解がより深まり、語彙の学習が進み、高度の思考能力も養成することができる。→ 【活動例3】



STEP
4

アウトプット活動

- ▶ 形式と意味の関係に対する学習者の理解が深まってからはじめてアウトプットさせる。できるだけ現実に近いコミュニケーションの状況を作り、コミュニケーションすること自体に目的をもたせて練習させる。例えば、ペア活動として、学習者同士が自分の知識・経験をもとにやりとりし、自由に会話する形で練習させる。答えは1つではない練習をすることが重要である。→ 【活動例4】



STEP
5

文法導入活動

(=文法表現の習得活動のSTEP 1と位置づけることもできる)

文法表現の習得活動をつくる

STEP 1

導入 (=語彙の習得活動のSTEP 5と位置づけることもできる)

- ▶ 導入した語彙に関連するトピックをコンテキストにして文法を導入する。現実の場面に近いコンテキストを作り、文法形式がどのような意味をもっているか、どのような言語機能を果たすかを学習者に理解させるようにする。➡【活動例5】



STEP 2

インプット活動

- ▶ まずインプットをたくさん与え、形式（表現や品詞など）と意味の関係を理解させ、その関係に対する理解を強化し、形式を聞いたりしたときに無意識のうちに意味が思いつくように練習させる。教師は新しい文法表現を使うが、学習者はそれを聞いているだけ、あるいは見ているだけでよい。

➡【活動例6】



STEP 3

アウトプット活動① (コンテキスト内でのメカニカル活動)

- ▶ 単に形式（表現や品詞など）を置きかえるのではなく、活動例7のように〈 〉内のコンテキストを考えながら、形式を変えるような活動が必要。意味に対する注意がなければ、効果的な言語習得は起こらない。どんなに単純な練習でも、意味を考えるようにすることが重要である。➡【活動例7】



STEP 4

アウトプット活動② (ミーニングフル活動)

- ▶ STEP 3では、提示された表現から適切なものを選んで活用させる活動だが、次の段階であるSTEP 4では、学習者に自分の知識や経験をもとに考えさせる活動にする。自然な発話として、学習者のレベルに応じて、アウトプットを調節する。

➡【活動例8】



STEP 5

アウトプット活動③ (コミュニケーション活動)

- ▶ 使う文法表現は限られていても、現実にもありそうな状況で練習する。この場合、教師に言われたことや教科書に書いてあることをくり返すのではなく、学習者はそれぞれ自分のニーズや能力を考慮して、創造的な自己表現をすることになる。これは、現実のコミュニケーションに近いものである。➡【活動例9】

【活動例5：趣味を聞く】

導入した語彙のトピックである趣味について、会話でコンテキストを作り、形式（動詞の可能形）＝意味（何ができることを表わす「れる」「られる」）を導入。

山田：田中さんの趣味は何ですか。

田中：趣味ですか。そうですね。水泳かな。

山田：水泳ですか。どれくらい泳げますか。

田中：10キロくらい泳げますね。

1. カラオケ、上手に歌う、プロ並みに歌う

2. 料理、どんなものを作る、何でも作る

【活動例6：できる人探し】

教師は1～3について「誰のことですか」と聞き、生徒はa～cの記号で答える。生徒は可能形を聞いているだけ、あるいは見ているだけ。

1. ピザを一度に10枚食べられます。

2. ヒットをたくさん打てます。

3. 韓国語が話せます。

a. イチロー b. 草薙剛 c. ギャル曽根

【活動例7：何ができますか】

【 】から選んで、適当な形に変えなさい。

例：〈車の修理が好きな本田さん〉

壊れた車を_____（なおす→なおせます）

1. 〈水泳が得意な田中さん〉3000メートル_____

2. 〈イタリア料理が得意な森山さん〉パスタをいろいろ_____

3. 〈お菓子作りが好きな太田さん〉ケーキを上手に_____

【歌う、作る、話す、泳ぐ、食べる】

【活動例8：何ができる？】

次のような場所ではどんなことができますか、できることを言ってください。

例：マクドナルド→ハンバーガーが食べられる、コーヒーが飲める

1. ディズニーランド（see Mickey Mouse, ……）

2. 図書館（read books, ……）

3. 秋葉原（go to AKB48's concerts, ……）

▶ ここでは、生徒が自分の知識、経験をもとにその場所のできることを考える必要がある。自然な発話として、「～たり、～たりできます」「水曜日は～できます」など、生徒のレベルに応じてアウトプットを調節することができる。

【活動例9：求む、手伝い人】

ペアを作ってください。1人は仕事をもった家庭の主婦です。来週ニューヨークに出張に行くことになったので、家のことを手伝ってくれる人を雇うことにしました。面接に来た人にどのようなことができるか、いろいろ質問してください（1～4）。相手の答えを聞いて、この人を雇うかどうか決めなさい。

もう1人は今仕事を探しています。ウェブサイトの求人案内を見て、面接に来ました。相手の1～4の質問に正直に答えてください。

1. 料理する。

2. 犬のめんどうをみる。

3. 子どもの遊び相手になる。

4. 〈あなたが考えた質問〉

4.3 クラス活動を大きなテーマに結びつけよう

文字・音声や語彙・文法表現の教え方を工夫し、1つの単元で教える内容を豊富にすることにより、1つの単元が終わった時点で、さらに現実に近いコンテキストのコミュニケーション活動を入れることが可能になります。

まず1つの単元、あるいはいくつかの単元のまとまり（クラスター）が終わった時点で単元に関連する大きなテーマを選び、それに基づいた授業を構成します。

「セマティック・ユニット」を取り入れた活動

「セマティック・ユニット（thematic unit）」とは、その名のとおり、「テーマ（theme）」に基づいてカリキュラムを構成するものです。語彙・文法表現の基本的な学習内容と、環境、コミュニティ、エネルギー問題、人口問題など社会的なテーマを結びつけます。最初は大きなテーマと結びつけるのが難しいかもしれませんが、まず、家族、学校などの身近なトピックからはじめ、徐々に社会的なテーマを扱うようにするといいでしょう。

教科書はトピック別に単元が作られていることが多いので、例えば、「家族」に関する単元が終わったら、「日本と中国の家族問題を比較する」というような「セマティック・ユニット」を試みるといいでしょう。情報、自分の経験、自分の考えを総合して知識を再構築しようとするときに学習が効果的に進むという考えが、「セマティック・ユニット」の土台となっています。

これまでの外国語学習は断片的な知識を順番に吸収していく語彙・文法表現を中心にしたものでした。これでは組織的な知識、能力は身につけません。「セマティック・ユニット」を使うと、いろいろな知識、情報を文脈

のなかで目的をもって結びつけ、さらにその知識、情報を現実の世界と結びつけて発展させていくことができます。このような学習方法は学習者の学習に対する動機づけを高め、より積極的に外国語を学ぼうという態度を生みだします。

文脈のなかで外国語を学ぶ

また外国語学習を学校のカリキュラムのなかで孤立したものとして扱うのではなく、ほかの科目の学習内容と連繫させることで、より有意義かつ有用なものにします。「セマティック・ユニット」は、学習者の自立性を高める活動、協働作業、高度の思考能力を使った作業、テクノロジーを使った作業を自然に組みこむことができます。すなわち、「めやす」の目標の多くを達成する活動をふんだんに取り入れ、意味のある文脈のなかで外国語学習を促進することが可能になるわけです。

ペアワークやグループワークを多用し、学習機会を増やすことも必要です。自己評価を含む形成的評価も適宜行ない、学習者に学習状況をフィードバックし、目標達成に向かって適切に学習しているかを示します。また生教材なども使い、生の言語、生の文化を学習させます。

「セマティック・ユニット」は、学習者に関係があって、重要な考えを積極的に探求させ、チャレンジングな内容のものがいいでしょう。これまでに学習したこと、すでにある知識や情報（例えば、「セマティック・ユニット」をする前に学習した単元で出てきた語彙・文法表現など）を大いに活用できるようなデザインをします。そして既習知識などを利用しながら、新しい情報、知識をいろいろなメディアを通して吸収できるようにします。必要な情

報、知識は意識的に与えることも大切です。

探求するテーマの決め方

「セマティック・ユニット」を作る際には、まず学習者の興味、関心、経験、学習レベルをもとに大きな「テーマ」を選択します。ここでは「家族とコミュニティー」がトピックである教科書の課を終えたあとに、「セマティック・ユニット」を行なうとします。まず探求する焦点を具体的に定め、それに関する質問を考えます。例えば「中国の少子化政策は中国の子どもたちにどのような影響を与えていますか」、「韓国の少子化の現状は韓国の将来にどのような影響を与えますか」という質問です。この質問は、「セマティック・ユニット」を通しての学習活動と評価のガイドとなります。プロジェクトワーク、作文、ディスカッションや研究活動のトピックともなり、この現実の問題に、学習者は独自の考え、感情を表現する場を得ます。

また、社会、家庭科、地理歴史科などほかの教科とも結びつけることができますし、自国の文化と学習対象文化との比較、分析にも使えます。このためには、できるだけ生教材を使ったり、母語話者と交流させ、教室外の人、モノ、情報と連繫できるようにしましょう。

この「セマティック・ユニット」では、グループワークの途中で何度か形成的評価を行なうほか、最後のプレゼンテーションを総括的評価します。個々の学習者が自分の調査した結果をそれぞれレポートにまとめ、それも総括的評価の対象とします。学習者は、この「セマティック・ユニット」で達成すべき目標と、どのように評価されるかは、あらかじめ知らされています。

外国語の授業では、対象言語が話される国、文化についての情報を得るために、聴解、読解の能力を高めることが非常に重要となり

【セマティック・ユニットの学習シナリオ例】

▶ タイトル：「少子化が韓国の将来に及ぼす影響」

▶ 言語レベル：3

▶ 話題分野：自分と身近な人びと、地域社会と世界

菜の花高校の韓国語を勉強する生徒たちは、教科書の「家族とコミュニティー」の単元を学習しているうちに、韓国の家族構成に興味をもち、少子化が韓国の将来にどのような影響を与えるかを調べることにした。

クラスはグループに分かれ、少子化に関する統計調査のデータを集めるグループ、少子化が韓国社会全体に与える影響を調べるグループ、少子化が子どもに直接どのような影響を与えているかを調べるグループ、韓国政府が少子化に対しどのような政策を取っているかを調べるグループに分かれて、調査をはじめ。

ウェブ上でデータを集めたり、韓国の友好校の生徒にメールを書いてアンケート調査をしたり、近所に住む韓国人の家族にインタビューをする。それぞれのグループの調査が終わったところで、クラス内でディスカッションをして情報を交換する。その後、集めた情報をまとめ、プレゼンテーションする。プレゼンテーションの模様を友好校でも同時に見られるように、インターネットを通して動画で配信し、友好校の生徒の質問に答えたり、ディスカッションをする。

ます。「めやす」が勧める一連のコミュニケーション活動でも、学習者が話す能力、書く能力だけでなく、聞く能力、読む能力の獲得や発達を助けることが目標とされます。

「セマティック・ユニット」の活動を円滑に行なうために、単元や単元のまとまりの内容を変える必要があるときは、その変更もデザインしておきます。これは教科書の内容を自分の目標に合わせて変更するアダプテーションにもなります。

「セマティック・ユニット」を単元ごとに

行なうと、一連のコミュニケーション活動（学習シナリオ）のデザインや評価にも時間がかかり、教科書アダプテーションの量も増えます。したがって、これまでの教科書中心の授業のなかに最初は2つあるいは3つの単位ごとに、それが無理な場合には、1年に1回程度、セマティック・ユニットを入れ、「わかる」から「できる」、「つながる」の要素が加わったカリキュラムを作っていくことが大事です。

「めやす」ウェブサイトには、高校でよく使われている中国語と韓国語の教科書の著者がデザインした、「めやす」の考えを取り入れた年間指導計画例がありますので、それをその

まま使うこともできます。それをもとに自分なりに工夫して、教科書を使いながら、「めやす」の考えをクラス活動のいろいろな場所に入れていき、しだいに「めやす」を反映した活動を増やしていくようにします。

「めやす」の考えが身についてきたら、「セマティック・ユニット」を組み合わせたカリキュラムにしていきます。この際には「めやす」の15の話題分野を参考にしましょう。例えば次のような構成にすると、3年間でさまざまな話題分野を取りあげることがができます。

年間で取りあげるテーマ例

	テーマ1	テーマ2	テーマ3
1年	自分と身近な人びと	学校生活	日常生活
2年	食	交通と旅行	衣とファッション
3年	地域社会と世界	趣味と遊び	自然環境

4.4 コースの終わりに総まとめの活動をしてみよう

教科書を使いながら、「めやす」の考えをクラス活動に入れていくもうひとつの方法があります。1年の終わりにクラスで学習した語彙・文法表現、文化事項などを総合して、現実社会の文脈のなかで言語を使って目標を達成する活動を入れます。この活動は「**キャップストーン**（冠石: ピラミッドの一番上の四角錐状の石）**活動**」と呼びます。キャップストーン活動としては、「プロジェクト型学習」がクラスに社会活動をもちこむ方法として最適で

す。現実の環境を教室内に作り、学習者がみずから問題を発見し、仲間と問題を解決します。

この場合も周到な準備が必要です。1年後にできるようになることをカリキュラムの最終目標に設定し、それが達成できるように教科書のアダプテーションも行なって、教師も学習者も備えておきます。以下はその過程の一例です。

【プロジェクト型学習の学習シナリオ例】

- ▶ タイトル：在日韓国人の老人ホームで入居者と交流しよう
- ▶ 言語レベル：2
- ▶ 話題分野：自分と身近な人びと、趣味と遊び、人とのつきあい、ことば

①話題・課題を設定する

韓国の音楽（K-POPと昔の歌）、地域社会の在日韓国人、在日韓国人の老人ホームをテーマにすることに決定する。

②計画・準備する

在日韓国人の老人ホーム「故郷の家」を訪問し、これまで学習した韓国語や好きな韓国の歌の発表も兼ねて、入居者と交流するという計画を立てる。グループになって、司会やあいさつ、自分たちのことや好きな歌を紹介するシナリオや交流に必要な表現を洗いだす。それを韓国語でどう言うのか、学習を終えた内容から見つけだし、復習する。地域にある在日韓国人の老人ホーム、日韓の歌の特徴、在日の高齢者が好きな韓国の歌（時代差、世代差）など調べる内容を整理する。

③必要な情報を収集・分析・整理する

インターネットや図書館で、韓国で流行しているK-POPと、入居者が若いころ流行していた歌を調べ、実際に聴いて、歌詞の意味や特徴を理解するとともに、日本の古今の歌と比較してみる。また韓国の服装についても調べ、当日の衣装を決める。在日韓国人一世のことや、一世の暮らしとそれを支える人びとについて学習を深め、視野を広げる。「故郷の家」の設立経緯、入居者の状況、日々の様子などについても調べる。

④本活動に向けて準備作業を行なう

クラス全体で歌う自分たちが好きな歌と老人ホームで喜んでもらえそうな歌、各1曲を決め、暗誦して歌う練習をする。自己紹介や入居者と交流するときに話したい内容を考え、

先生の助けも借りながら、グループメンバーで韓国語のシナリオを作成する。役割（ダンス係、衣装係、演出係、進行係など）を分担して、出し物を練習したあと、他クラスの生徒や先生に観客になってもらいリハーサルを行なう。生徒たちもビデオに撮ったものを確認しながら、改善点を話しあう。

⑤交流や社会貢献活動の本番に臨む

訪問当日、職員から、ホーム建設までの経緯や入居者の普段の生活の様子などについて聞く。後日、報告、発表するための資料ももらっておく。入居者と面会し、司会が全体のあいさつをしてから、準備してきた歌の発表会を行なう。発表会が終わったあと、おやつタイムの手伝いをしたり、個別に自己紹介をしたりしながら入居者と交流する。交流後は入居者とお別れのあいさつをする。

⑥本番活動のなかや活動後に発表を行なう

訪問後には、ホームで出会った方々に韓国語で感謝のカードを書いて送る。

まとめと発表：日本語で感想文を書き、学校のホームページ用にも自分たちの感想を記した訪問記の原稿を作成して、学校内や地域の人たちに伝える。

⑦それぞれの領域での評価を行なう

言語領域：歌のテスト、リハーサルと本番のできばえ、文集、ホームページ用原稿の内容。韓国語がレベルアップしたり学習意欲が高まったりしたか。

文化領域：交流相手と関係が構築できたか。日韓・世代間の歌の比較ができたか。

グローバル社会領域：クラスメートとのグループ作業で協働できたか。地域社会とつながったか。在日韓国人の問題について理解が深まったか。

資質：視野が広がったり考えが深まったりしたか。

学習シナリオ例を3領域×3能力+3連繋で見る

前頁の学習シナリオのそれぞれの学習活動の目標を
3×3+3の表にあてはめると次のようになります。

		能力		
		わかる	できる	つながる
領域	言語	- 以下の事柄に関連する必要な語彙や表現を覚える。 - 自己紹介に必要な語彙・表現 - 好きなことの言い方 - 感想の述べ方 - あいさつやお礼のことば - 聞き返す表現 - 韓国の歌の歌詞やキーワード	- 名前や学校名、家族、年齢などを紹介する。 - 好きな歌や好きなこと、休日にしていること、韓国語を習っていることを伝えその感想を述べる。 - あいさつをしたり、お礼のことばを述べたり、聞きかえしたりする。 - 自分たちが選んだ韓国の歌を歌う。	在日韓国人の老人ホームを訪問し、韓国語を使って入居者の方々と積極的に対話し交流する。
	文化	- 韓国の現代と昔の歌を調べたり聴いたりして、その特徴を認識する。 - 在日韓国人の老人ホームについて調べたことや施設の職員の説明を聞いて、建設までの経緯や入居者の様子を理解する。	- 韓国の現代と昔の歌の歌詞やメロディー、歌い方について比較し、共通点・相違点を分析する。 - 同時代の韓国の歌と日本の歌の共通点や相違点について、気づいたことを発表しあう。 - 韓国の服装（現代風、民族衣装）について調べ、歌やダンスの発表にふさわしい服装について話しあう。	在日韓国人の老人ホームを訪問し、韓国の歌やダンスなどを通して、世代を超えて文化的・歴史的背景の異なる在日一世の方々と交流し、相互理解を深める。
	グローバル社会	在日韓国人の歴史的背景について調べ、地域に在日韓国人のための老人ホームがあることを知り、在日一世と彼らを支える人びとについて認識する。	- 日韓の歌や在日韓国人一世の生活について、インターネットや図書館で調べたことを分析し、まとめる。（情報活用） - 在日韓国人の老人ホームで歌うのにふさわしい昔の歌と、自分たちが紹介したい現代の歌をグループで話しあって決める。（協働、高度思考） - 発表に向けての係分担を決め、企画・練習し、発表する。（協働、高度思考）	在日韓国人の老人ホームの訪問、入居者交流を通して学んだことを文集やホームページで発表し、クラスメートや家族、地域に伝えていく。

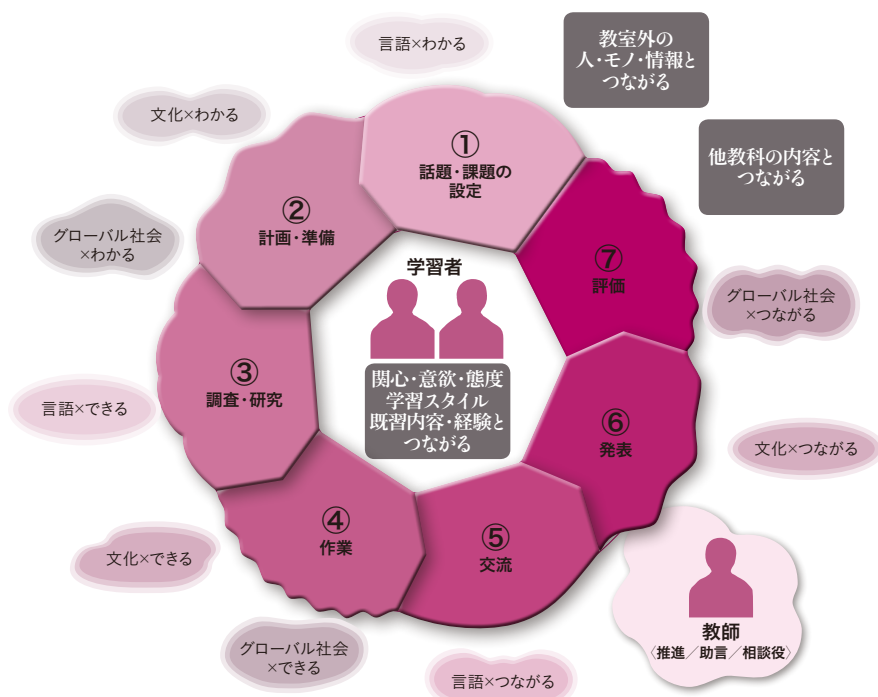
+

関心・意欲・態度／ 学習スタイルとつながる 既習内容・経験／ 他教科の内容とつながる 教室の外の人・モノ・ 情報とつながる	- 好きな歌や音楽を通して学習を深める。 - 歌やダンス、司会、IT操作などそれぞれの得意な分野をいかして学習を深める。 - 第7課までの語彙や文法 - 地理、歴史 - 在日韓国人の老人ホーム「故郷の家」を訪問し、そこに暮らす人たちと交流する。 - 韓国の歌に関するウェブサイトを検索する。
--	--

プ プロジェクト型学習活動は、「学習者中心」「内容重視」の考え方に基づくものであり、言語の重要な機能のひとつである社会活動を教室内外で行なうものです。学習者は、主体的に課題を発見し、深い思考・観

察を行ない、情報を収集してわかりやすくまとめ、仲間と問題を解決する力を育てていきます。教科のなかだけでなく、総合的な学習の時間など、さまざまな学習場面で行なわれています。

プロジェクト型学習活動の進め方



作成者：鈴木一誌デザイン事務所

①話題・課題の設定 学習者が自分にとって身近に関心のある事柄や21世紀のグローバル社会にとって重要な話題や課題などを決める。

②計画・準備 プロジェクトの概要を計画し、設定した話題・課題の内容について話したり、書いたり、議論したりするために必要な語彙、表現を習得・復習するほか、必要な文化知識、背景知識を確認してプロジェクトの準備をする。

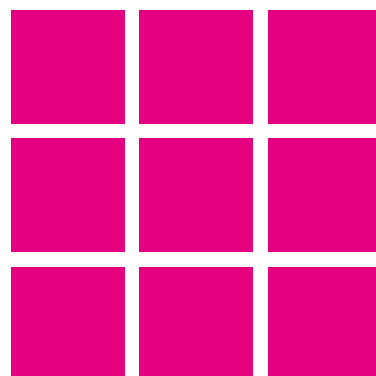
③調査・研究 学習対象言語や母語を使ってインターネットや書籍などから情報を収集・調査し、問題解決のための分析や評価をする。このなかで、高度思考力や情報活用力を身につけることができる。

④作業 プロジェクトの最終段階の活動（例えば交流）のための準備を続ける。ペア、グループ活動を行ない、異なる意見を調整するなかで協働力を身につけることができる。

⑤交流／社会に貢献する活動 学習している言語を使ってさまざまな背景をもつ人びとと交流したり、話題・課題について意見を交換したりする。教室外の人・モノ・情報と接することにより、さまざまな文化について知り、多文化的背景をもつ人となつきあう能力が養われる。

⑥発表 交流中、あるいは交流後の報告として、テクノロジーを使ってプレゼンテーションを行なう。情報、テクノロジー、メディアのリテラシーを身につけることができる。

⑦評価 教師が活動をデザインする際にあらかじめ作っておいた評価を実施し、プロジェクトの目標の達成度を評価する。また、自己評価、グループ評価によって、学習者は、自律性、協働力を内省、評価する。



授業づくりの参考資料

単元事例

例1：単元名|Skypeを使って友好校のクラスと交流しよう

科目名|中国語

作成日|2011年10月20日

作成者|プロジェクトメンバー

学年／年次|1年

クラス人数|16人

使用教科書と対応する課|『高校生からの中国語』4課、5課

話題分野|日常生活、学校生活

言語レベル|1

必要時間数|5～6時間

I 単元目標

Skypeを使ったテレビ会議で、中国長春市にある友好校の日本語クラスの生徒と、学校のことや日常生活の過ごし方について紹介しあい、それぞれの共通点や相違点に気づき、その異同について分析することを通じて、相互理解を深めることができる。

	言語	文化	グローバル社会	学習者	他教科	教室外
わかる						
できる						
つながる						

言語領域	文化領域	グローバル社会領域
◆初対面のときのあいさつなど、基本的なあいさつをすることができる。 ◆自分の学校および1日（1週間）の生活を口頭や書面で紹介することができる。 ◆相手の学校紹介や質問を聞きとったり、提示された資料を読みとることができる。 ◆発表しあったあと、簡単な質問をしあうことができる。 ◆初対面の相手に積極的に話しかけて、うまく情報を引きだすことができる。（コミュニケーション・ストラテジー） ◆テレビ会議の感想をメール（または手紙）で送ることができる。	◆日中のあいさつの仕方を比較することができる。 ◆友好校の様子を、画像を通して観察し、自分たちの学校と比較して共通点や相違点に気づくことができる。 ◆日中のある高校生（自分たちや相手校の生徒）の生活（1日、1週間）について比較し、その共通点や相違点を分析することができる。ほかの高校生にも一般化できるかどうか考えたり、その背景にあるものについて質問をして考察することができる。 学習者のコミュニケーション能力レベルに応じて、日本語の助けを借りて行なってもよい。	◆グループでの話し合いに積極的に参加したり、テレビ会議での役割分担に主体的に関わったり、自分の担当の準備に責任をもって取り組むことができる。（協働） ◆学校紹介の映像制作（ビデオ撮影・編集、または写真撮影・PC取りこみ・編集・アルバム作成など）をすることができる。（情報活用、テクノロジーのリテラシー） ◆相手校で日本語教育が行なわれている背景を理解することができる。（知識理解） 学習者のコミュニケーション能力レベルに応じて、日本語の助けを借りて行なってもよい。
コミュニケーション能力指標★	【日常生活】 1-a. 1日の生活の基本的なあいさつができる。 1-b. 1日の行動（何時に何をするか）について会話できる。 1-c. 1週間の生活（何曜日に何をするかなど）について会話できる。 ★言語領域の「できる」の目標を設定する際に参照した指標。ほかの領域の目標設定とも連動している。数字は【言語レベル-指標表番号】を表示している。 【学校生活】 1-a. 学校の名前や所在地を、言ったり書いたりできる。 1-d. 学校のことについて、口頭でやりとりできる。 1-f. 授業やクラブを担当している先生を口頭で紹介することができる。	

II 評価

学習を助けるための評価（形成的評価）	目標達成度を測る全体的評価（総括的評価）
◆自分の1日の生活や1週間のスケジュールを書く。（簡体字表記および文法・語彙の正確さ、表現の適切さ、全体の構成等） ◆自分の1日の生活や1週間のスケジュールを発表する。（発音の正確さ、声の大きさ、表現、態度等） ◆クラスメートや中国の高校生の発表を聞いて、自分の生活と比較することができる。（聞きとりの正確さ、共通点・相違点の分析）	◆テレビ会議で学校生活や日常生活について発表する。（発表の内容、情報量、発音の正確さ、表現の適切さ等）テレビ会議の様態をビデオで撮っておき、生徒も発表の内容や方法を自己評価する。 ◆事前に作成した学校生活紹介の資料（紙、写真、動画など）の内容やまとめ方を評価する。（情報量、発音・表記の正確さ、表現の適切さ、独創性、わかりやすさ、情報収集・総合力、写真・動画の使い方等） ◆会議後の話しあいで、日中の学校や日常生活の異同について気づいたことを評価する。（共通点や相違点の観察、気づき、異同の背景考察等）

III 学習活動

プレコミュニケーション活動 (語彙・表現習得活動)		コミュニケーション活動 (学習シナリオ)	
◆1日のさまざまな場面（家を出るとき／校内で先生に会ったとき等）を示したイラストを用意し、そのときにする基本的なあいさつを言ってマッチングする。【1-a】 ◆中国語でイス取りゲーム（フルーツバスケットの要領で）をする。中央に立つ人は1日や1週間の行動を表わす文を1つ作り発表する（「6時に起きる」、「日曜日は買い物に行く」など）。該当者は席を立てて移動する。【1-b,c】 ◆自分の1日の生活や1週間のスケジュールを書いて発表する。【1-b,c】 【 】内は対応するコミュニケーション能力指標 話題分野は全て日常生活		〈場面状況〉 A高校の中国語選択クラスは、友好校である吉林省長春市のT高校とSkypeを使ったテレビ会議で交流することになった。1回目は簡単な学校紹介と代表数名が自分の1日（または1週間）の生活を紹介しあうことにした。T高校は日本語教育が盛んなので、交流は原則としてそれぞれが学んでいる相手の言語を使って行なうことにした。 …………… 〈活動の流れ〉 いくつかのグループに分かれ、自分がどんな1日（1週間）を送っているか紹介しあったあと、誰を代表とするか話しあって決める。代表以外の生徒は、司会、音声確認、記録、中国語で学校を紹介するビデオ（または写真）製作などの担当を役割分担して決める。それぞれ担当の準備をして、当日までにリハーサルをする。交流の冒頭でどのようなあいさつをするかを考える。また相手校で日本語教育が盛んな背景について理解しておく。 交流当日、テレビ会議で顔を見ながらまずあいさつをする。次にそれぞれの学校紹介の画像を画面に出して流す。代表数名が自分の生活について発表する。その後、日中の学校や生活を比較しながら簡単な質問をしあう。 交流後、クラスでテレビ会議に関する感想や反省点を述べあうとともに、日中の学校や日常生活の異同について気づいたことを日本語で話しあう。2回目の交流のテーマを考え、話しあった内容をまとめてメール（または手紙）で相手校に送る。 …………… ヒント🔗テレビ会議ができない場合は、相手校と交換したビデオを見て感想や質問をメールで交換する。	
〈使用教材・教具〉 デジタルカメラ、ビデオ、PC、ウェブカメラ、マイク、模造紙			
表現と表現のポイント		語彙	文化・グローバル社会事象と事象のポイント
〈表現〉 你们好! / 见到你们, 很高兴。 / 我来介绍一下我们学校的情况。 / 我们学校在市中心, 交通很方便。 / 男生比女生多。 / 这位是我们的主任, 铃木老师。他教我们英语。 / 大部分的学生毕业以后上大学。 / 我每天六点半起床。 / 我坐电车去学校, 大概需要一个小时。 / 上午有四节课, 下午有两节课。 / 一节课有五十分钟。 / 我参加学校的吹奏乐队, 每天练三个小时。 / 回家以后, 先做作业, 然后吃晚饭、看电视、给同学发短信。 / 我们全家人都喜欢看连续剧, 每天看两个小时电视。 / 十二点左右睡觉, 每天睡六个小时。 / 周末一般在家上网, 有时候跟朋友一起逛街, 去唱卡拉OK。 …………… 〈表現のポイント〉 挨拶、連動文、動詞“在”、前置詞“在”、比較表現、時刻の表わし方、時間の長さの表わし方、動詞“有”、“先～再…”、量詞“节”		数字、日時・曜日・時刻の表わし方、時間の長さの表わし方、1日の行動を表わす語彙（“起床、洗脸、刷牙、吃饭、去学校、上课、参加课外活动、回家、去补习学校、做作业、看电视、上网、洗澡、睡觉”等）、学校・クラブ活動の紹介（“课外活动、篮球、排球、足球、舞蹈、茶道、书法”等）、週末の過ごし方（“在家休息、逛街、买东西、参加网球俱乐部的比赛、看电影、买东西、去唱卡拉OK、参加志愿者活动”等）	〈事象〉 ◆あいさつの仕方（お辞儀などの非言語行動も含める） ◆1日（1週間）の生活 ◆中国東北部の日本語教育実施状況 …………… 〈事象のポイント〉 ◆あいさつの仕方について日中で比較し、交流の際、どのようなあいさつをするか考える。 ◆長春の高校生は普段、どのような生活を送っているか自分たちの1日（1週間）と比較する。 ◆相手校で日本語教育が実施されていることの歴史的背景を理解することができる（グローバル社会）
教室外（人・モノ・情報）との連繋		他教科の内容との連繋	
友好校である長春の高校の生徒とSkypeを使ってテレビ会議をする。		情報	

例2: 単元名 | 韓国人留学生がクラスにやってくる

科目名 | 韓国語

作成日 | 2011年10月19日

作成者 | プロジェクトメンバー

学年／年次 | 2年

クラス人数 | 10人

使用教科書と対応する課 | なし

話題分野 | 自分と身近な人びと

言語レベル | 2

必要時間数 | 8時間

I 単元目標

地域にある大学の韓国人留学生をクラスに招き、自己紹介をしあったり、将来の夢について語ったり、韓国の高校生の将来の希望についての話を聞いたりすることを通じて交流を深めることができる。

	言語	文化	グローバル社会	学習者	他教科	教室外
わかる						
できる						
つながる						

言語領域	文化領域	グローバル社会領域
◆ 玄関で留学生を迎え、韓国語であいさつし、部屋に案内することができる。 ◆ 韓国の留学生に対して関心をもち、言語や文化を超えて初対面の相手と関係を作るために、自分をいかに印象的に紹介するか、どんなことを聞いたり、話したりしたらいいのかを考え、関係性を構築する第一歩を踏み手立てを身につける。 ◆ 留学生を茶菓でもてなして懇談することができる。 ◆ 式次第に従ってプログラムの司会進行をすることができる。 ◆ 自己紹介し、卒業後の進路希望などを話すことができる。(クラスメート同士の相互理解にもつながる) ◆ 留学生の韓国語による簡単な授業(韓国の高校生の将来の希望などについて)を聞くことができる。 ◆ 聞きとった手がかりから、相手の言いたいことを推しはかることができる。 ◆ 留学生とのやりとりの内容などをまとめ、お礼の手紙を書くことができる。	◆ 韓国人の応接の仕方やあいさつの仕方を調べ、日本人の場合と比較しながら、本番でどのように接待したらいいかを考える。 ◆ 韓国では数え年で年齢を言うことに気づき、日本でも昔は数え年で言っていたことを理解し、その理由を考えることができる。 ◆ 日韓の高校生の将来への進路希望を比較し、相違点があるか分析することができる。 学習者のコミュニケーション能力レベルに応じて、日本語の助けを借りて行なってもよい。	◆ クラスで主体的に役割分担をし、責任をもって作業をやりぬくことができる。(協働) ◆ 記録の工夫をすることができる。(情報活用/テクノロジーのリテラシー) ◆ 21世紀のグローバル社会の状況を認識したうえで、卒業後の進路について考えることができる。韓国の同世代の考え方にも触れ、より広い視野で将来を考える。(知識理解、高度思考) 学習者のコミュニケーション能力レベルに応じて、日本語の助けを借りて行なってもよい。
コミュニケーション能力指標★	【自分と身近な人びと】 1-c. 簡単な自己紹介を口頭でまたは書いてすることができる。 2-a. 家族の職業やペットについて口頭でまたは書いて紹介しあうことができる。 2-b. 自分や身近な人の外見について口頭で描写しあうことができる。 ★言語領域の「できる」の目標を設定する際に参照した指標。ほかの領域の目標設定とも連動している。数字は【言語レベル-指標表番号】を表示している。 2-c. 卒業後の進路および将来就きたい職業や働きたい場所について話しあうことができる。 オリジナル指標：式次第に従って司会進行をすることができる。 【学校生活】2-d、3-h、【人とのつきあい】1-f 【自分と身近な人びと】1-aおよび【人とのつきあい】1-a(初対面の基本的あいさつ)は既習事項。	

II 評価

学習を助けるための評価 (形成的評価)	目標達成度を測る全体的評価 (総括的評価)
◆ 自己紹介の原稿を作る。(必要な情報、オリジナリティー、表現の適切さ) ◆ 想定問答の原稿を作る。(内容的確さ、表現の適切さ) ◆ 語彙・表現の小テスト。(表記の正確さ、理解度)	◆ 礼状を書く。(必要な情報、オリジナリティー) ◆ 交流の内容の書きとりシートを留学生に書いてもらう。(伝わりやすさ) ◆ 将来の進路に対する考え方の日韓の共通点と相違点を日本語で話しあう。(伝えようとする意欲、聞こうとする姿勢)

III 学習活動

プレコミュニケーション活動 (語彙・表現習得活動)		コミュニケーション活動 (学習シナリオ)	
◆ クラスの何人かと自己紹介(住んでいる所や血液型、誕生日・星座、家族の職業や外見など)をしあい、聞いたことをもとに相手の紹介カードを作る。【2-a,b】 ◆ 職業に関する単語を提示して、やってみたいものの、やってみたいくないものに分類してみる。【2-c】 【 】内は対応するコミュニケーション能力指標		〈場面状況〉 F高校の韓国語のクラスに、地域の大学に留学している韓国人の学生が出前授業(韓国の高校生の将来の希望について)に来ることになった。生徒も1人3分ずつ、自分や自分の身近な人のことや卒業後の夢などについて話したあと、留学生に何か質問することになった。 ----- 〈活動の流れ〉 留学生が来たときに、どのようにもてなすかを考えて、歓迎班、司会班、茶菓班、記録班など役割分担を決め、班ごとに準備をする。韓国での自己紹介の仕方や年齢の数え方などのことも学びながら、各自どんな自己紹介をしたいか考えて、その内容を口頭で発表する準備をする。留学生からの質問を想定して、どう答えるかも考えておく。留学生に質問する時間もあるので、どんなことを聞きたいかを考え、韓国語で質問できるように準備する。 当日、歓迎班が玄関で留学生を迎え、韓国語であいさつし、部屋に案内する。司会班が式次第に従って、授業を進行する。生徒は1人ずつ自己紹介し、卒業後の希望などを話す。留学生からの質問に各自聞きとれたことを手がかりにわかる範囲で答える。その後、留学生が日本語を交えながら韓国の高校生の将来への希望などについて授業を行なう。生徒たちは、自分たちの将来への希望と比較し、知りたいことを留学生に質問をする。記録班はこの模様をカメラなどで記録する。茶菓班が留学生との懇談の場を作る。歓迎班が玄関まで留学生を送る。 記録班の記録をもとに、留学生とのやりとりの内容をまとめ、お礼の手紙とともに留学生に送る。生徒は各自で留学生の出前授業の感想を簡単にまとめて書く。それぞれの班で反省会を開き、次回同じような機会があったときにはどのようにしたらいいかと定める。クラス全体で将来の進路に対する日韓の高校生の共通点、相違点を日本語で話しあう。 ----- ヒント☞さらに活動を発展させる場合には、韓国人留学生に韓国の大学生活について日本の大学生活と比較してどう思うか尋ねたり、韓国の大学への留学相談をしたりすることもできる。	
〈使用教材・教具〉 交流会に必要な文房具、記録用カメラ			
表現と表現のポイント		語彙	文化・グローバル社会事象と事象のポイント
〈表現〉 나이가 어떻게 되세요? 요코하마에 온 적이 있어요? 어떻게 일본에 오셨어요? 우리 집에 고양이가 있는데 너무 귀여워요. 한국에 가면 뭐 할 거예요? 한국 대학 시험을 볼 생각이에요. 아직 잘 모르겠지만 취업할 거예요. 아직 모르겠어요. 요리를 좋아하니까 요리사가 되고 싶어요. 오빠(누나 남동생 여동생)는 어떤 분이세요? 누나는 키가 큰데 동생은 좀 작아요. 일본에 이모가 살아요. 그럼, 시작하겠습니다. 오늘은 이것으로 마치겠습니다. ----- 〈表現のポイント〉 어떻게、왜、얼마나などを使った疑問文 -[으]ㄴ 적이 있다. -세요／-시／過去形／-아/어/여 보다 -[으]면／-[으]ㄴ 후／-[으]ㄴ 생각이다／-지만／-[으]니까／-[으]ㄴ는데		職業に関する語彙 (취업, 회사원, 공무원, 의사, 간호사, 교사など)	〈事象〉 ◆もてなしの仕方、あいさつの仕方 ◆自己紹介の仕方 ◆初対面でどのように自己紹介をするか、相手について何を聞くか ◆年齢 (数え年と満年齢) ◆日韓の高校生の進路希望 ----- 〈事象のポイント〉 ◆韓国の留学生に対して関心を持ち、コミュニケーションをしようとする態度を身につける。 ◆言語や文化を超えて、初対面の相手と関係性を構築する第一歩を踏み手立てを身につける。 ◆韓国では数え年で年齢を言うことに気づく。日本でも昔は数え年で言っていたことを理解し、その理由を考える。 ◆日韓の同世代としての共通点や相違点に気づき、相違点の理由を考える。
教室外 (人・モノ・情報) との連繋		他教科の内容との連繋	
地域に住む韓国人の留学生を教室に招待する。		なし	

領域別評価ルーブリック例

文化領域：例1

関心・観察・気づき・発見、比較 文化事象の共通性・相違性の要因考察／異文化間の調整と相互作用

評価レベル：

5

4

3

要素：(2) 項目

要素	レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
関心・気づき・発見		目標文化に対して、関心や問題意識をもち、複眼的な視点から捉え、気づきと発見の旅をすることができる。	目標文化に対して、関心や問題意識をもち、複眼的な視点から迫ろうとしている。	目標文化に対して、関心や問題意識をもつことができる。	目標文化に対して、関心をいこうとしている。
観察・比較		・目標文化と自文化の比較を中心に、目標文化内や自文化内の比較、目標文化と自文化以外の他文化との比較を多角的にできる。 ・グローバルな視野で相違性、共通性、関係性を発見することができる。	目標文化と自文化の比較を中心に、目標文化内や自文化内の比較、目標文化と自文化以外の特定の他文化との比較をしながら、相違性や共通性、関係性を発見することができる。	目標文化と自文化の比較を中心に、目標文化内や自文化内の比較をしながら、相違性や共通性、関係性を発見しようとしている。	目標文化と自文化の比較を中心に、目標文化内や自文化内の比較をしようとしている。

文化領域：例2

関心・観察・気づき・発見、比較 文化事象の共通性・相違性の要因考察／異文化間の調整と相互作用

評価レベル：

5

4

3

要素：(3) 項目

要素	レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
文化事象の共通性・相違性の考察		目標文化と自文化を比較してわかった相違性、共通性、関係性の背景にある要因の考察を多角的に行なうことができる。	目標文化と自文化を比較してわかった相違性、共通性、関係性の背景にある要因の考察ができる。	目標文化と自文化を比較してわかった相違性、共通性、関係性の背景にある要因について考察しようとしている。	目標文化と自文化を比較してわかった相違性、共通性、関係性の背景にある要因について興味をもっている。
目標文化の理解と自文化の再認識		目標文化についての理解を深めるとともに、目標文化との関係で自文化を多角的に捉えなおし、再認識することができる。	目標文化についての理解を深めるとともに、目標文化との関係において自文化を再認識することができる。	目標文化についての理解を深め、目標文化と自文化との関係を見いだすことができる。	目標文化についての理解を深め、目標文化と自文化との関係を見いだそうとしている。
文化の多様性や可変性		目標文化についての理解を深め、自文化を再認識することで、文化の多様性や可変性などの視点を獲得し、活用することができる。	目標文化についての理解を深め、自文化を再認識することで、目標文化と自文化との関係性から、文化の多様性や可変性などの視点を獲得することができる。	目標文化についての理解を深め、自文化を再認識することで、目標文化と自文化との関係性に着目することができる。	目標文化についての理解を深め、自文化を再認識することで、目標文化と自文化との関係性に着目しようとしている。

文化領域：例3

関心・観察・気づき・発見、比較／文化事象の共通性・相違性の要因考察／異文化間の調整と相互作用

評価レベル：

5

4

3

要素：(5) 項目

レベル 要素	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
目標文化と自文化の共通性や関係性、相互依存性の認識	目標文化と自文化の共通性や関係性、相互依存性を認識し、活用することができる。	目標文化と自文化の共通性や関係性、相互依存性を認識することができる。	目標文化と自文化の共通性や関係性、相互依存性を認識しようとしている。	目標文化と自文化の共通性や関係性を見いだそうとしている。
固定観念や先入観の是正	- 固定観念や先入観をもっているかどうかを省察し、既得の固定観念や先入観を是正することができる。 - 固定観念や先入観が形成される過程を多角的に考察し理解することができる。	固定観念や先入観をもっているかどうかを省察し、もっている場合は是正することができる。	固定観念や先入観をもっているかどうかを省察することができる。	固定観念や先入観をもっているかどうかを省察しようとしている。
共感性	目標文化に対して共感的に接し、目標文化に対しての共感性を、実体験を通じて理解することができる。	目標文化に対して共感的に接することができる。	目標文化に対して共感的に接しようとしている。	目標文化に対して共感的に接することが大切であることを認識している。
相違性に対する尊重	目標文化の相違性と文化の多様性を尊重し、時と場に応じた対応ができる。	目標文化の相違性に注目し、相違性を尊重することができる。	目標文化の相違性に注目し、相違性を尊重しようとしている。	目標文化の相違性を尊重することが大切であることを認識している。
広い視野や世界観の獲得	自他を含む多様なものの見方や考え方を理解し、視野や世界観を広げ、時と場に応じて活用することができる。	自他を含む多様なものの見方や考え方を理解し、視野や世界観を広げることができる。	自他を含む多様なものの見方や考え方を理解し、視野や世界観を広げることが大切であることを認識している。	自他を含む多様なものの見方や考え方を理解することが大切であることを認識している。

グローバル社会領域：例1

協働力 高度の思考能力／情報活用能力

評価レベル：

5

4

3

要素：(4) 項目

要素	レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
チームへの参加		真のチームメンバーであり、目標達成のために努力し、ほかのメンバーをサポートしている。	チームの目標達成のために努力している強いチームメンバーである。	チームの目標達成のために必要なチームメンバーである。	時としてチームメンバーとして参加していない。
信頼性		常に締め切りを守り、与えられた仕事をきちんと行ない、期待以上の成果を出す。	だいたい締め切りを守り、与えられた仕事をほぼ仕上げる。	ときどき締め切りを守らないことがあり、自分に与えられた仕事をするのに他人の力を必要とすることもある。	締め切りを守らないことが多く、与えられた仕事をしていない。目標を達成するために他人の力に頼っている。
ディスカッションの能力		ディスカッションの際にはみんなの意見を聞くとともに、みんなに意見を言う機会を与えている。意見が一致するようにディスカッションをリードできる。	ディスカッションの際には、みんなの意見を聞くとともに、自分の意見も言い、結論を出すために貢献している。	ディスカッションの際には人の意見をあまり聞かず、ディスカッションを独占したりして、意見の一致に貢献しない。	ディスカッションでは人の意見を聞かなかったり、他人の意見を尊重しない。ディスカッションを乱したり、意見の一致の妨げとなる。
グループワーク		グループの目標を達成するために常に努力し、妥協が必要なときは妥協する。グループでの目標達成のために常にポジティブであり、他人への協力を惜しまないし、グループのために自分の能力、知識、時間などを常に提供し、目標を達成するために与えられた以上の仕事をする。	グループの目標達成のためにおおむね努力し、妥協することもある。他人と協働作業することにおおむねポジティブである。グループのために自分の能力、知識、時間などを提供することが多く、自分に与えられた仕事はおおむね終える。	グループの目標達成のために時として妥協することもあり、目標達成のために他人を助けることもある。グループのために自分の能力、知識、時間などをときどき提供する。与えられた仕事をしないこともときどきある。	グループの目標達成のために妥協することがなく、グループのほかのメンバーといい関係を築くことができない。グループでする作業、グループメンバーに批判的なことがある。与えられた仕事をせず、グループへの貢献もほとんどない。

グローバル社会領域：例2

協働力／高度の思考能力／情報活用能力

評価レベル：

5

4

3

要素：(3) 項目

要素 レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
情報のリテラシー	目標達成に適切かつ、オリジナルな研究をデザインでき、そのために必要な情報源を探しだし、常に適切な情報を使う。情報や考えを適切な方法で評価できる。情報を適切に使い、オリジナルな研究をすることができる。著作権を尊重し、関連する法律を遵守する。	目標達成に適切な研究をデザインでき、必要な情報を探し、適切な情報をほぼいつも使うことができる。情報や考えをほぼいつも正しく評価できる。効果的に情報を使い、ある程度説得力のある研究をすることができる。著作権を尊重し、関連する法律を遵守する。	目的達成に通じる研究デザインの仕方を知っている。信頼のおける情報を選び、それを効果的に評価することができる。適切に情報を取り入れ、説得力のある研究をすることができる。ほぼいつも著作権を尊重し、関連する法律を遵守する。	目標達成のためのおおまかな研究デザインができるが、細かい点で問題がある。適当な情報をほぼ選べるが、時として不適当な情報が含まれていることもある。適切に情報を取り入れることができることもある。情報の一部を取り入れ、研究することができる。著作権を完全に尊重していないし、関連する法律を無意識、あるいは意図的に破っている場合がある。
メディアのリテラシー	情報を正確、かつ効果的に伝えるためのメディアを正しく選択することができる。聴衆のニーズを効率的に考慮した伝達方法、伝達媒体を常にデザインでき、非常に精巧かつ創造的でオリジナリティーがある。常に聴衆のことを考慮し、完璧に意図を伝えることができる。	情報を正確に伝えるためのメディアを選択する能力があり、時に聴衆のニーズを考えた伝達方法、伝達媒体をデザインでき、効果的である。ある程度、創造的である。自分の意図は大体伝えることができる。	情報を伝えるためのメディアをある程度選択する能力があり、効果的な伝達方法、伝達媒体をほぼデザインできるが、問題がある場合もある。そのため自分の意図、意志がうまく伝わらないこともある。	情報を伝えるためのメディアの選択能力を獲得しつつあるが、効果的な伝達方法、伝達媒体をデザインするためにはまだまだ努力が必要である。自分の意図、意志をうまく伝えるためには学習、経験をさらに必要とする。
テクノロジーのリテラシー	目標達成のために最も効果的かつ効率的なソフトウェアを選択することができ、それを効果的に駆使して、目標を達成することができる。適切なウェブ検索エンジンを使い、必要な情報を見つけたり、リソースをダウンロードすることができ、それを最大限使うことができる。電子メールプログラムなどのコミュニケーションのためのソフトウェアを効果的、効率的に使い、効果的なコミュニケーションができる。	目標達成のために必要なソフトウェアを選択することができ、それをある程度使いこなして、目標をほぼ達成することができる。主要なウェブ検索エンジンを使い、情報を見つけることができる。リソースをダウンロードできないこともあるが、できた場合には使うことができる。電子メールプログラムなどのコミュニケーションのためのソフトウェアを使って、コミュニケーションを行なうことができる。	目標達成のために必要なソフトウェアを選択でき、使うことができる。時として、適切なソフトウェアを選択できないために、目標を達成できなかったり、目標達成に時間がかかることがある。リソースをウェブ検索エンジンで見つけられず、目標達成が難しいこともある。電子メールプログラムなどのコミュニケーションのためのソフトウェアの基本的用法を知っているが、効果的には使っていない。	目標達成に必要なソフトウェアを選択できない。また与えられたソフトウェアを使うのに苦労し、完全に目標が達成できない。ウェブの検索が効果的にできないため、必要な情報が見つけれられないし、リソースを得ることもできない。電子メールプログラムなどのコミュニケーションのためのソフトウェアの使い方を知らないために、オンラインのコミュニケーションが容易ではない。

グローバル社会領域：例3

協働力 高度の思考能力 情報活用能力

評価レベル：

5

4

3

4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
● 完璧かつ正確に証拠、事実、問題、データを解釈できる。 ● 与えられた議論のよい点、悪い点を全て探することができる。 ● 完璧に、いろいろな観点を分析したり、評価できる。 ● データをもとに正しい結論を導きだすことができる。 ● 自分の考え、結論を、データを使って完璧に正当化することができる。 ● 仮説、理由づけを完璧に説明することができる。 ● 公正な判断を完璧にすることができる。	● 正確に証拠、事実、問題、データを解釈できる。 ● 与えられた議論のよい点、悪い点を探することができる。 ● いくつかの観点を分析したり、評価することができる。 ● 自分の考え、結論をデータを使って正当化することができる。 ● 仮説、理由づけを説明することができる。 ● 公正な判断をすることができる。	● 正確に証拠、事実、問題、データを解釈しているが、一部解釈が不正確なこともある。 ● 与えられた議論のよい点、悪い点を探することができないことが多い。 ● 観点を分析したり、評価する際に、重要な観点をみつけられないことがある。 ● 自分の考え、結論をデータを使って正当化できないことがある。 ● 仮説、理由づけを説明できないことがある。 ● 公正な判断ができないことがある。	● 証拠、事実、問題、データの解釈にバイアスが入ることが多い。 ● 与えられた議論のよい点、悪い点を探することができない。 ● 観点を分析したり、評価する際に、重要な観点をみ逃す。 ● 自分の考え、結論をデータを使って正当化する際に、間違った理由づけや間違った結論に行きつく。 ● 仮説、理由づけをできない。 ● 公正な判断ができない。

言語領域：例1

〈タスク〉中国・韓国の学校生活について調査し、中国語・韓国語で発表する。

対人モード（話す・聞く、書く・読む）／解釈モード（聞く、読む）／提示モード（話す、書く）

評価レベル：

5

4

3

要素：（ 8 ）項目

要素	レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
語彙		豊富な語彙を正しく使っている。	必要な語彙を正しく使っている。	ときどき語彙の間違いや語彙の不足が見られる。	語彙の間違いが多く、語彙が不足している。
文法表現		多様な文法表現を適切に使っている。	必要な文法表現を身につけ、正しく使っている。	ときどき文法表現の間違いが見られるほか、使う文法表現が限られている。	文法表現の間違いが多く、使用する文法表現も非常に限られ、意味を伝えるのに苦労している。
流暢さ、発音、わかりやすさ		よどみなく滑らかに話が進んでいる。発音も非常に正確で、意味が完全にわかる。はっきりした大きな声で話し、よく聞きとれる。	ときどき躊躇するところなどはあるが、発表を全部終えることができる。完全な発音ではないが、コミュニケーションには全く問題ない。意味はほぼ問題なくわかる。声もはっきりして、聞きやすい。	ときどき話が途切れ途切れになったり、スピーチが遅くなったり、言いよどみ、沈黙がある。発音の問題のために意味がわかりにくいところがある。声が小さくなるところもある。	話が途切れ途切れで、長い沈黙があったり、言いよどみがあったりして、内容が理解しにくい。発音の問題が多く、意味がよくわからないところが多い。声が小さくなったり、ぶつぶつ口のなかでつぶやくようなところもある。
構成		情報を論理的、かつ聴衆の興味を引く順序で提示し、理解しやすい。	情報を論理的に提示し、聴衆のわかりやすさを考慮している。	情報の提示、構成に少し問題があり、理解に時間がかかることがときどきある。	情報の提示順に問題があり、理解するのが非常に難しい。
内容に関する知識		発表のトピックに関する内容の知識が十分あり、詳細もよく説明し、聴衆の質問にも完全に答えられる。	発表のトピックの内容をよくおさえており、聴衆の質問にも、ある程度詳細な説明を加えて答えられる。	発表のトピックの内容について十分知識をもっていないため、やさしい質問には答えられるが、詳細な知識を要求する質問には答えられない。	発表のトピックの内容をほとんど把握していないため、発表の内容に大きな問題がある。聴衆の質問にもほとんど答えられない。
写真、図、イラストなどのビジュアルエイドの使用		ビジュアルエイドを非常に効果的に使い、発表を非常にわかりやすいものになっている。	発表に関するビジュアルエイドを適切に使っている。	ときどきビジュアルエイドを使うが、発表の内容の理解を助けるものではない。	発表の内容にあまり関係のないビジュアルエイドを使うか、全くビジュアルエイドを使わない。
パワーポイントにおける言語使用		文字、文法表現の間違いは全くない。	文字、文法表現の間違いはわずかにあるが、理解には問題がない。	文字、文法表現の間違いが各所に見られる。	文字、文法表現の間違いが多く、理解するのに問題などもある。
アイコンタクト		聴衆と常にアイコンタクトを保ち、ノートに頼ることはない。	聴衆とアイコンタクトを保ち、ノートに頼ることは少ない。	聴衆とときどきアイコンタクトしたが、ノートを読んでいることが多い。	聴衆とのアイコンタクトはなく、常にノートを読みながら、話している。



クラスの目標に応じて、採点のカテゴリーを加重化してもよい。また、評価の目的に応じて、採点のカテゴリーを選んだり、1つのカテゴリーをさらに細分化してもよい（例：流暢さ、発音、わかりやすさを3つに分ける、語彙を正確さと量に分ける等）。発表の指示をどのように与えたか、評価の目的が何かによって、「構成」をさらに「導入部」、「主要なパート」、「結論」の3つに分けて評価してもよい。発表に時間制限がある場合には、時間を守ったかどうかを要素に入れて評価することもできる。

言語領域：例2

〈タスク〉中国・韓国の学生の食生活の傾向について調べ
それに対する自分の意見をレポートにまとめる。

対人モード（話す・聞く、書く・読む）／解釈モード（聞く、読む）／提示モード（話す、書く）

評価レベル：

5

4

3

要素：（ 5 ） 項目

要素 \ レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
タスク	タスクを要求以上に達成。考えをよく発展させている。	要求されたタスクを達成。表現された内容も適切に発展させている。	要求されたタスクのなかに達成していないものがある。内容も完全に発展させていない。	達成されていないタスクが多い。内容もタスクの目的に合わないところが多いし、十分発展させられていない。
構成	非常に論理的に構成されており、わかりやすい。導入部から本文、結論の流れが一貫している。	論理的に構成され、構成上の問題も少ない。導入部と結論が効果的に連携している。	ときどき構成に問題のあるところがあり、内容の一貫性を欠くところもある。	全体的構成も段落内の構成も不適切である。導入部と結論の間の連携が不適切である。
語彙、文法表現	豊富な語彙、文法表現を駆使し、また正確に使っていて、わかりやすい。	必要な語彙、文法表現をほぼ正しく使い、内容の理解にも問題ない。	語彙、文法表現の量、使用の正確さに問題があり、内容がわからないところがある。	必要な語彙、文法表現の知識を欠いており、内容を十分伝えられない。
正書法	文字、句読点の用法の間違いがない。	ときどき文字、句読点の間違いがある。	不正確な文字、句読点の用法がしばしば見られる。	文字、句読点の用法に大きな問題があり、内容理解に問題が出る。
スタイル	タスクに適切なスタイルを一貫して使っている。	スタイルの使い方に間違いが少しある。	スタイルの使い方が一貫しないところが多々ある。	スタイルの概念がはっきりとしていない。

言語領域：例3

〈タスク〉近所に住む中国・韓国からの留学生に、来月から実施される新しいゴミ収集の方法について説明する。

対人モード（話す・聞く・書く・読む）／解釈モード（聞く、読む）／提示モード（話す、書く）

評価レベル：

5

4

3

要素：（ 8 ）項目

要素	レベル	4 目標以上を達成	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
談話のレベル		段落レベルで話している。	文を組みあわせて話し、ときどき段落レベルで話す。	接続詞を使い、文を組みあわせているが、段落レベルまではいかない。	文の羅列で、ときどき複文を使う。基本的に文レベルである。
文法表現		多様な文法表現を駆使し、間違いもなく、正確度が高い。	タスクを達成するのに必要な文法表現を使い、間違いはたまにあるが、理解を妨げない。	タスクを達成するのに適切な文法表現をときどき欠いている。正確に使えない文法表現もある。	タスクを達成するのに十分な文法表現を欠いている。正確度も低い。
語彙		豊富な語彙を常に正確に使い、タスクを達成している。	タスクを達成するのに適切な語彙をもっている。間違いはあるが、理解を妨げない。	タスクを完全に達成するのに十分な語彙をもっていない。ときどき正確さを欠き、意味がわからないことがある。	最低限の語彙も欠いており、タスクを達成できない。正確さにも欠ける。
言語機能		タスク達成に必要な言語機能を完全に使える。	ときどき小さな問題はあがあるが、タスク達成に必要な言語機能は使える。	いくつかの重要な言語機能を完全に使いこなせず、タスクが達成できないことがある。	基本的な言語機能を使うことができず、タスクを達成できない。
理解度		相手の言っていることを完全に理解し、また細かいニュアンスまでわかっている。	相手の言っていることがほぼわかっており、タスク達成には問題がない。	相手の言っていることが理解できていないことがときどきある。	相手の言っていることをほとんど理解できていない。
理解される度合い		外国人に慣れていない母語話者にも完全に理解してもらえる。	外国人に慣れていない母語話者にはわかってもらえないこともあるが、外国人に慣れた母語話者には完全にわかってもらえる。	外国人に慣れた母語話者でもときどきわからないところがある。	外国人に慣れた母語話者でも理解できないところが多い。
コミュニケーション・ストラテジー		必要な場合にはコミュニケーション・ストラテジーを非常にうまく使っている。	時として自分の意志をうまく伝えられないことがあるが、コミュニケーション・ストラテジーを適切に使っている。	時々コミュニケーション・ストラテジーを使っている。成功しているストラテジーの使用もあれば、失敗しているものもある。	コミュニケーション・ストラテジーをうまく使えない。多くのストラテジーをもっていない。
文化的要素		常に文化的に適切な表現、ジェスチャーを使っている。相手の文化をよく理解していることが明らかである。	ほぼ適切な文化的表現、ジェスチャーを使っている。タスクを達成するのに必要な文化要素は理解している。	ときどき文化的理解を欠いていることをうかがわせる表現、ジェスチャーが見られる。タスク達成のために必要な文化理解が十分でないことが明らかである。	表現、ジェスチャーなどから、文化理解が不十分であることが明らかである。母語の文化要素が見られるところに見られる。



これはレベルの高い話者の評価用のルーブリックである。
評価の対象、目的に応じて、適宜変更する必要がある。

言語領域：例4

対人モード（話す・聞く、書く・読む）／解釈モード（聞く、読む）／提示モード（話す、書く）

評価レベル：

5

4

3

要素：（ 6 ） 項目

要素	レベル	3 目標を達成	2 目標達成まであと少し	1 目標達成まで努力が必要
聞いたこと、 読んだことが 理解できたか		理解をチェックする質問 全てに正しく答え、聞いた こと、読んだことをよく 理解している。	理解をチェックする質問 の大部分に正しく答え、 聞いたこと、読んだこと の大部分を理解している。	理解をチェックする質問 の答えに間違いが多く、 聞いたこと、読んだこと をよく理解していない。
ストラテジーの 使い方		未習の語彙、表現の意味 も文脈や既習の語彙、表 現の知識を使い全て理解 し、テキスト全体の理解 に利用した。	既習の語彙、表現を使っ て内容を理解できた。文 脈を使つての意味の推測 が少しできた。	既習の語彙、表現の理解 にも問題があり、ストラ テジーを使うまでに達し ていない。
テキストの一番 大切な部分が 理解できたか		完全に理解できた。	ほとんど理解できた。	理解できなかった。
テキストの 細かい内容は わかったか		細部まで読むことがで きた。	重要な細かい点は理解で きた。	細部は理解できなかった。
行間を読むことは できたか		行間を読んで、話し手、 書き手の真意を正しく理 解できた。	行間を読んで、話し手、 書き手の真意を理解しよ うとした。	行間の読み方がわからな い。
文化的な意味が 理解できたか		テキストがどのような文 化的意味をもっているか 完全に理解できた。	テキストの文化的意味を 大体理解できた。	テキストのもつ文化的意 味が理解できなかった。



上のルーブリックは自己評価などに使えるものである。活動の
目的、学習者のレベルに応じて、内容を変えるのが望ましい。

自己評価例

4点評価方式のチェックリストの例

次の口頭のタスクに関して、自分を評価してください。

名前 _____

今日の日付 _____

要素 \ レベル	4 完璧にできる	3 多少問題はあるが、 ほぼできる	2 問題がいろいろあり、 自信をもってできない	1 ほとんど、あるいは 全くできない
ものの色を 表現する	☐	☐	☐	☐
洋服のサイズを 表現する	☐	☐	☐	☐
ものの値段を 尋ねたり、 言ったりする	☐	☐	☐	☐
何かを試したい ことを伝える	☐	☐	☐	☐
決定したことを 伝える	☐	☐	☐	☐
洋服の種類を 表現する	☐	☐	☐	☐
洋服、靴、 アクセサリなど を身につける ことを表現する	☐	☐	☐	☐
簡単な買い物 をする	☐	☐	☐	☐

目標達成した日付を書かせるチェックリストの例

完璧にできるようになった項目にチェックマークをつけ、完璧にできると思うようになった日の日付を書きなさい。

項目	完璧にできる	日付
ものの色を表現する	☐	
洋服のサイズを表現する	☐	
ものの値段を尋ねたり、 言ったりする	☐	
何かを試したいことを伝える	☐	
決定したことを伝える	☐	
洋服の種類を表現する	☐	
洋服、靴、アクセサリーなどを 身につけることを表現する	☐	
簡単な買い物をする	☐	

ループリックを用いた例

次の表をもとに自分の会話能力を評価してください。

要素 \ レベル	3	2	1
文法	ほとんどの文が正確であり、文法的間違いは非常に少ない。	文の多くは正確であるが、まだ文法的な問題はある。	正確な文もたまにはあるが、基本的文法にもまだ大きな問題がある。
語彙	語彙量が豊富で、記述に全く問題がない。語彙の使い方も正確。	タスク遂行に必要な基本的な語彙はもっているが、語彙の間違いがよく見られる。	タスク遂行に必要な語彙を欠いており、語彙の用法も間違いが多い。
発音	母語話者の発音に近く、発音の誤りが少ない。	母語の影響は強く見られるが、理解は一応できる。	発音の間違いが多く、理解できない場合がある。
談話のレベル	複雑な構文を巧みに使い、接続詞も豊富で、段落レベルの高度の談話が構成できる。	複雑な構文と接続詞を時には使っているが、基本的には文の連続である。	単純な文の連続で、文の羅列に終わっている。
流暢さ	滑らかな話し方で、談話のポーズ、つまづきがほとんどない。	談話はかなり滑らかで、多少躊躇することはあるが、何とかスムーズに談話を終えようとしている。	談話のなかに長いポーズ、つまづきが多く、談話をスムーズに維持することができない。

週間目標と一体化したチェックリストの例

春学期 第五週

今週の目標

1. 着る、はく、脱ぐなどの語彙を会話で使えるようになる
2. 文法「～てみる」を会話で使えるようになる
3. 文法「～時」の用法を理解する
4. 簡単な読解材料の段落ごとの目的を理解するストラテジーを身につける
5. 日本の若者のファッション文化を理解する
6. ワークブック101ページの漢字の用法を理解する

日付	クラスの前に	クラス活動	クラスの後で	備考
4/28 (月)	- 先週の内容の復習 - 漢字の宿題仕上げ	- 復習クイズ - 漢字の宿題提出 - 教科書149-150ページ - 語彙の練習	語彙の復習	作文の宿題の締め切りは明日
4/29 (火)	- 先週学習した漢字の復習 - 作文の宿題仕上げ、教科書160-162の文法説明を読む	- 漢字クイズ - 文法の練習（～時） - 作文の宿題回収	- 文法の復習 - 文法の宿題（金曜日提出）	アニメ研究会のミーティング、7時から
4/30 (水)	昨日の文法の復習	- 文法の練習（～時） - 教科書151-153ページ - 文化活動	文化に関する読み物を読む	日本人との夕食、カフェテリアで6時から
5/1 (木)	教科書182ページの読解のプレアクティビティをする	- 読解練習（日本の若者のファッション） - 書く練習（宿題） - 漢字（ワークブック101ページ）	- 漢字の復習 - 読解の復習	文法の宿題の締め切りは明日
5/2 (金)	文法の宿題仕上げ	- 文法の口頭練習（～時） - 教科書153-154ページ	文法の復習	来週火曜日は中間試験

チェックリスト

- () 内に目標達成の状況を○△×で書きなさい。
- () 1. 着る、はく、脱ぐなどの語彙を会話で使えるようになる
- () 2. 文法「～てみる」を会話で使えるようになる
- () 3. 文法「～時」の用法を理解する
- () 4. 簡単な読解材料の段落ごとの目的を理解するストラテジーを身につける
- () 5. 日本の若者のファッション文化を理解する
- () 6. ワークブック101ページの漢字の用法を理解する

プレテストとポストテストの例

デパートの洋服売り場に行って、上着を買います。予算は1万円です。
次のお客さんのセリフ（下線部）に適切な表現を書きなさい。

プレテスト

店員 いらっしゃいませ。何をお探しでしょうか。

客 上着がほしいです。

店員 これはいかがですか。今流行のスタイルです。

客 いくらですか。

店員 2万8千円です。とてもお安くなっております。

客 高すぎです。1万円のありますか。

店員 では、こちらはいかがですか。

ポストテスト

店員 いらっしゃいませ。何をお探しでしょうか。

客 私の上着を探しているんですが……

店員 これはいかがですか。今流行のスタイルです。

客 いいですね。お値段もよさそうですね。

店員 2万8千円です。とてもお安くなっております。

客 うーん、これはちょっと……

店員 では、こちらはいかがですか。

プレテストとポストテストを比べて、どのような違いがありますか。それはなぜですか。

教科書でショッピングの仕方を学んだ後、使う表現が間接的になったと思います。間接的に言ったほうが、丁寧に聞こえることがわかったからです。

「学習のめやす」プロジェクトの歩みと今後

「学習のめやす試行版」の作成から普及・検証まで(2005年12月-2009年2月)

2005年12月 TJFは、文部科学省の「学力向上拠点形成事業」のひとつである「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プログラム」に申請

2006年1月 同省の委嘱事業に決定。プロジェクトチーム（日本の高校および大学の中国語教育、韓国語教育、国際理解教育の専門家ほかで構成）を発足。以降、中国語・韓国語部会別および合同の会合を開催

2007年3月 『高等学校の中国語と韓国朝鮮語 学習のめやす（試行版）』を発行。各都道府県の実教育委員会、中国語・韓国語の教育を実施する高校・大学等に配付

試行版（A判／178頁）の内容は、TJFのウェブサイトからPDFでダウンロードできます。
www.tjf.or.jp/jp/publication/wakaru/meyasu2007v00.html

2007年4月-2009年2月 試行版の内容を全国の中国語・韓国語教師と共有し、意見交換を実施

- ・「学習のめやす」が提唱する学習目標、内容、方法についてアンケート調査を実施
- ・高校の中国語教師と韓国語教師を対象とする研修会・ワークショップを開催
- ・中国語教育・韓国語教育の専門家を交えて改訂版作成の検討会を開催

試行版発行後の事業は（公財）かめのり財団の助成を受けて実施

「学習のめやす試行版」作成プロジェクトメンバー

【推進委員会】〈委員長〉中野佳代子（国際文化フォーラム理事兼事務局長）／〈委員〉鈴木啓修（埼玉県教育局指導部高校教育指導課指導主事）

【中国語部会】植村麻紀子（埼玉県立和光国際高等学校ほか講師）／胡興智（日中学院専任講師）／千場由美子（大阪府立柴島高等学校教諭）／藤井達也（埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭）／古川裕（大阪外国語大学教授）／森茂岳雄（中央大学教授）／山田眞一（富山大学教授）

【韓国語部会】任喜久子（大阪府立阪南高等学校教諭）／康龍子*（建国学園高等学校教諭）／孫永善*（神奈川県立川崎高等学校非常勤講師）／秋賢淑（二松学舎大学、同附属高等学校ほか講師）／長渡陽一（立教新座高等学校ほか講師）／野間秀樹（東京外国語大学大学院教授）／長谷川由起子（九州産業大学専任講師）／増島香代（神奈川県立横浜清陵総合高等学校教諭）／山下誠（神奈川県立鶴見総合高等学校教諭）／油谷幸利（同志社大学教授）

【アドバイザー】當作靖彦（米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授）／吉岐久子（元米国ウィスコンシン州教育庁日本語教育アドバイザー）／吉田研作（上智大学教授）

【事務局】国際文化フォーラム 水口景子（事務局主任）／小栗章（プログラム・オフィサー）

「外国語学習のめやす 2012」作成まで(2009年3月-2012年3月)

2009年3月 プロジェクトチームを新たに発足し、中国語・韓国語部会別の会合と合同の会合を随時開催（2012年3月まで）

2011年7月 中国語・韓国語を担当する高校教師の合同研修会を実施（3回目）
ミニシンポジウム「21世紀の日本の外国語教育を考える」を開催

2012年3月 『外国語学習のめやす 2012』を発行
「めやす」発行記念シンポジウム「^{あす}未来を生きぬくための外国語教育に挑む」を共催

2012年4月 「めやすウェブサイト」を公開（予定）

以上の事業は、(社)東京倶楽部と(公財)かめのり財団の助成、在日本中国大使館教育処と駐日韓国大使館韓国文化院の特別協力を得て実施

「外国語学習のめやす 2012」作成プロジェクトメンバー

【全体監修・推進】**當作靖彦**（米国カリフォルニア大学サンディエゴ校教授）／**中野佳代子**（国際文化フォーラム理事）

【中国語部会】**植村麻紀子**（神田外語大学専任講師）／**胡興智**（日中学院専任講師）／**胡玉華**（関西学院大学常勤講師）／**千場由美子**（大阪府立柴島高等学校教諭）／**藤井達也****（埼玉県立伊奈学園総合高等学校教諭）／**森茂岳雄**（中央大学教授）／**山崎直樹**（関西大学教授）

【韓国語部会】**任喜久子**（大阪府立花園高等学校教諭）／**釜田聡**（上越教育大学教授）／**金順玉**（フェリス学院大学非常勤講師）／**金孝卿**（国際交流基金日本語国際センター専任講師）／**中川正臣**（元培材大学専任講師〈韓国〉）／**阪堂千津子**（東京外国語大学非常勤講師）／**山下誠****（神奈川県立鶴見総合高等学校教諭）

【アドバイザー】**稲垣忠**（東北学院大学准教授）／**佐藤郡衛**（東京学芸大学副学長）／**吉田研作**（上智大学教授）

【事務局】国際文化フォーラム **水口景子**（事務局長）／**長江春子**（プログラム・オフィサー）／**中野敦**（プログラム・オフィサー）

拡大メンバー《単元案の作成にご協力いただいた方々》

【中国語】**岸昌代**（大阪府立桃谷高等学校教諭）／**須田美知子**（東大阪市立立新高等学校常勤講師）／**鷹野由紀子**（関西学院千里国際中学部・高等部非常勤講師）／**山崎順平**（宮城県古川高等学校教諭）／**若森幸子**（埼玉県立戸田翔陽高等学校非常勤講師）

【韓国語】**李貞榮**（大阪府立佐野工科高等学校教諭）／**川上知美**（大阪府立桃谷高等学校教諭）／**澤邊裕子**（宮城学院女子大学准教授）／**中野徹生**（富山県立伏木高等学校教諭）／**増島香代**（神奈川県立横浜清陵総合高等学校教諭）

敬称略、五十音順、所属・肩書きはプロジェクト実施当時

* 試行版発行後、検証・普及に参加 ** 部会リーダー

TJFの今後の取り組み(2012年3月～)

■めやすウェブサイトの充実

TJFのRingoウェブサイト (www.tjf.or.jp/ringo/) に「めやす」コーナーを開設し、本冊子の内容に加えて、3領域×3能力+3連繋の授業づくりに役立つ学習内容例（話題分野別語彙・表現例、文化事象例、グローバル社会課題例など）や学習活動例（年間指導計画案、話題分野別单元案、各種活動例など）、評価ルーブリック例などを提供します。今後、広く学習活動の実践例や研究例を収集し、ウェブサイトを通じて共有していくことで、「めやす」を取り入れた授業づくりをサポートします（5頁の内容構成参照）。

■研修の実施

2009年より中国語・韓国語をはじめとする外国語教師を対象に、「めやす」が提案する外国語教育の考え方や授業づくりの方法を身につけることを目的とした研修を毎夏行なってきましたが、今後は全国各地で小規模のワークショップも実施していく予定です。研修では、冊子で紹介した学習活動のほか、4技能（読む、書く、聞く、話す）、協働力や高度な思考力、情報活用力を育む効果的な活動、文化を取り入れた活動例、学習者の関心・意欲を高める活動などについても、テーマとして取りあげていきます。また、研修キットを作成し、講師やコーディネーターの育成にも取り組んでいきます。

■交流の場づくり

2008年から、隣語教育に取り組む地域の教育行政者や学校の管理職を隣国に派遣する事業を実施し、隣語・隣国に対する理解を深めていただいています。一方、隣国で日本語教育に取り組む地域の教育行政者や学校の管理職を招聘し、日本の隣語教育取り組み校とつなげ、交流の機会も作っています。今後は引きつづき、隣語担当教師が海外研修プログラムに参加できるように協力するとともに、日中韓において、互いの言語を教える教師同士、同じ言語を教えている教師同士の交流を促進していきます。さらに、互いの言語を学ぶ学習者が交流できる場を作っていきます。TJFがコーディネーターの役割を果たすことで、これらの交流が有機的につながり、相乗効果が生まれるようにしたいと思います。

おわりに

公益財団法人国際文化フォーラム（TJF）は、日本の高校、大学の中国語・韓国語教育を充実させたいという意思をもつメンバーから成るプロジェクトチームを立ちあげ、5年以上にわたって学習の指針づくりの作業に取り組んできました。こうした民間の自主的な研究が、文部科学省の委嘱事業として認められスタートできたことは大変意義深いことでした。その後、公益財団法人かめのり財団や社団法人東京倶楽部からの助成金、講談社をはじめとするTJFの出捐企業や賛助会員からの寄附金に支えられ、多くの関係者、関係機関・団体からのご助言、ご協力を得て、プロジェクトを継続することができました。このたびその成果を本冊子として出版するにいたりましたことに改めて深く感謝の意を表します。

先行例が少なく、試行錯誤で切り拓いてきた本プロジェクトの成果は、まさにメンバーの多大なるエネルギーと真摯なる姿勢、そして多忙な日々のなかでプロジェクトのために割いてくださった貴重な時間と英知の賜物といえます。メンバーは、それぞれの立場の違いや言語の違いを超えて、日本の隣語教育ひいては外国語教育全体のために協力しあってきました。何より隣語教育に対する熱い想いと、教育者としての使命感がプロジェクトを推進する原動力となっていたのではないかと思います。特に、コミュニケーション能力指標をはじめ、ウェブサイトに掲載予定の話題分野・言語レベル別の単元案と、年間指導計画案、語彙・表現例、文化事象例は、メンバーが最も苦勞した力作です。

そして、メンバー全員に先進的な外国語教育の息吹を伝えつつ、忍耐強くプロジェクトの進展を見守り導いてくださった當作靖彦氏をはじめ、吉田研作氏（外国語教育）、佐藤郡衛氏（国際理解教育）、稲垣忠氏（情報教育）から貴重な助言や協力を得て、「めやす」の完成度を高めることができました。とりわけ當作教授には、日米を幾度となく往復していただき、本書の執筆に協力していただきました。また「めやす」に準拠した教師研修の主任講師も務めていただいています。プロジェクトの監修者である當作教授、プロジェクトメンバー、そして「めやす」作成にご協力いただいた全てみなさまに心から感謝申し上げます。

TJFは、本年設立25周年を迎えますが、これまで日本における隣語教育を推進するとともに、海外の小中高校における外国語としての日本語教育をサポートする事業を展開してきました。今後は「めやす」の理念である「つながりの実現」をめざして、国内外の外国語教育を文字どおりつなげ、小中高校生が互いの「ことばと文化」を学び、交流できる場づくりにさらに力を注いでいきます。

さらに、日中韓を中心とする日本の近隣地域の学校教育において、互いの言語を教え、互いに協力する「相互言語教育」の体制が作られるように働きかけを行なっていきたいと考えています。そして、日本国内の隣語教育ばかりでなく、外国語教育全体で連携し、協力体制を築き、未来を生きぬくための外国語教育が実現できるよう、より一層の努力をしていきます。

公益財団法人 国際文化フォーラム

外国語学習のめやす 2012
高等学校の中国語と韓国語教育からの提言

2012年3月1日 初版発行
2016年8月1日 PDF版発行

発行 ————— **公益財団法人 国際文化フォーラム(TJF)**

〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル3階

TEL: 03-5981-5226 FAX: 03-5981-5227

Email: forum@tjf.or.jp URL: www.tjf.or.jp

編集 ————— **株式会社ココ出版**

デザイン・装丁 ————— **長田年伸**

ロゴ・イラスト♥☺ ————— **小山睦浩(mograph)**

執筆担当 ————— **當作靖彦・中野佳代子**

印刷 ————— **豊国印刷株式会社**

©2012 by The Japan Forum, Printed in Japan

本冊子は社団法人東京倶楽部および公益財団法人かめのり財団の助成金により
制作・出版されたものです。心より感謝申し上げます。

